

# 和気・堀江の遺跡

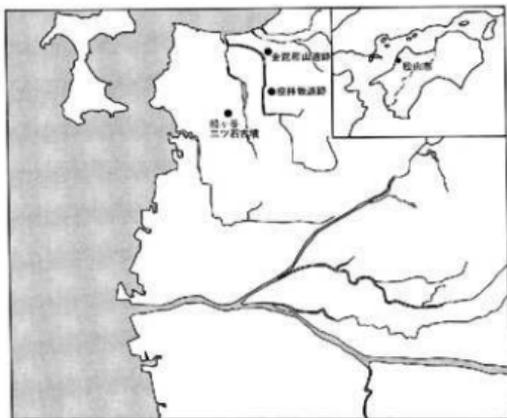
座拝坂・金毘羅山  
船ヶ谷三ッ石古墳

1993

松山市教育委員会  
財団法人松山市生涯学習振興財団  
埋蔵文化財センター

# 和気・堀江の遺跡

座拝坂・金毘羅山  
船ヶ谷三ツ石古墳



1993

松山市教育委員会  
財団法人松山市生涯学習振興財団  
埋蔵文化財センター



卷頭写真 座押板遺跡SB3出土品

## 序

この報告書は、平成元年から同2年にかけて松山市教育委員会文化教育課が松山市及び民間業者から委託を受け、発掘調査を実施し、その結果を財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターがまとめたものです。

松山平野北東部に広がる高観山系の南西麓には、弥生時代の遺跡や古墳が数多く分布していますが、これまであまり多くの報告が成されていないのが現状です。昨年度末、当地域での第一段ともいえる報告書「山越・久万ノ台の遺跡」が刊行されたのに続き、第二段となる本報告書は、弥生時代後期の住居址から一括遺物を出土した「座押坂遺跡」と「金毘羅山遺跡」、周溝内から6世紀初期の須恵器一括資料を検出した「船ヶ谷ニッ石古墳」の三遺跡についてまとめた調査報告です。これによって、堀江・和氣地区における弥生時代後期の集落の立地と形態、さらには後期古墳の当地域での存在が明らかなものとなり、大きな成果をあげることができました。

埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力をたまわった関係各位の方々には心から感謝申し上げます。次第です。

今後、松山平野北部地域において国道196号線バイパス、西部環状線建設等の開発行為に伴う発掘調査が増加することも考えられ、本書がそうした調査研究の一助となり、ひいては文化財保護、教育文化の向上に寄与できることを願うものです。

平成5年9月30日

財団法人 松山市生涯学習振興財団

理事長 田 中 誠 一

## 例 言

1. 本報告書は、松山市教育委員会文化教育課（松山市埋蔵文化財センター）が平成元年11月に実施した松山市谷町325-1・326-1に所在する座拝坂（ざわいざか）遺跡、平成2年1月に実施した松山市平出町824-1に所在する全毘羅山（こんびらやま）遺跡、平成2年2月に実施した松山市船ヶ谷町2114-1他に所在する船ヶ谷ニッ石（ふながたに・みつし）古墳の発掘調査報告書である。
2. 遺構の略号は、奈良国立文化財研究所の方式にしたがい、住居址：S B、土壇：S K、溝：S D、棚列：S A、性格不明：S Xのように表示し、通し番号を1から付記した。
3. 遺物の実測図は、弥生上器（中・後期）・土師器は1/4、弥生上器（前期）・須恵器・石器は1/3、鉄器は1/2を基本とする。なお、遺物実測図・遺構測量図のスケール下には縮分を付記した。
4. 遺構・遺物の実測と製図は、松村淳、水口あをい、持永哲子、上西真弓、生鷹千代、西岡早苗、山下満佐子、大西陽子、松山桂子、三木和代、渡部美美、兵頭千恵、好光明日香が行った。遺構の撮影は担当者が、遺物の撮影は大西朋子が担当した。
5. 調査においては、愛媛大学法文学部下條信行先生の御指導と御教示を賜った。記して感謝申し上げます。
6. 本文の執筆は松村淳、梅木謙一、宮内慎一、水口あをい、平岡直美が担当し、浄書は高橋恒、生鷹千代が行った。
7. 編集は松村淳、梅木謙一が担当し、編集・校正においては水口あをいの協力を得た。
8. 本報告書に関する図面と遺物は、松山市立埋蔵文化財センターが保管・収蔵している。

# 本文目次

第1章 はじめに	〔松村・梅木〕	
1. 調査に至る経緯	.....	2
2. 調査・刊行組織	.....	3
3. 環境		
第2章 座拝坂遺跡の調査	〔松村・梅木・宮内〕	
1. 調査の経過	.....	8
2. 層位	.....	10
3. 遺構と遺物	.....	13
4. 小 結	.....	35
第3章 金毘羅山遺跡の調査	〔松村・梅木〕	
1. 調査の経過	.....	46
2. 層位	.....	47
3. 遺構と遺物	.....	49
4. 小 結	.....	68
第4章 船ヶ谷三ツ石古墳の調査	〔梅木・平岡〕	
1. 調査の経過	.....	74
2. 層位	.....	76
3. 遺構と遺物	.....	79
4. 小 結	.....	86
第5章 座拝坂遺跡出土の弥生前期土器	〔梅木・水口〕	89
第6章 調査の成果と課題	〔梅木〕	97

# 挿 図 目 次

第1章	はじめに	
第1図	松山平野北部の主要遺跡分布図 (縮尺1/50,000)	5
第2章	座拝坂遺跡の調査	
第2図	調査地位置図 (縮尺1/2,500)	9
第3図	層位図 (縮尺1/100)	11
第4図	遺構配置図 (縮尺1/100)	12
第5図	S B 3 測量図 (縮尺1/50)	15
第6図	S B 3 出土遺物実測図 (1) (縮尺1/4)	16
第7図	S B 3 出土遺物実測図 (2) (縮尺1/4)	17
第8図	S B 3 出土遺物実測図 (3) (縮尺1/4)	18
第9図	S B 3 出土遺物実測図 (4) (縮尺1/4)	19
第10図	S B 3 出土遺物実測図 (5) (縮尺1/4・1/3)	20
第11図	包含層出土遺物 (弥生) 実測図 (1) (縮尺1/3)	22
第12図	包含層出土遺物 (弥生) 実測図 (2) (縮尺1/3)	23
第13図	包含層出土遺物 (弥生) 実測図 (3) (縮尺1/3)	24
第14図	包含層出土遺物 (弥生) 実測図 (4) (縮尺1/3・1/4)	25
第15図	包含層出土遺物 (弥生) 実測図 (5) (縮尺1/4)	27
第16図	包含層出土遺物 (弥生) 実測図 (6) (縮尺1/4・1/3・1/2)	28
第17図	S B 1 測量図 (縮尺1/100)	29
第18図	包含層出土遺物 (須恵器) 実測図 (1) (縮尺1/3)	30
第19図	包含層出土遺物 (須恵器) 実測図 (2) (縮尺1/3)	31
第20図	S K 1・2 測量図 (縮尺1/40)	33
第21図	S K 2 出土遺物実測図 (縮尺1/4)	
第22図	包含層出土遺物 (土師器) 実測図 (縮尺1/4)	34
第3章	金毘羅山遺跡の調査	
第23図	調査地位置図 (縮尺1/5,000)	46
第24図	基本層位図	47
第25図	遺構配置図 (縮尺1/500)	48
第26図	弥生時代の遺構配置図 (縮尺1/400)	49
第27図	S B 1 測量図 (縮尺1/60)	50
第28図	S B 2 測量図 (縮尺1/60)	51
第29図	S B 2 出土遺物実測図 (1) (縮尺1/4)	52

第30図	SB 2 出土遺物実測図 (2) (縮尺 1/4・1/3)	53
第31図	SB 3 測量図 (縮尺 1/100)	54
第32図	SB 3 出土遺物実測図 (縮尺 1/4・1/3)	55
第33図	SK 1・2・3 測量図 (縮尺 1/40)	56
第34図	SK 4・5・6 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	57
第35図	SK 7 測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/40・1/4)	58
第36図	表採遺物実測図 (縮尺 1/4)	
第37図	古墳時代の遺構配置図 (縮尺 1/800)	59
第38図	1号墳測量図 (縮尺 1/200)	60
第39図	1号墳上層図・出土遺物実測図 (縮尺 1/100・1/3・1/4)	
第40図	2号墳測量図・出土遺物実測図 (縮尺 1/200・1/100・1/4)	61
第41図	3号墳測量図 (縮尺 1/200・1/100)	62
第42図	4号墳測量図 (縮尺 1/200・1/100)	63
第43図	表採遺物実測図 (縮尺 1/3)	64
第44図	掘立柱建物配置図 (縮尺 1/200)	
第45図	掘立柱建物 1 測量図 (縮尺 1/100)	65
第46図	掘立柱建物 2 測量図 (縮尺 1/100)	66
第47図	掘立柱建物出土遺物実測図 (縮尺 1/3)	67
<b>第 4 章 船ヶ谷三ツ石古墳の調査</b>		
第48図	調査地位位置図 (縮尺 1/5,000)	74
第49図	調査区測量図 (縮尺 1/250)	75
第50図	層位図 (縮尺 1/80)	77
第51図	1号墳測量図 (縮尺 1/80)	80
第52図	1号墳遺物出土状況 (縮尺 1/50・1/8)	82
第53図	1号墳出土遺物実測図 (1) (縮尺 1/3)	83
第54図	1号墳出土遺物実測図 (2) (縮尺 1/3)	84
第55図	1号墳出土遺物実測図 (3) (縮尺 1/3・1/4)	85
<b>第 5 章 座拝坂遺跡出土の弥生前期土器</b>		
第56図	座拝坂遺跡出土資料 (縮尺 1/6・1/4)	90
第57図	南中学校構内遺跡出土資料 (縮尺 1/6)	92

## 写真図版目次

### 第2章 座拝坂遺跡の調査

- 図版1. 1 調査地近景(北より) 2 遺構検出状況(西より)  
図版2. 1 SB3 遺物出土状況(南より) 2 SB3(南より)  
図版3. 1 SB1(南より) 2 SK1(東より)  
図版4. 1 SB3 出土遺物①  
図版5. 1 SB3 出土遺物②  
図版6. 1 SB3 出土遺物③  
図版7. 1 SB3 出土遺物④  
図版8. 1 包含層出土遺物(弥生)①  
図版9. 1 包含層出土遺物(弥生)②  
図版10. 1 包含層出土遺物(弥生)③  
図版11. 1 包含層出土遺物(弥生)④  
図版12. 1 包含層出土遺物(弥生)⑤  
図版13. 1 包含層出土遺物(古墳)  
図版14. 1 SK2 出土遺物・包含層出土遺物(古代)

### 第3章 金毘羅山遺跡の調査

- 図版15. 1 調査地遠景(南より) 2 松山平野北部を望む(北東より)  
図版16. 1 調査区西部完掘状況(南東より) 2 SB1(東より)  
図版17. 1 SB2(北より) 2 SB2 遺物出土状況(北より)  
図版18. 1 SK1(南より) 2 SK7(南より)  
図版19. 1 1号墳丘(西より) 2 SD1(北東より)  
図版20. 1 掘立柱建物址(北より) 2 掘立柱建物1(西より)  
図版21. 1 掘立柱建物2(南より) 2 掘立柱建物2(西より)  
図版22. 1 SB2 出土遺物①  
図版23. 1 SB2 出土遺物②  
図版24. 1 SB3・SK6・表採・1号墳・2号墳出土遺物  
図版25. 1 掘立1 出土遺物①  
図版26. 1 掘立1 出土遺物②  
図版27. 1 掘立1 出土遺物③  
図版28. 1 掘立1 出土遺物④  
図版29. 1 掘立1 出土遺物⑤  
図版30. 1 掘立1 出土遺物⑥

図版31.	1	掘立1出土遺物⑦
第4章 船ヶ谷三ツ石古墳の調査		
図版32.	1	調査地遠景①(東より)
	2	調査地遠景②(北東より)
図版33.	1	1号墳検出状況(南より)
	2	1号墳周溝①(南より)
図版34.	1	1号墳周溝②(北西より)
	2	1号墳周溝上層(西より)
図版35.	1	1号墳周溝遺物出土状況①(東より)
	2	同②(北西より)
図版36.	1	1号墳①(北西より)
	2	1号墳②(南西より)
図版37.	1	1号墳出土遺物①
図版38.	1	1号墳出土遺物②
図版39.	1	1号墳出土遺物③
図版40.	1	1号墳出土遺物④

## 表目次

表1	調査地一覧	2
第2章 座押坂遺跡の調査		
表2	S B 3 出土遺物観察表(土製品・石製品)	36
表3	包含層出土遺物(弥生)観察表(土製品・石製品)	38
表4	包含層出土遺物(古墳)観察表(土製品)	42
表5	S K 2 出土遺物観察表(土製品)	43
表6	包含層出土遺物(古代)観察表(土製品)	44
第3章 金毘羅山遺跡の調査		
表7	竪穴式住居址一覧	69
表8	上墳一覧79	
表9	S B 2 出土遺物観察表(土製品・石製品)	70
表10	S B 3 出土遺物観察表(土製品・石製品)	71
表11	S K 6 出土遺物観察表(土製品)	
表12	S K 7 出土遺物観察表(土製品)	
表13	表採遺物観察表(土製品)	
表14	1号墳出土遺物観察表(土製品)	
表15	2号墳出土遺物観察表(土製品)	72
表16	表採遺物観察表(土製品)	
表17	掘立柱建物1・2出土遺物観察表(土製品)	
第4章 船ヶ谷三ツ石古墳の調査		
表18	1号墳出土遺物観察表(土製品)	87

# 第1章 はじめに

## 1. 調査に至る経緯

平成元年に、松山市谷町、平田町、船ヶ谷町内の3ヶ所において埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

確認願いが申請された谷町325-1他は松山市の指定する埋蔵文化財包含地の「41 潮見古墳群遺物包含地」内に、平田町824-1は「40 堂ヶ谷古墳」内に、船ヶ谷町2214-1他は「17 東山町古墳群」内にあり、周知の遺跡地として知られている。

堀江湾を望む東・西の丘陵地帯では、これまでに数多くの古墳が調査され（註）、古墳時代の松山平野北部域の主要な墳墓地帯であったことが明らかになっている。

文化教育課では、確認願いが申請された3地点について埋蔵文化財の有無と、その遺跡の範囲や性格を確認するため、同年に順次確認調査を実施した。

書類審査及び確認調査の結果を受け、文化教育課と申請者及び関係者は発掘調査について協議を行った。発掘調査は、遺跡が消失する地域に対し、当該地域の集落域及び墳墓域解明を主目的とし、文化教育課及び松山市埋蔵文化財センターが主体となり、申請者各位の協力のもと平成元年～2年度の間に実施した。

表1 調査地一覧

遺跡名	所在(松山市)	面積(m <sup>2</sup> )	調査期間
座 押 取	谷町325-1他	995	平成元年11月21日～2年1月18日
金 尾 羅 山	平田町824-1	1,100	平成2年1月18日～同年4月3日
船ヶ谷三ツ石	船ヶ谷町2214-1他	519	平成2年2月13日～同年9月30日

(注) 調査期間は、野外調査と室内調査の期間をいう。

なお、平成元年度～平成3年9月30日の間は松山市教育委員会文化教育課・松山市埋蔵文化財センターが主体となり野外調査及び室内調査を行い、平成3年10月1日以降は財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが調査主体となり室内調査及び報告書刊行事業を実施した。 (梅木)

### (註)

1. 堀江湾を望む東内の丘陵には多くの古墳群が存在する。以下、調査報告書を記述する。

宮崎泰好 1988 『高月山古墳群調査報告書』松山市教育委員会

池田学・宮崎泰好 1989 『船ヶ谷向山古墳』『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会

岡野 保 1980 『北谷古墳(墳丘・石室実測調査報告書)』松山商科大学史跡研究会

深田茂敏 1991 『北谷王神ノ木古墳・塚本古墳』松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

## 2. 調査・刊行組織 [平成5年8月1日現在]

松山市教育委員会	教育長	池田 尚郷
生涯教育部	部長	渡辺 和彦
	次長	二好 俊彦
文化教育課	課長	松平 泰定
(財)松山市生涯学習振興財団	理事長	山中 誠
	事務局長	渡辺 和彦
	事務次長	一色 正十
埋蔵文化財センター	所長	河川 雄二
	次長	山所 延行
	調査係長	田城 武志
	調査主任	栗田 正芳 (文化教育課職員)

## 3. 環境 (第1回)

座拝坂遺跡は、松山平野北東部に聳える高縄山系分岐丘陵の南裾部、平野の二大河川石手川の分流である寺井川の右岸の住宅地に立地している。国道196号沿線の古くは農村地帯で、西方には太山寺山塊が遠望され、この狭間には東西3km、南北7kmの地溝帯がみられる。

西の山塊北端は海岸線に接し、丘陵上には坂浪古墳群、高月山古墳、太山寺古墳群、船ヶ谷古墳群、東山町古墳群が南へと続き、広範に古墳群が形成されている。昭和62年に松山市教育委員会が調査を行った高月山古墳は、箱式石棺を主体部とし、布留式併行期の壺、銅鏡などが出土している。また、昭和63年調査の向山古墳では、墳形規模は不詳とされながら、くびれ部で川筒埴輪列と形象埴輪の出土がみられている。また丘陵東面の地溝帯縁辺部には、縄文時代晩期を主体とする大瀬遺跡、船ヶ谷遺跡、さらには弥生時代前期の三光遺跡が存在する。大瀬遺跡では彩文土器や朱漆塗結歯整髯が出土し、船ヶ谷遺跡では赤漆塗銅状や漆塗碗が出土している。

一方、東方の高縄山系西麓には、6世紀代の古墳が所在する北谷古墳群、さらには、7世紀初頭の北谷王神ノ木古墳が知られる。本古墳群と同山系に属する南の傾斜面には、弥生時代前期末から後期に至る潮見遺跡、宮ノ谷遺跡が所在する。

座拝坂遺跡は、潮見遺跡、潮見山古墳群包含地内にあつて、地域内には独立丘陵の室岡山(標高40.5m)が所在する。山の中腹部には薬師如来を本尊とする蓮華寺があり、境内には県内唯一とされる阿蘇凝灰岩の舟形石棺の身部がみられる。ちなみに座拝坂遺跡は、室岡山の北東50mに位置する。

## はじめに

金毘羅山遺跡は、この地より北1kmの平田町に位置する。当地域は高縄山系西麓部の、いわゆる山懐にいただかれた古くは農村地域である。町内には、火山積、月読、高流、雷の諸神を祭神とする旧郷社阿沼美神社や、聖観音を木尊とする常福寺、金毘羅の尊体を安置した金毘羅宮が存在する。「和名抄」によれば、当地域は、伊予国14群のうち、和気郡人内郷に属し、十城別上の後裔が、伊予別君（いよわけのみみ）と称し（日本書紀）、郡司に任ぜられたであろうとある。中世には、河野氏の家臣久枝氏、大内氏の統治下にあり、海上交通の要地が窺える。また、熟田津の具体的位置諸説の和気・堀江説の港があったと推定される地域でもある。金毘羅山遺跡は、寺領が考えられる常福寺、金毘羅宮の裏山に立地する斜面である。

船ヶ谷三ツ石古墳は、座拝坂遺跡・金毘羅山遺跡の対面にある丘陵地に位置する。高月山古墳をはじめとする多くの古墳が存在する丘陵地帯のなかにあり、松山平野の古墳時代墳墓域の主要なものの一地域となっている。三ツ石古墳は、東山町古墳群と呼ばれる古墳時代中期～後期の古墳群内にある。（松村・梅本）

なお、本報告書作成にあたり、以下の文献を参考にした。

### 〔参考文献〕

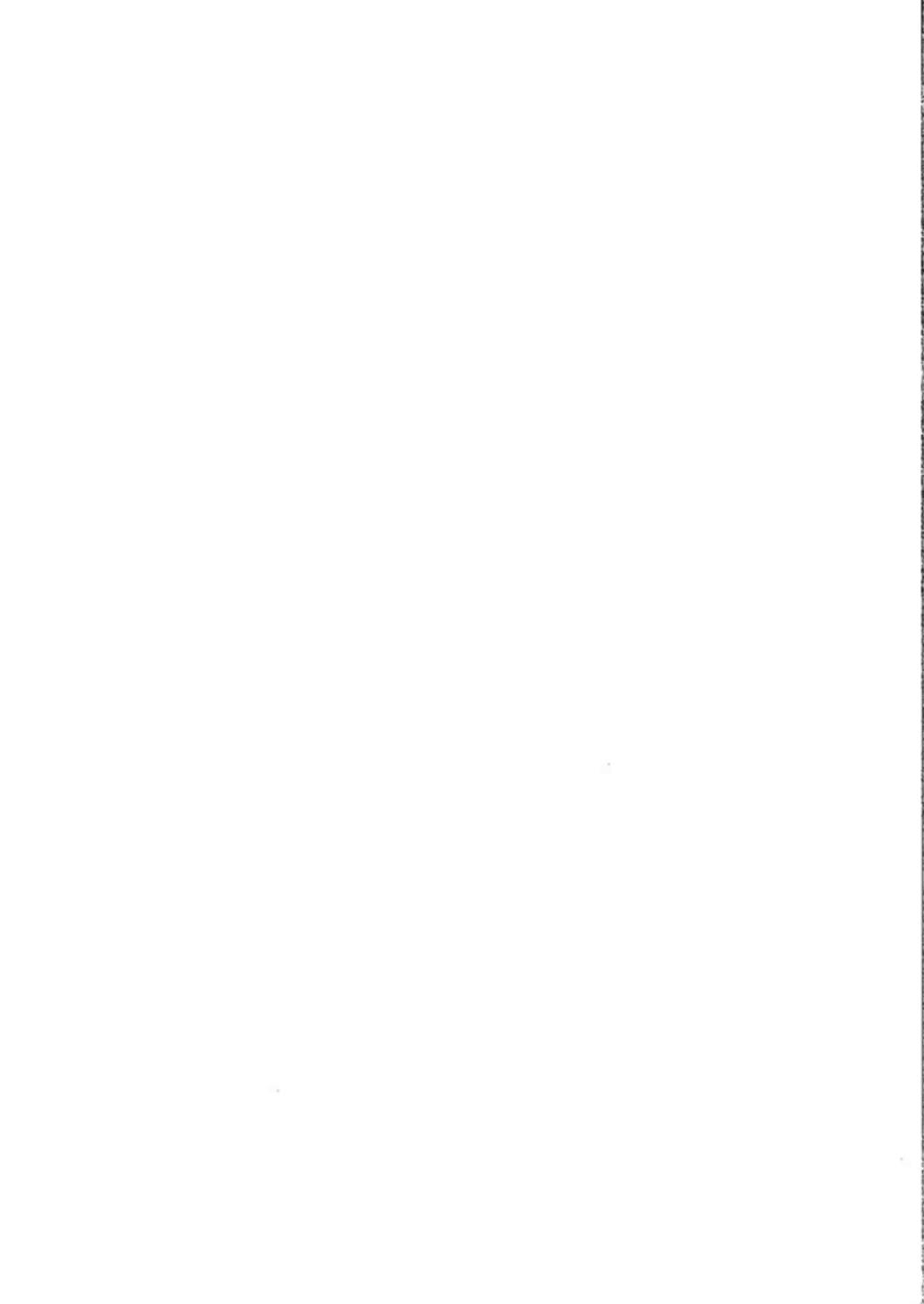
- 谷若 倫郎 1987 『八堂山遺跡Ⅱ』 愛媛県埋蔵文化財調査センター 総理62-1  
角山 幸洋 1985 『講座日本技術の歴史3 紡織』 日本評論社  
宮本 一夫 1989 『藤子・樽味遺跡の調査』 愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅰ  
中野 良一 1988 『愛媛県における古代末から中世の土器様相』 『中近世土器の基礎研究Ⅳ』  
太田 英蔵 1983 『弥生時代Ⅲ 紡織具』 『日本の考古学』 河出書房  
下関市教育委員会 1981 『綾羅木郷遺跡』  
愛媛県史編纂委員会 1982 『愛媛県史 原始 古代Ⅰ』  
松山市 1987 『松山市史料集 考古編Ⅱ』 第二巻  
奈良国立文化財研究所 1981 『平城京 左京四條西坊九坪 発掘調査報告』  
栗田 茂敏 1991 『北谷王神ノ木古墳・塚本古墳』 松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター  
梅本 謙一 1991 『松山平野の弥生後期土器一編年試案一』 『松山大学構内遺跡』 松山大学・松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター



(S = 1 : 50,000)

- |               |             |            |          |         |             |
|---------------|-------------|------------|----------|---------|-------------|
| 1 坂渡古墳群       | 2 高月山古墳群    | 3 大山寺古墳群   | 4 北山古墳群  | 5 東山古墳群 | 6 向山古墳      |
| 7 大塚遺跡        | 8 三光遺跡      | 9 船ヶ谷遺跡    | 10 権江遺跡  | 11 北谷古墳 | 12 北谷正神ノ木古墳 |
| 13 権現古墳群      | 14 金懸羅山遺跡   | 15 蓮華寺舟形石椁 | 16 産拜坂遺跡 | 17 瀬見遺跡 | 18 宮ノ谷遺跡    |
| 19 愛媛大学(文京遺跡) | 20 船ヶ谷三ツ石古墳 |            |          |         |             |

第1図 松山平野北部の主要遺跡分布図



第 2 章

座 扨 坂 遺 跡

## 第2章 座拝坂遺跡の調査

### 1. 調査の経過

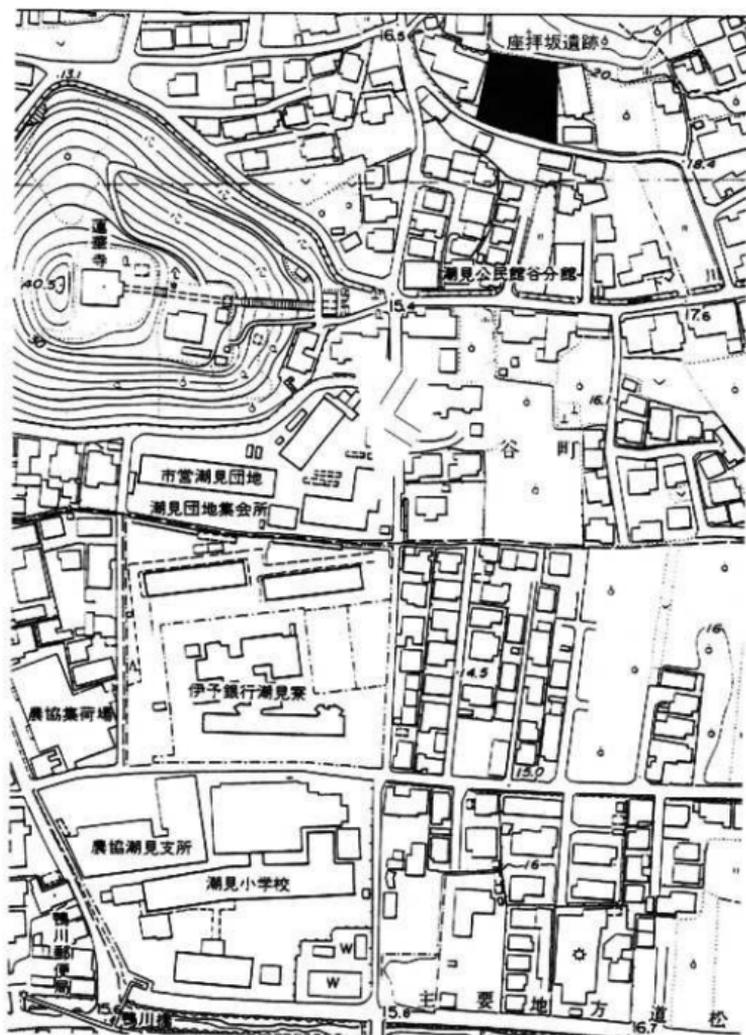
#### (1) 調査の経緯

平成元年7月31日、株式会社ディック不動産情報センターより、松山市谷町325-1、326-1番地の宅地化に伴う埋蔵文化財の確認申請が出された(第2図)。松山市教育委員会文化教育課は、平成元年8月に試掘調査を行った。その結果、古墳時代の上器が確認され、当該地における埋蔵文化財調査の必要性が認められた。調査地は北方に低丘陵をひかえ、この南面掘部にあたる。すでに宅地化された農業倉庫の跡地である。南は生活道路に面し、東西は住宅に囲まれた一画である。周囲の地形から、擁壁工事が急を要し、既に着工中の工事の中断を快く引き受けて貰い、再度、両者間で協議、検討の末、本調査を実施することになった。

#### (2) 調査組織

遺跡名	座拝坂遺跡
調査地	松山市谷町325-1・326-1
調査面積	対象面積 995㎡
調査期間	平成元年11月21日～同年12月28日(野外調査) 平成2年1月5日～同年1月18日(室内調査)
調査委託	株式会社 ディック不動産
調査協力	株式会社・糸工務店受援
調査担当	調査員 松村 淳
調査補助員	山本 健一、武智 良夫
調査作業員	近藤 茂、松岡 欣弘、松友 利夫 松本 正義、藤家 厚美、森本 敬三 菅 憲一、岡林 栄二、西尾 文子 好岡 博子、本山 節子、東 るみ子

調査の経過



第2図 調査地位位置図(縮尺1/2500)

## 2. 層位 (第3図)

調査にあたって、東壁・北壁を軸とし、任意に4m四方のグリッドを設定した(第4図)。グリッドは図4に示すように、東から西へA・B・C・D、北から南へ1・2・3とし、A1、B2として表記した。方位は磁北を採用し、出土遺物はグリッドごとに記録しとりあげた。また、図にみるローマ字の小文字は、土層断面の基準点を示している。

本調査区は、西から東へ、さらに北から南へと傾斜する地形である。したがって、南東部が一段と低く、北西方向に登り勾配がみられる。

層位は(第3図)、上から第1層黄色砂質土、第2層黄灰色砂質土、第3層褐色土と黄灰色土の混合土、第4層暗褐色土、第5層褐色土、第6層黒褐色土、第7層暗褐色土、第8層黒色土、第9層黒色土に黄色土が混入、第10層黄色土(地山)の順になる。

第1層の黄色砂質土は造成土で、薄い堆積がみられる。

第2層の黄灰色砂質土は、ほぼ全域にみられる。堆積は45cmから50cmと厚く、東部では斜向が示される。北西部では後述するSB1の北面とSK1が検出される。出土する土器には、弥生土器、土師質土器、須恵器、瓦質土器がみられる。

第3層の混合土は、調査地の西部にみられ、東部と北部には堆積がみられない。堆積は、平均20cm厚が測られ、包含する遺物は須恵器、土師質土器である。

第4層の暗褐色土は堆積状況に凹凸があり、南東部に薄く堆積する。一部に焼土(図4-1)の残存がみられ、弥生土器、須恵器、土師質土器が含まれる。

第5層の褐色土は、厚さ20cmから30cmが測られ、弥生土器、須恵器が出土する。なお上層における弥生土器は後期段階のものであり、この層を境に下層に前期土器がみられるようになる。

第6層の黒褐色土は、南東隅(A3区)を要に、扇状の堆積がみられる。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器がある。

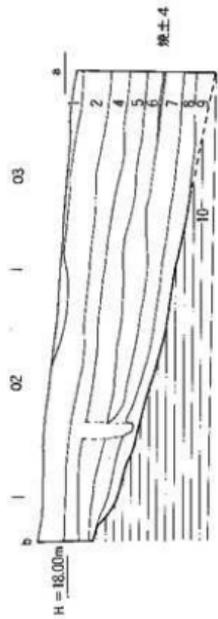
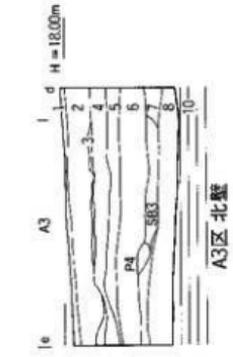
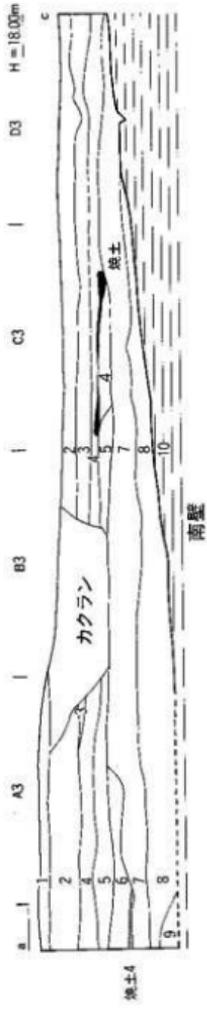
第7層の暗褐色土は、北西部に薄くほぼ全域に堆積する。厚さ60cmが測られる部分もあり、出土土器には、南東部に弥生土器(前期・後期)が多数出土する傾向がみられる。

第8層の黒色土は第7層と同様な傾向がみられる。

第9層の混合土は南東隅で部分的に確認したもので、この層からも弥生前期土器は出土する。第9層は、一部に堆積するようにもみられるが、全様は不明である。

第10層は黄色土で地山となる。なお、第1層より2.4m下ったこの地点では、湧水がみられる。

遺構・遺物の出土状況から第2層を10世紀後半以降、第3～6層を7～10世紀前半、第7～9層を弥生時代と考える。



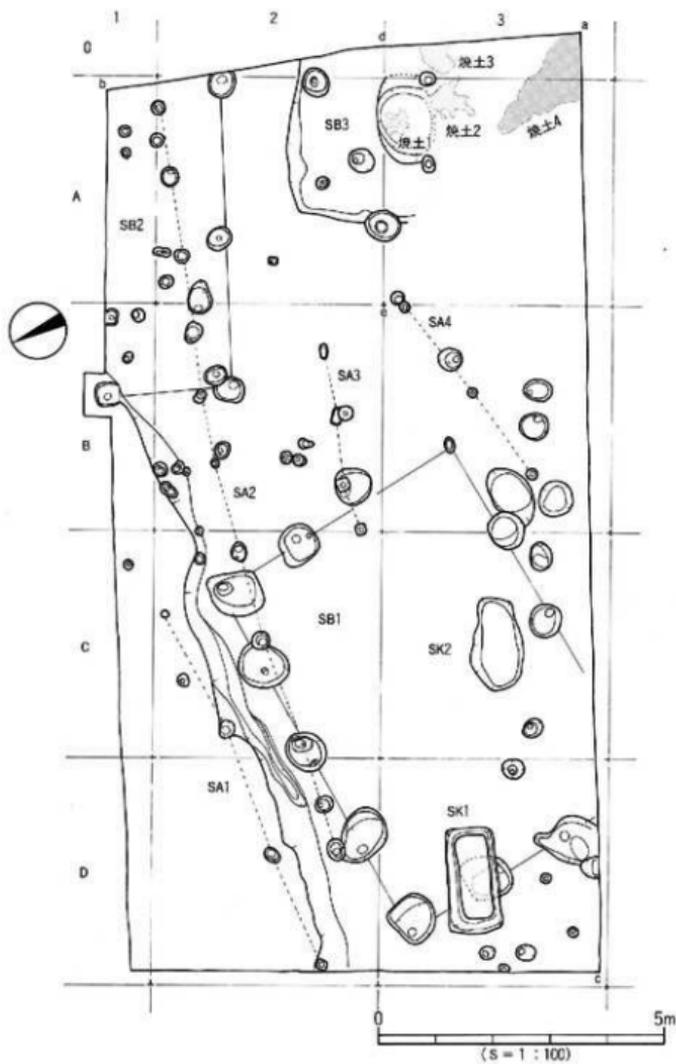
東壁

- 1 黄色砂質土
- 2 黄灰色砂質土
- 3 褐色土+黄灰色土
- 4 暗褐色土
- 5 褐色土
- 6 黒褐色土
- 7 暗褐色土
- 8 黒色土
- 9 黒色土(黄色土が混じる)
- 10 黄色土(堆山)



第3図 層位図

座拝板遺跡の調査



第4図 遺構配置図

### 3. 遺構と遺物

#### (1) 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、A2～3区検出の弥生時代後期の竪穴式住居址(SB3)1棟に限られる。遺物は、第5～9層より前期の土器が出土した他、中・後期の土器も出土している。

##### 1) 竪穴式住居址SB3(第5～10図、図版2・4～7)

遺構全体は確認されないものの、東西4m、南北4.5m～5mの隅丸四角形となる。中央に炉址造り、炉址南面に東西列の柱穴2本が検出されている。また炉址北面には、不整列で規格の異なる柱穴4本がみられた。P1は本住居に伴うと考えられるものである。P2・P4は本住居を切るもので新しい時期のものである。P3は不明である。柱穴の底面は、第7層に掘り込みがみられ、下層の第8層には達していない。第7層は軟弱な土層ではあるが、柱穴には礎石や根巻き石などはみられない。炉址以南の床面及び南側では、焼土塊を4基(焼土1～4)検出した。焼土1～3は炉址内及び炉址周囲で検出され、灰を含んでいる。焼土4は炉址南で検出され、調査区南東隅に分布する(調査区外に至る)。焼土4は、平面形は三角形を呈し、やや柱状に盛り上がる。北南で1.5m、東西で最長1.2mを測る。SB3の遺物は、壺形土器、甕形土器、鉢形土器、高坏形土器、器台形土器、支脚形土器、石庖丁、石鏃(第6～10図)が出土している。遺物の出土状況は、第5図に示すように住居址中央に集中して出土がみられる。またこの周辺部には炭化材も検出され、焼土との関連を考えると、この建物は火災焼失が考えられる。

1～8は壺形土器である。1は外傾する頸部に外反する口縁部をもつ。口縁端部はナデにより拡張される。内面の頸胴部境に粘土接合痕を看取する。2は頸部が強くなり、大きく外反する口縁部をもつ。胴部は扁半球で、小さく突出する底部は上げ底となる。3は複合口縁壺の口縁部片で、袋状を呈する。4は頸部が太い長頸直口壺である。胴部は扁半球で、外面刷毛目、内面に指頭痕が看取される。5は細長頸の直口壺である。扁半球の胴部は肩部が張る。底部は小さく突出し、上げ底となる。頸部中位に9条、頸部下端に10条の櫛歯き文を施す。外面は全面タテヘラ磨きし、仕上げが丁寧なものである。6は肩部が丸く張るもので、厚い平底の底部をもつ。外面ヘラ磨きである。複合口縁壺の胴部片と考えられるものである。7は肩部の張る長球形を呈する胴部片である。底部は小さく上げ底となる。8は球形の胴部に、厚く小さく丸みのある平底の底部をもつ。

9～14は甕形土器である。胴径値が口径値を凌ぐ9・10、ほぼ同じ値を示す11・12がある。9・10は、長く直線的に外反する口縁部に、胴上位が張り、小さく突出し上げ底となる底部をもつ。9・10は器形・調整・胎土とも酷似するものである。11はゆるやかに曲がり、上方へ長く伸びる口縁部をもつ。胴部の張りは弱く、厚い丸みのある平底をもつ。胴部内面は削りがされる。12と13は同一個体の可能性が高いものである。12は屈曲する口縁部で、叩き

成形がされた可能性がある。13は胴下半部片で、丸みのある平底の底部をもつ。叩き後刷毛目調整がされる。14は9・10と同形態を呈するものと考えられる。

15・16は大型鉢形土器である。15は器高29.8cm、口径35.3cm、底径8.4cm、16は器高29.3cm、口径36.3cm、底径8.4cmが測られる。15の底部は突出し、上げ底となる。16は平底である。

17・18は中型鉢形土器である。17は平底でくびれる底部をもつ。口縁部は大きく外反する。器高14.5cm、口径25cm、底径7.5cmを測る。18は肩部が薄くなる肩半球の胴部に、長く大きく外反する口縁部をもつ。底部は突出し、上げ底となる。

19～21は小型鉢形土器である。19は肩部の張る胴部に短く外反する口縁部がつく。底部は小さく、丸みのある平底である。20は肩部の張る胴部に、長く外反する口縁部がつく。底部は小さく、丸みのある平底である。底部内面が凹む。21は肩半球の胴部に長く内湾して立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部はわずかに外反する。器壁は薄い。

22～24・26は直口口縁の鉢である。22は厚くわずかに平底の底部に、直口する口縁部をもつ。口縁端部は丸く細い。23は小さく突出する底部をもつ。22・23とも外面の磨減が著しく、調整は不明であるが、器面の凹凸より叩き技法が行われた可能性がある。24は口縁端部が先細り、内傾きみに立ち上がる。26は突出し、丸みのある平底をもつ。

25は中型鉢形土器で、口縁部は屈折し、内面に稜をもつ。口縁部が厚くつくられる。叩き後口縁部を成形する。

27は手捏ね品である。外面に指頭痕を残す。

28～30は高環形土器脚部である。28の内面には紋りが看取される。29の上位には、3条の櫛描文が施される。30は大型品の可能性があるもので、円孔と櫛描文が施される。

31・32は同型の器台形土器である。31の円孔は柱部に限り、上下2段交互に穿たれる。32の口唇面には、波状文が施される。柱部上位に、櫛描沈線文6条が施される。ともに裾部端面に櫛描沈線文がみられ、外面は筥磨きされる。

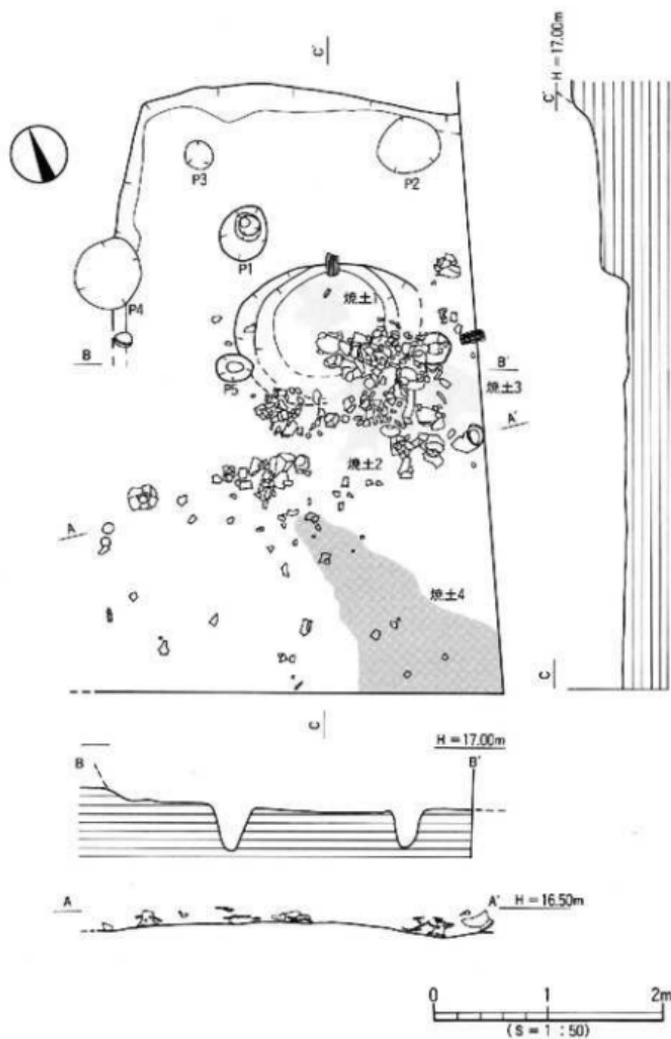
33は支え手2本の支脚形土器である。指頭調整痕が外面にみられ、中空の内部には刷毛撫でが看取される。

34の石座丁は、残存2/3で緑色片岩である。側部にも研磨がみられる。重さ19.9g。穿孔位置変更の未貫通孔がみられる。

35は凹板式石鏝で、一端が欠ける。重さ1.2gが計られる。石材はサヌカイトである。36は石材が流紋岩の、四面使用の砥石である。横割折損し、側面一ヶ所に黒斑の焼痕が残る。残存の重さは282.6gが計られる。

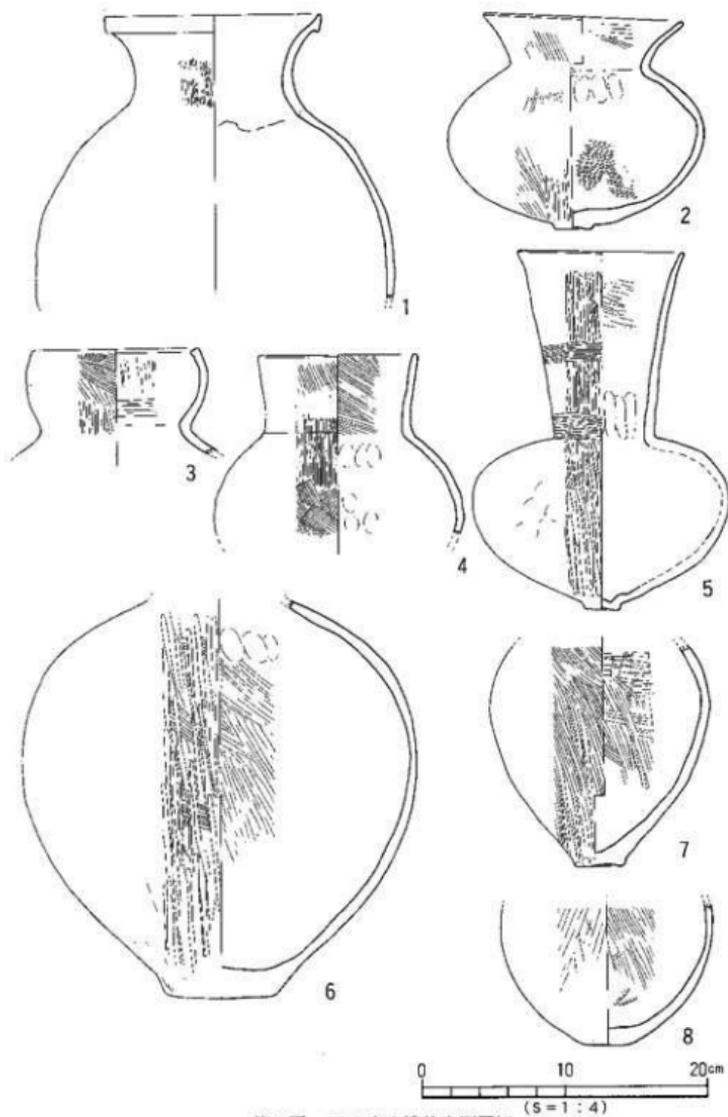
以上が、住居址SB3出土の遺物である。支え手をもつ支脚形5土器の存在や、鉢形土器に平底や叩き技法をもつことよりこの土器群は梅本編年の後期Ⅲ（古）に比定される。

遺構と遺物

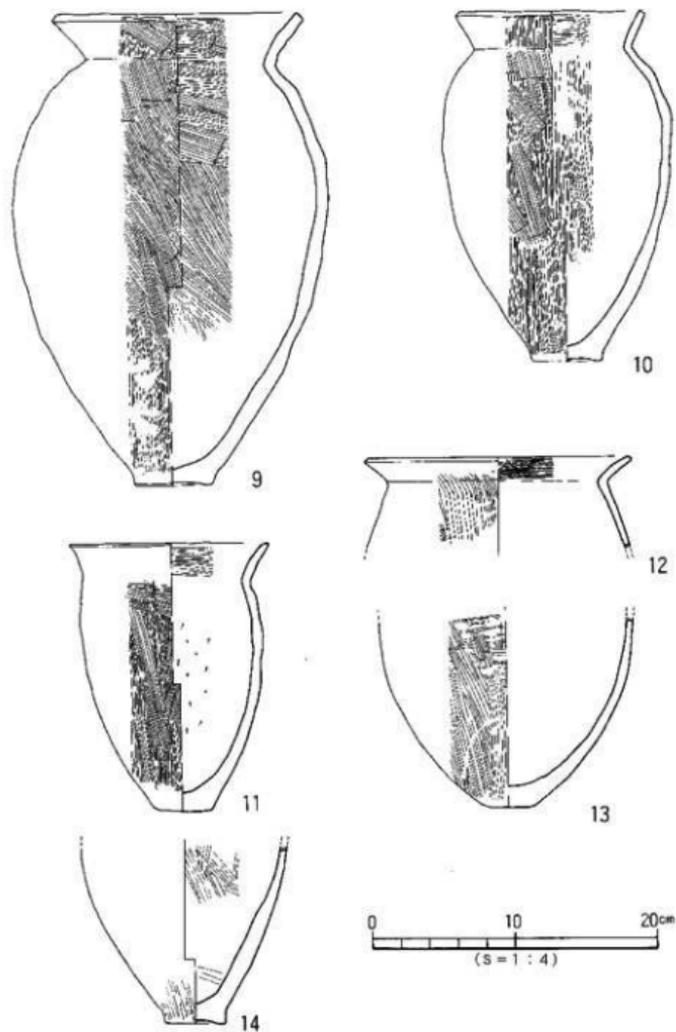


第5図 SB3測量図

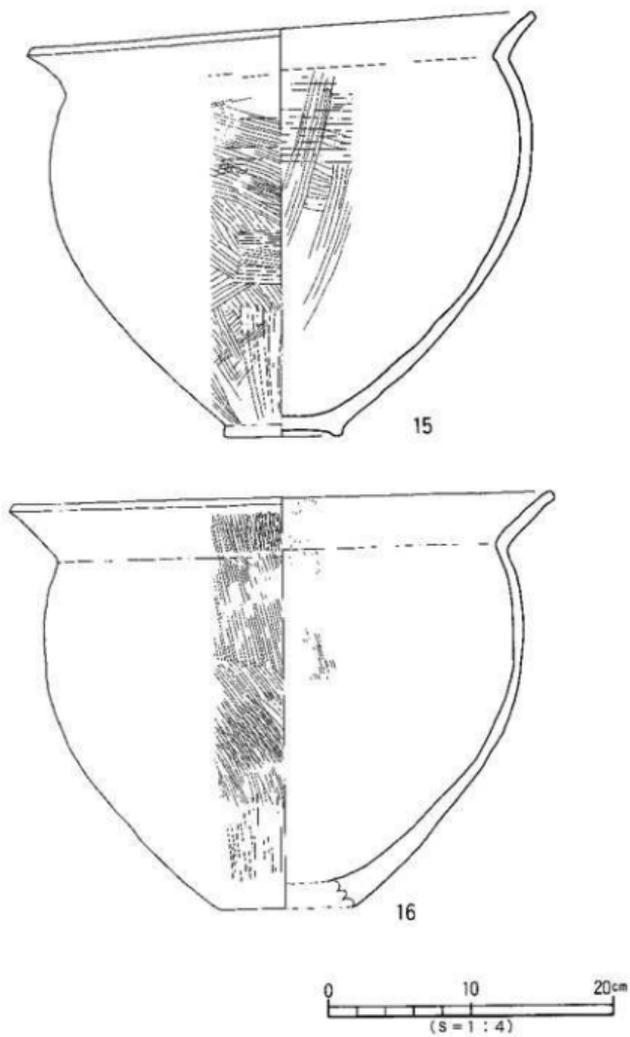
座拝坂遺跡の調査



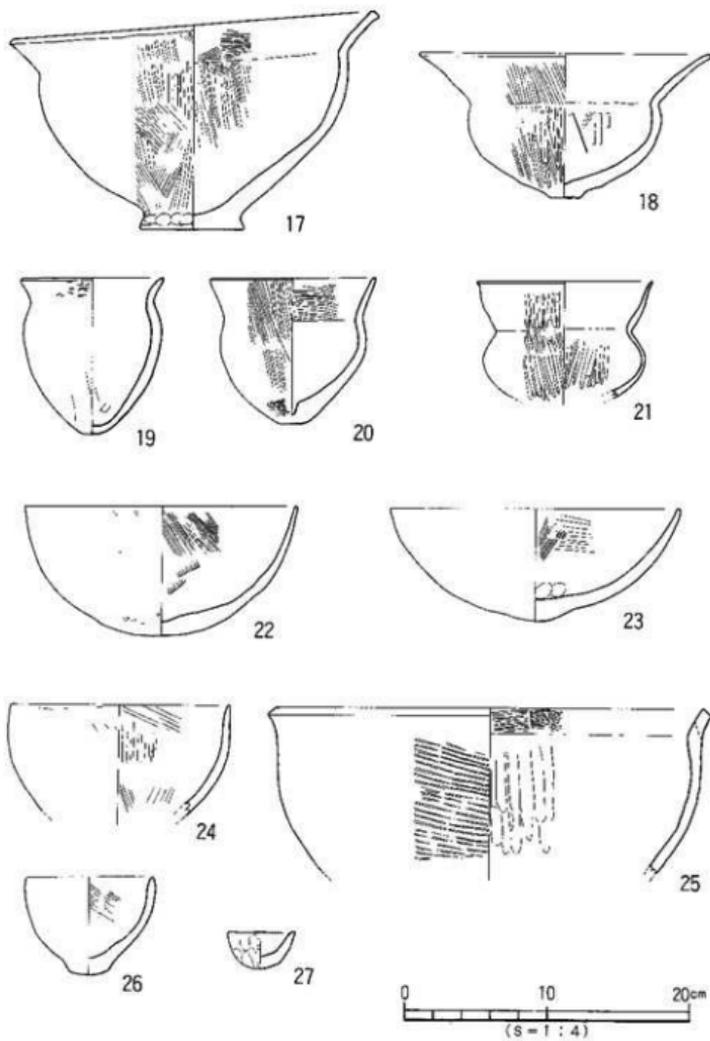
第6図 SB3出土遺物実測図(1)



第7図 SB3出土遺物実測図(2)

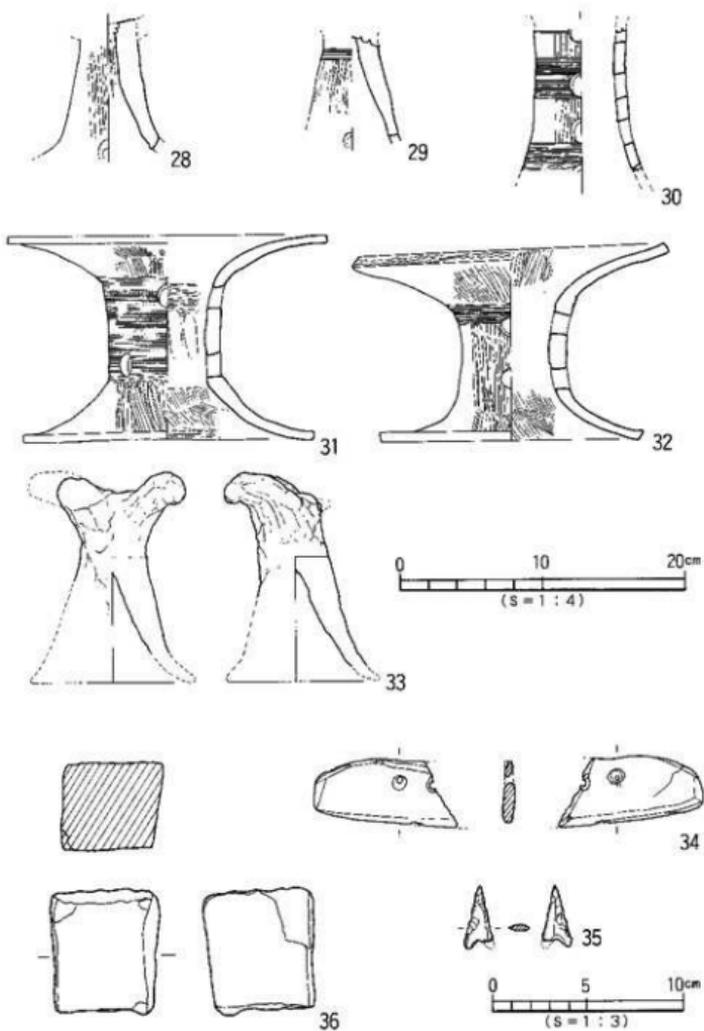


第8図 SB3出土遺物実測図(3)



第9図 SB3出土遺物実測図(4)

座拝坂遺跡の調査



第10図 SB3出土遺物実測図(5)

## 2) 包含層出土の弥生遺物 (第11~16図、図版8~12)

弥生土器は第5~9層出土している。第5・6層は前~後期のものが、第7~9層では後期を除く、前~中期の遺物が出土している。

## 弥生時代前期土器 (第5~9層出土物)

37~61は壺形土器である。37は小型品の完形品である。口頸部・頸部境界はヘラ描き沈線文で区画される。3条一組のタテ沈線文が6組施される。38~43は中型品である。39~42は筒状の頸部に、短く外反する口縁部をもつ。39・40・42は削り出し技法を用いる。42は凸帯上に刻み目を施す。44~47は大型品である。44・45は口頸部境に、貼り付けによる段をもつ。44は有段部に刻み目、口縁端面に1条の沈線文を施す。46・47はゆるやかに外反する口縁部をもつものである。46は口縁端部に近い部位にヘラ描き沈線文を3条施す。47は口縁端面に1条、外面に3条以上、内面に3条のヘラ描き沈線文をもち、内面では沈線文間に刺突文を施す。

48~61は小・中型品の胴部片である。48・49は胴部にヘラ描き沈線文が、48では3条、49では4条以上が施される。50~52は綾杉文と思われるものである。50は直線、51・52は弧状の線である。53・54は木葉文と思われるものである。53は貝殻腹線で、2条1組となる。54は3条が1組となる。55~58は弧文と思われるものである。55は下弦で3条1組、56は上弦で3条が1組、57は上・下弦で3条1組が2ヶ施される。58は線は弧状を呈するが、後述する山形文になる可能性もある。59・60は山形文である。3条1組となる。61は文様種不明のものである。この他に斜格子目文を施したものもある。

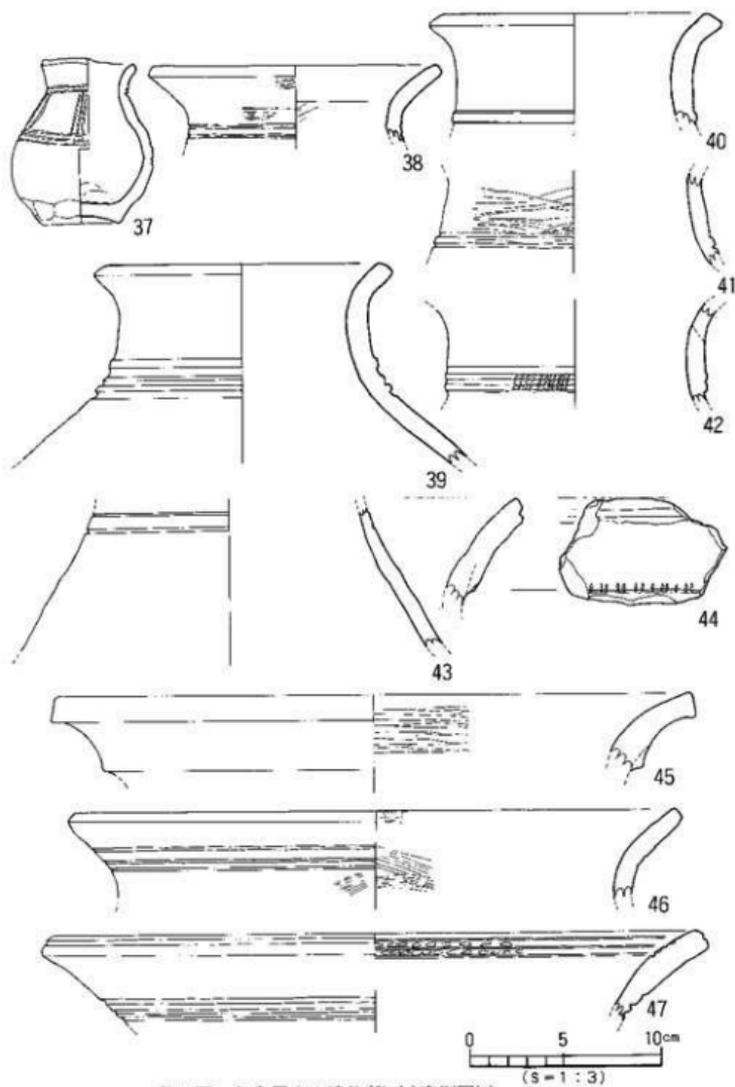
62~76は壺形土器である。62~71は折り曲げにより口縁部を成形する。62~66は胴部の振りが弱いもので、62~64は口縁部がゆるやかに外反し、65・66は内面にゆるやかな稜をもつ。67・68は胴部が強く張るものである。67は削り出し凸帯文を2本施す。68はヘラ描沈線文3条である。69は口縁部下に段をもつものである。出土数は1点である。70・71は屈折する口縁部で、口縁部下に小さい貼り付け凸帯文を1条施す。凸帯文上には刻み目は施さない。70・71はいずれも小片である。

72~75は口縁端部に按して粘土紐を貼り付けて口縁部を形成するものである。72~74は凸帯は扁平な三角形を呈し、いずれも凸帯上に刻み目を施す。72は口縁端部外面に刻み目を施す。72は小さい「U」字状の刻み目と丸みのある大きな刻み目が施される。74は口縁端面が「コ」字状を呈する。75は凸帯がやや扁平な方形状を呈するものである。口縁端部外面に刻み目を施す。

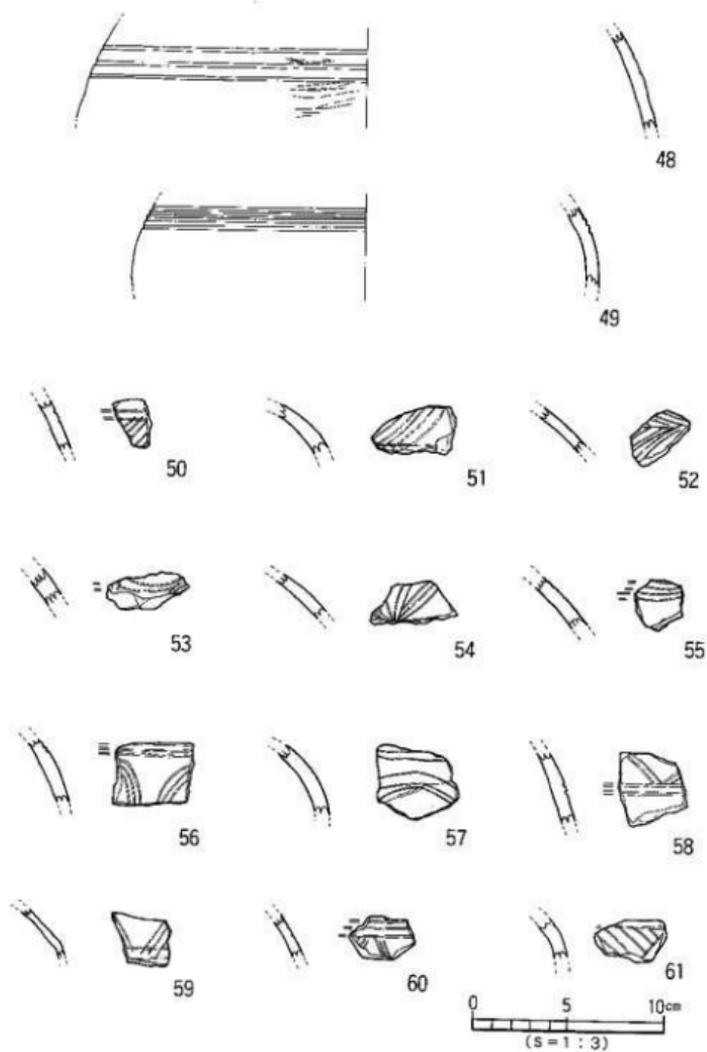
76は胴部に段をもつものである。やや大きめの刻み目を施す。

## 弥生時代中期土器 (第5~9層出土物)

77~81は壺形土器片である。77は屈曲する口縁部をもつものである。口縁端部は丸く、やや厚みをもってつくられる。78・79は口縁端部と口縁部下に粘土紐を貼り付けて口縁部を形

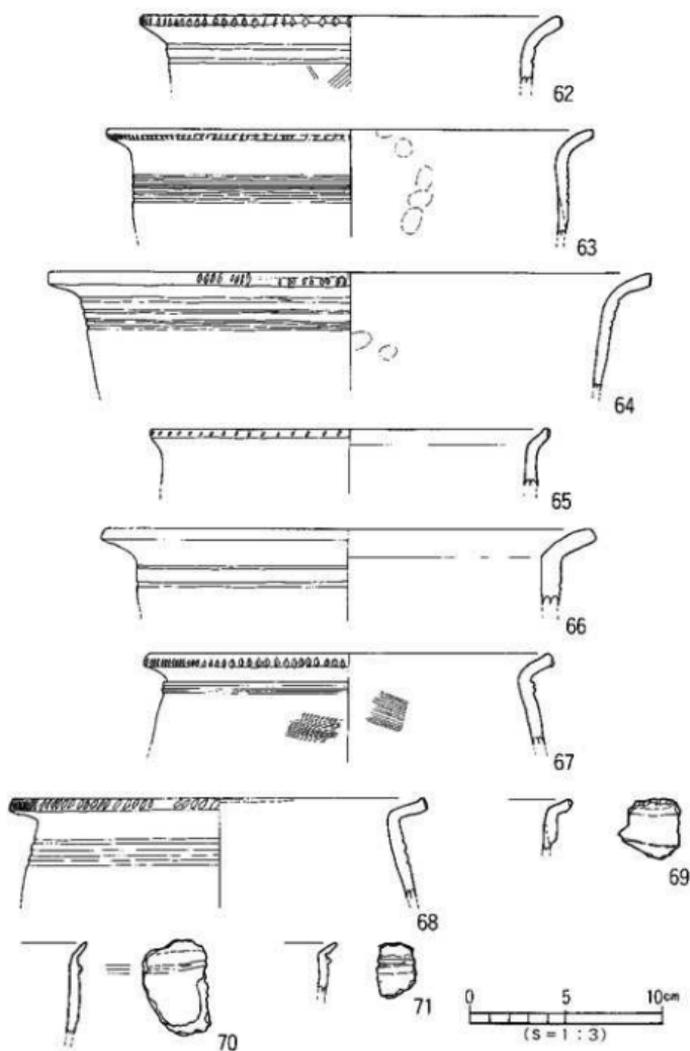


第II図 包含層出土遺物(弥生)実測図(I)

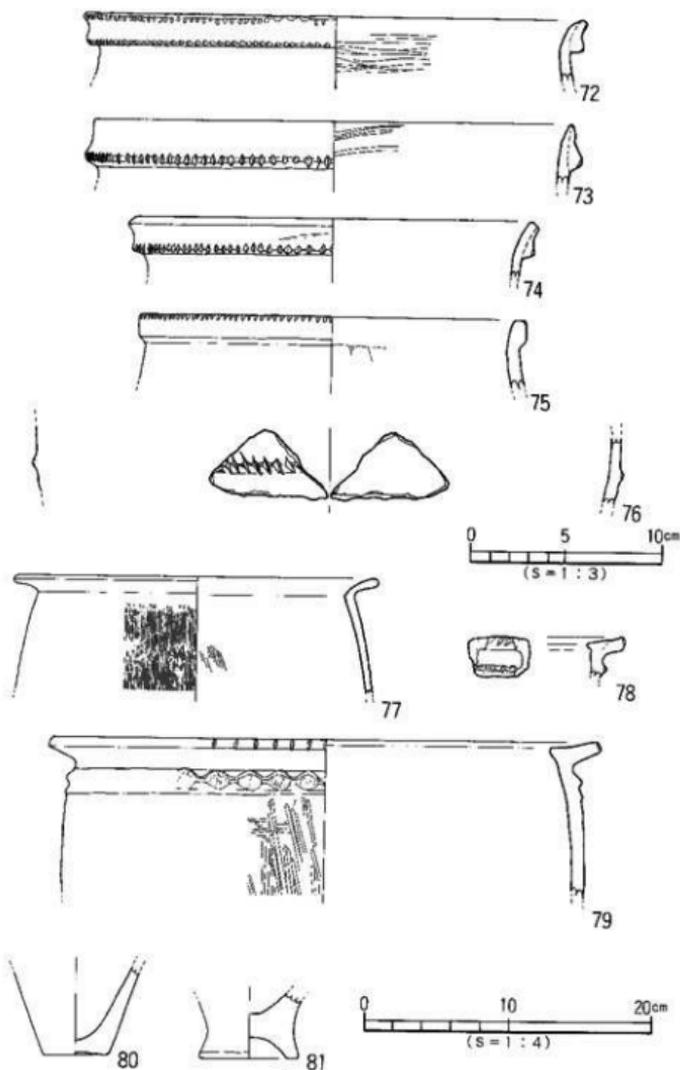


第12圖 包含層出土遺物(弥生)実測図(2)

座拝坂遺跡の調査



第13図 包含層出土遺物(弥生)実測図(3)



第14図 包含層出土遺物(弥生)実測図(4)

成するものである。胴部凸帯文上には79は指頭痕、78は工具による刻み目が施される。80は77と同形態をもつ裏形土器につく底部片で、小さい上げ底をもつものである。81はくびれの上げ底を呈するものである。

82は壺形土器胴下半部片である。胴中位に横方向、胴下位に縦方向のヘラ磨きがあり、細長頸壺の胴部片となるものである。

#### 弥生時代後期土器（第5・6層出土物）

83～85は壺形土器であり、いずれも複合口縁を呈する。83は小型品で口縁端部は小さく外反する。84は口縁接合部が下方に長く突出するものである。複合口縁部は内湾する。85は「く」字状を呈するもので、大型壺である。複合口縁部に横描で3条の直線文と5条の波状文が施される。

86～92は裏形土器である。86は口径値が胴部最大径値をわずかに凌ぐものである。胴部は削りのため器壁が薄い、口縁部は厚いものとなる。口縁端部はやや長く先細りする。底部は小さく立ち上がり、上げ底を呈する。87は胴部が張り、長く外反する口縁部をもつ。88は底部が張り、胴下半部が丸みをなして締まるものである。口縁部は長く、外面形は直立ないし外傾した後外反するものとなる。口縁端部は先細りする。89は胴部が丸く張り、上外方へ屈折して立ち上がる口縁部をもつものである。胴部外面には叩き痕がみられ、下位は叩き後刷毛により調整される。90は86と同形態を呈するもので、底部は平底となる。91は上げ底で、外面に指頭痕が残る。92は内面がヘラ削りされる。底部は丸みをもち、上げ底となる。

93～95は鉢形土器である。93は平底で、外傾して立ち上がる胴部に、丸みのある口縁端部をもつ。94は叩き痕が顕著に残るものである。丸みのある平底で、直口口縁をもつ。95は台付き鉢の底部片である。大きくくびれて上げ底を呈する。

96はミニチュア品である。くびれの上げ底に「く」字状の口縁部をもつ。

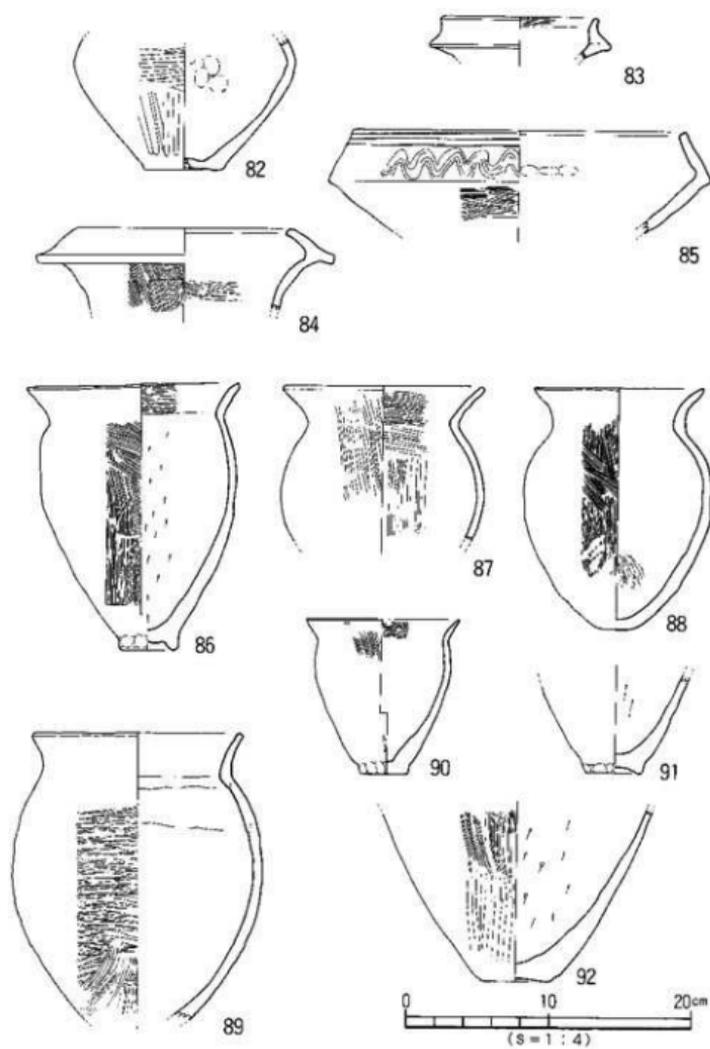
97・98は器台形土器である。97は受部片で、受端面に竹管文入りの円形浮文と横描波状文をもつ。受部上面には管状の工具による刺突文が4ヶ1組となり巡回する。98は小型品で裾部径が受部径を凌ぐ。

#### 石製品

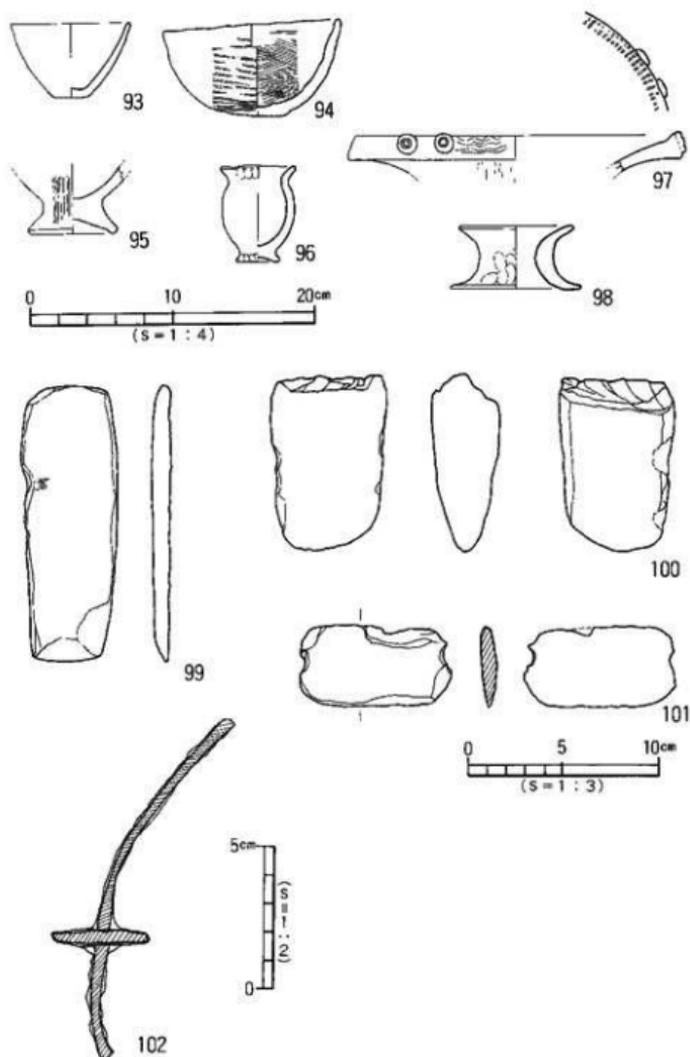
99～101は時期不明の石製品である。99は伐採斧もしくは大型の加工斧の欠損品を再利用した石斧である。側面の2ヶ所に摩擦による凹みが見取される。100は伐採斧で月部は使用により大きく傾斜する。101は石磨である。両端挟りで方形を呈する。

#### 鉄製品

102は時代・時期不明の鉄製品である。S B 3の甬で検出された、鉄製の紡錘車である。重さ18.3gで、両端部が欠損する。弥生時代に属するかは要検討である。



第15図 包含層出土遺物(弥生)実測図(5)



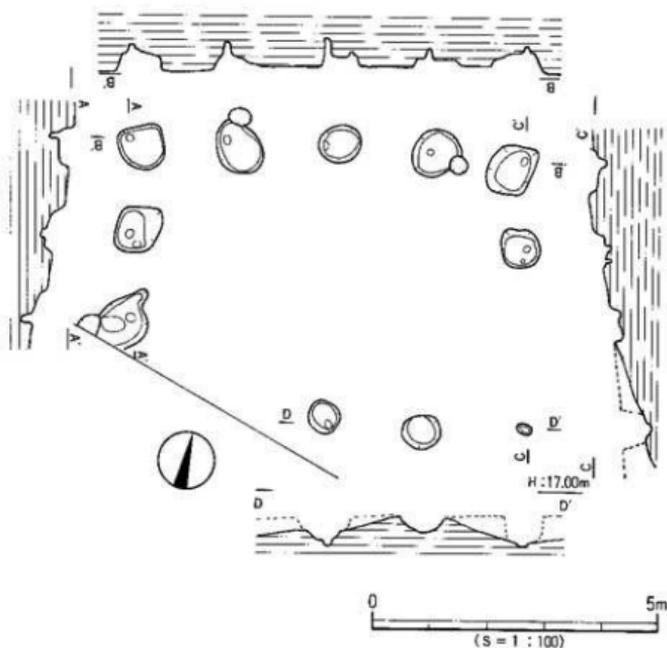
第16図 包含層出土遺物(弥生)実測図(6)

(2) 7～10世紀前半の遺構と遺物

CD 2・3区にまたがる掘立柱建物址1号(SB1)、A2・B3区に広がる掘立柱建物址2号(SB2)の2棟は、7～10世紀前半の間に築造された建物である。また、第3～6層は同時代に推積した土層と考えられる(第3・4図)。

1) 掘立柱建物址 SB1 (第17図、図版1・3)

東西4間6.9m、南北3間4.7mの東西棟である。桁行柱間は1.7m、1.7m、1.85m、1.65mの不等間となる。梁行柱間は1.7m、1.0m、2.0mの不等間となり、不整形な建物である。傾斜面にあり、台形状の平面プランが示される。柱穴掘り方は、2段に掘られるものもあり、柱穴の深さは35～50cmの間におさまる。礎石や根巻き石はみられず、土器も出土していない。上層観察では少なくとも第6層を切り込んでおり、第5層以上での築造であることがわかる。



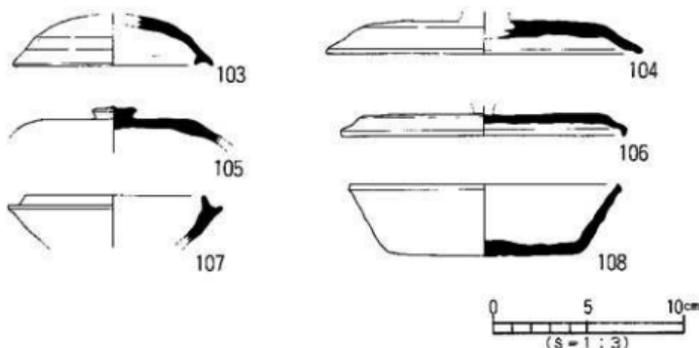
第17図 SB1測量図

2) 掘立柱建物址 SB2 (第4図、図版2-2)

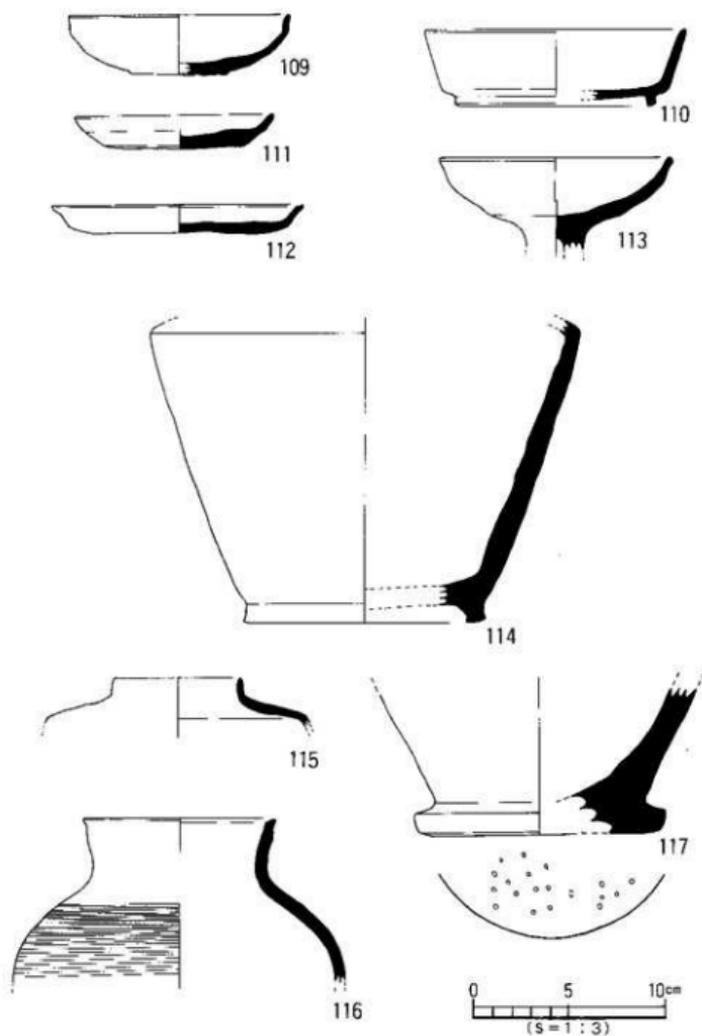
東西2間5.4m、南北1間2.2mの確認で、北面は未確認である。桁行2.8m、2.6mが測られ、SB1より方位をやや南にとる。柱穴内からの土器の上上はない。土層観察より、少なくとも第5層以上からの堀り込みである。

3) 包含層出土の須恵器 (第18・19図、図版13)

103~106は、宝珠形つまみがみられ、104の天井部は低く、体部との境界は丸く不明瞭である。105・106の境界はにふい稜がみとれる。稜と口縁部の間は凹状を呈する。口縁端部が屈曲する106と、外方にのびる105がある。107のみうけかえり部に矮小がみられ、器形は小型化が示される。108は成形に粗さがみられ、外面口縁部と体部の境には、稜がつくられる。109の底面は篋切りされる。内面には渦巻状の稜がみとれる。110は灰白色を呈する須恵質である。「ハ」の字高台を配し、外面立ち上がりとの間はへら成形がなされる。111・112は器高低く、111の立ち上がり中位は、撫でられ凹状がみられる。112は底端部に篋削りが施される。113は無蓋高坏で下部は不明である。外面は撫でにより稜がつくれ、段状につくられる。脚部上位には篋描き沈線がみとれる。114は高台付の須恵器壺で、上部は瓶子状の頸部が考えられる。粘土紐の接合がみられ、内外面とも段状につくられる。内傾する肩部には、凹線が施され稜がみられる。116は直口壺、115は短頭壺で、116の口縁端部は鋭く内傾する。外面頸部で絞りがみられ、体部中位より帯描き沈線が多条に施され、裝飾状がつくられる。115は短頭で、口唇端部は丸く仕上げられる。有蓋が考えられる壺である。117はすり鉢で、底部は粗くつくられ、接地面には、径2mm前後の木貫通の小孔がみられる。内外面とも荒削りされ、外面底部と立ち上がりの境は撫でられ凹状がつくられる。



第18図 包含層出土遺物(須恵器)実測図(1)



第19図 包含層出土遺物(須恵器)実測図(2)

### (3) 10世紀後半以降の遺構と遺物

遺構には、土壇2基（SK1・2）と10世紀後半以降に比定されると考える櫛列4基（SA1～4）がある（第4図）。

#### 1) SK1（第20図、図版3～2）

D3区にあり、長方形の掘り込みで、上部は大きく削平される。東西1.9m、南北0.9mを測る。深さ3～10cmの壁周溝が一巡し、周溝の四隅には小穴が検出されている。遺物はみられず、中央床面より3～5cmの扁平な玉石が2個検出され、箱式棺の埋葬施設が推定される土壇である。

#### 2) SK2（第20・21図、図版14）

東西1.6m、南北0.9mが測られる不整楕円の土壇である。床面中央部はやや盛り上がりが見られる。掘り込み上面では焼土が少量検出された。内部から土師器の坏・皿・碗などが出土している（図21）。

#### 出土遺物（118～121）

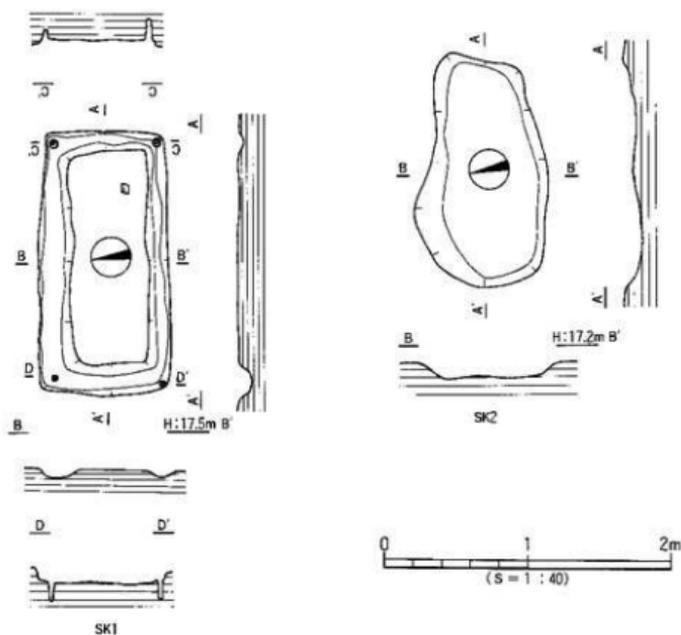
118は胎土は粗く、砂粒が多く含まれる。肥厚気味の口縁部は外傾し、口唇端部は突出する。内面は口縁部と体部を境にして、撫でが施され、外面頸部には木口痕がみられる。体部は粗い刷毛目調整が残存する。煤の付着がみられる。時期は10世紀が考えられる。119は内面黒色、外面灰黒色を呈する。暗文はみとれず、外面は篋状の撫でがみとめられる。120の底面には板状圧痕がみとめられる。破片で口径14cm、器高1.3cmが推定される。底部の器壁は薄く、外面立ち上がりは撫でられる。121は底面がヘラ切りである。

#### 3) 櫛列（第4図、図版1）

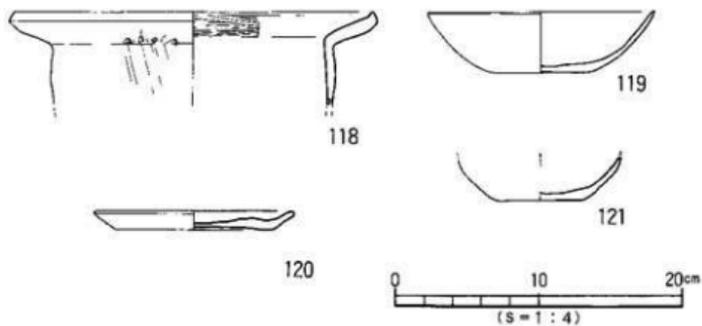
櫛列4基は東西列が示される。SA2の柱穴は、中心部の2穴（B2区）は小掘り、東西に2分の状況が示され、櫛列とは考え難い点もあるが定かでない。西側の柱穴列は、SB1と切り合い、SB1より後出である。またSA3の柱穴の平面形態は方形で、他の櫛列の柱穴形態とは異なるが櫛列とした。性格は不明で、時期も定かでない。

#### 4) 包含層出土の土師器（第22図、図版14）

122～125は、土師質の鍋である。胎土は同質であるが、形態が若干異なる。頸部は撫でられ凹状を呈する122・123・125、口唇面が凹む122・123がある。これらの土器はSK2出土の118を含めて、内面は円滑に、外面は粗く仕上げられている。二次的焼痕が多くみられる。126は底部ヘラ切りで、内面には回転状の稜がみられる。外面には2段の撫でがみられる。127は底部中心と立ち上がり中位は薄くつくられ、外面は2段に撫で凹む。ミガキのみられる坏である。128は底部ヘラ切りの坏である。淡赤褐色を呈する。129の口縁部は外反する。



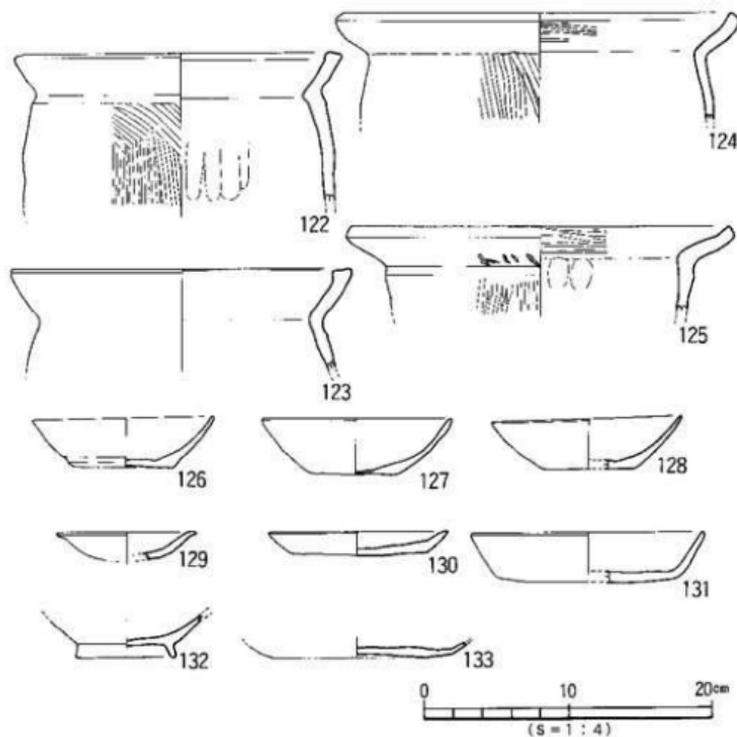
第20図 SK 1・2 測量図



第21図 SK 2 出土遺物実測図

座拝坂遺跡の調査

130は小皿で、外面赤褐色の焼痕がみとれる。外面は刷毛撫でされる。131は灰褐色で、瓦質状を呈する。内面には2条の弱い稜がみられ、刷毛撫でされる。132は高台付碗である。133は盤になる可能性があるものである。



第22図 包含層出土遺物(土師器)実測図

## 4. 小 結

今回の座坪坂遺跡の調査では、遺構と遺物の共伴関係が示されないものが多く、従って、時期不明の遺構、時期が特定されても全容の把握に至らない住居址の検出など、数々の課題が残された。これは、南東部が深く下がり、湾状を呈する地形が要因ともいえよう。注目されるものは、包含層出土の弥生前期上器や弥生後期の竪穴式住居址、古代の掘立柱建物などがあげられる。

第5層から最下層の9層までで出土する弥生前期上器の形態は、壺形土器は頸部の直立化と削り出し凸帯を施し、甕形土器は寛幅き沈線文2～5条までがみられる。また小破片にみる施文には、貝殻文、木ノ葉文、羽状文、連弧文、山形文などの形態がみられる。これらは、周辺部の潮見遺跡や西の太山寺山塊西部の低丘陵にある鶴が峠遺跡出土品の先行形態となるものである。

全容が確認できなかった弥生後期の住居址SB3では、柱穴2基と炬址が検出されたが、柱穴構造や焼土の残存状況に若干課題を残すものとなった。柱穴は軟弱な第7層にあって、礎石や根巻き石が検出されず、安定度はどうかと考える。焼土4は、平面形は三角形で、やや盛り上がり、基底部には凹みがみられ土塊状を呈している。内部には遺物はみられず、構築物の擁壁体の一部とも考えられるが性格不明である。住居址出土の土器は、壺形土器の体部の球形化、丸みのある甕形土器底部、体部における叩き成形等の特徴がみられる。一方口縁部が大きく外反する壺は、胎土は水碓による精選がみられ、寛幅きされ祭祀土器の様相が示されるものである。時期は梅木縄年後期Ⅲ(古)に比定される。SB3は炭や焼土の検出より、火災住居の可能性も考えられる。

当地方で出土例の少ない鉄製紡錘車の出土は特筆される。紡茎と紡輪との関係は、輪の中央部に茎の貫入が定則とされる。出土例に奈良市榛原下井足、1月切り43号墳出土品がある。また今回出土の紡錘車はX線透視を行い、再度報告を期したいと考える。

掘立柱建物は、堀り方などから7～10世紀前半の建物と推定した。また、10世紀後半以降の上層2基の内、SK1は箱式棺が推定された。

遺構に伴わない遺物では、須恵器は陶邑窯編年Ⅲ期～Ⅳ期(7c前半～8c後半)、土師器は奈良時代前半のものがある。木掲載のものでは、盤状の上師皿、六角柱がつくと想われる上師器の高坏、形象地輪、小片ではあるが緑釉単彩の口縁部などが出土している。包含層出土遺物は、洪水などの自然破壊につながる流れこみ品で、調査地の北側に所存する尾根状の低丘陵や東側の未調査地域に、弥生時代から古代に至る集落や墳丘の存在が伺見されるものである。

終わりに、現地に御足労下さり、教示を賜った愛媛大学下條信行先生に厚くお礼を申し上げます。

座拌取遺跡の調査

遺物観察表一凡例一 (梅木謙・宮内慎・水口あをい)

(1) 以下の表は、本調査出土遺物観察一覧である。

(2) 各記載について。

法量欄 ( ) : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胴中→胴部中部、柱→柱部、裾部、胴底→胴部底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( ) 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 砂・長(1~4)多→「1~4mm大の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表2 SB3 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		〔内面 色調 (外側)〕	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	甕	口径 15.0 残高 20.0	外縁外反の口縁部、口縁部面を拡張する。胴側部内面に線文。	マメツ ◎ ハケ	① ココナデ ◎ ナデ	淡黄色 淡褐色	石長0-0 ◎		4
2	甕	口径(13.0) 器高 15.0 底径 2.5	扁平球の胴部に、外反する口縁部をもつ。胴底は小さく突出し、わずかに凹む。	① ハケ (底上) マメツ (底下) ハケ・肥料	① 横ハケ(マメツ) ◎ ハケ	黄褐色 黄褐色	石長0-0 ◎	黒焼	4
3	甕	口径(11.5) 残高 7.5	細頸で、頸状の複合口縁部、口縁部部はナデにより面をとる。	ハケ	ハケ	淡黄色 淡褐色	石長0-0 ◎		4
4	長頸甕	口径(11.2) 最大径14.0	頸部を胴部に、長頸口の口縁部の口径が大きい。	粗くハケ	① ハケ ◎ ナデ	灰褐色 灰褐色	石長0-0 ◎		4
5	甕	口径(11.0) 器高 25.2 底径 2.5	細長頸部、頸下帯部を本×2組、胴中位置り小。	◎ 縦ヘラミガキ ◎ ハケヘラミガキ	◎ ハケ・ナデ ◎ ナデ	灰・黄 褐色 黄褐色	石長0-0 ◎	出所	4
6	甕	口径 7.5 残高 20	厚く、大きい、平底、複合口縁部をもつ甕か。	ハケヘラミガキ	◎ 底上 ハケ ◎ 底下 ナデ	灰黄色 灰黄色	石長0-0 ◎	黒焼	4
7	甕	口径 3.5 残高 15.5	小さい、上げ底の甕部、胴部は、胴部が膨る長頸、長頸部か。	ハケ(7本/1cm)	ハケ(7本/1cm)	淡褐色 淡褐色	石長0-0 ◎	出所	
8	甕	口径 3.0 残高 9.8	丸みのある小さい平底、長頸部は直か。	ハケ(マメツ)	ハケ	無灰色 淡黄褐色	石長0-0 ◎	黒焼	
9	甕	口径 16.8 器高 33.5 底径 3.5	外縁する口縁部、小さく突出し、上げ底の意図、内面底径 3.5	ハケ	ハケ (底下) マメツ	黄褐色 灰黄褐色	石長0-0 ◎	証	3
10	甕	口径(12.7) 残高 24.7 底径 3.0	外縁する口縁部、小さく突出し、上げ底の意図、内面底径 3.0	ハケ	ハケ	黄褐色 黄褐色	石長0-0 ◎	出所 証	3

S B 3 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		(内面 色調 外面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
11	甕	口径 14.0 器高 19.0 底径 4.0	ゆるやかに外傾する口縁部。 小さい丸みのある平底。 叩き技法の可能性もある。	⑪ ナデ ⑫ 原形 縦ハケ	⑪ 横ハケ ⑫ ケズリ	黄赤褐色 黄灰褐色	石炭0-5 ○	出現 煤	3
12	甕	口径(18.7) 残高 6.5	短く外反する口縁部。 内面に縦をもつ。	⑬ ココナデ ⑭ タタキ→ハケ	ココナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	石炭0-5 ○		
13	甕	口径 3.0 残高 13.4	小さい丸みのある平底。 胴部はふくらみをもつ。	⑮ 原上 タタキ→フツ ⑯ 原下 ハケ	フツ	白色 黄灰色	石炭0-3 ◎	出現 煤	
14	甕	口径 4.1 残高 14.3	突出する、小さい上げ蓋。	ハケ(マメツ並しい)	ハケ ナデ	淡褐色 黄灰褐色	石炭0-5 ○	出現	
15	鉢	口径 25.4 器高 28.8 底径 8.2	大型品である。突出する上 げ口の残部、深い縁をもつ。 長い口縁部。	⑰ ココナデ ⑱ ハケ	⑰ ココナデ ⑱ ハケ、ナデ	黄褐色 黄褐色	石炭0-3 ◎		3
16	鉢	口径(28.4) 器高 29.1 底径 9.4	大型品である。平底である。 深い縁をもつ、長い口縁部。	ハケ	指図板 ハケ、ナデ	淡褐色 淡褐色	石炭0-3 ◎		3
17	鉢	口径 26.0 器高 14.5 底径 7.2	大きいびれの平底をもつ。 外傾する口縁部は、胴部に 接をもつ。	ハケ	⑲ 横ハケ ⑳ 原上 ハケ ㉑ 原下 ハケ→ナデ	淡褐色 淡褐色	石炭0-3 ◎	出現	4
18	鉢	口径(20.5) 器高 10.2 底径 2.2	長く大きく外反する口縁部。 小さく尖る上げ蓋。 器壁は薄い。	⑲ 縦ハケ ⑳ ハケ→ミガキ	フツ	淡赤褐色 淡茶褐色	石炭0-3 ◎	出現	6
18	鉢	口径(10.1) 器高 11.0 底径 1.0	ゆるやかに外傾する口縁部。 小さく、丸みのある平底。	フツ	ナデ	黄褐色 黄褐色	石炭0-3 ○		6
20	鉢	口径 11.6 器高 10.3 底径 1.6	外傾する長い口縁部。 小さく、丸みのある平底。	ハケ	⑲ ハケ ⑳ ナデ	黄褐色 黄褐色	石炭0-3 ◎	出現	6
21	鉢	口径 12.3 残高 9.5	長く、内傾ぎみに立ち上がる 口縁部。口縁部は、小さ く外反する。器壁は薄い。	ヘラミガキ	⑲ ナデ ⑳ ヘラミガキ	茶褐色 茶褐色	石炭0-3 ◎	出現	8
22	鉢	口径 19.1 器高 9.1	厚みのある丸みある平底。 胴下半部は突出する。 叩き技法の可能性ある。	フツ	ハケ(工具痕跡)	暗茶褐色 茶褐色	石炭0-3 ○	煤	6
23	鉢	口径 20.2 器高 7.9	丸みのある胴部。器壁は厚い。	フツ	ハケ→ナデ	淡茶褐色 淡黄褐色	石炭0-3 ◎	出現	6
24	鉢	口径(15.2) 残高 7.6	直立して立ち上がる口縁部。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	石炭0-3 ◎	出現	
25	鉢	口径(20.2) 残高 12.4	ゆるやかに外傾する口縁部。 叩き後、口縁部を折り曲げ る。	⑲ タタキ→ナデ ⑳ タタキ	⑲ ハケ ⑳ ナデ	茶褐色 茶褐色	石炭0-3 全ウレモ ○		6
26	鉢	口径 9.0 器高 6.9 底径 3.0	内傾ぎみに立ち上がる口縁 部。 尖る小さい平底。	フツ	ハケ(フツ)	出褐色 茶褐色	石炭0-3 ◎	出現	
27	鉢	口径(4.8) 器高 2.6	手ねね品。小さい平底。 外蓋指図板並しい。	指図板(ナデ)	ナデ	黄褐色 黄褐色	石炭0-3 ○		

座拝坂遺跡の調査

S B 3 出土遺物観察表 土製品

(3)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (内面) (外面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
28	高杯	残高 9.1	内脣する基部に、外脣する基部、幹部部に直径1.4cmの円孔。	ヘラミガキ(マメツ)	シボリ砥	黄褐色 灰褐色	石長0-0 ◎		7
29	高杯	残高 7.4	内脣する基部、柱上部沈線3本、柱ト部円孔。	ハケヘラミガキ	ナデ	灰褐色 暗褐色	石長0-0 ◎		7
30	高台	残高 10.0	径の小さい柱状、径1.7cmの円孔4段。	縦ヘラミガキ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石長0(大) 金ウシモ ◎		
31	高台	口径 22.3 器高 16.4 底径 20.4	柱部は刷毛目工品によりヨコ方向の沈線文が施される。円孔は上下2段で4ケ。	① ハケ ② ハケ(施文) ③ ヘラミガキ	① ハケ ヘラミガキ ② ハケ ③ ハケ	淡茶褐色 淡茶褐色	石長0-0 ◎	異状	7
32	高台	口径 22.3 器高 13.4 底径 19.5	柱上部帯形沈線文6条、円孔は上下2段で4ケ。口縁部沈線3条の状況。	ハケ ヘラミガキ	① ハケヘラミガキ ② ナデ ③ ハケ	黄褐色 灰褐色	石長0-0 ◎		7
33	支脚	器高 16.1	受形の突起2ケ、背蓋に小突起が1ケつものである。	指頭砥	シボリ砥 指頭砥	黄褐色 黄褐色	石長0-0 ◎		7

S B 3 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残 存	材 質	法 量				備考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
34	石磨刀	刃	緑色片岩	7.5	3.5	0.5	19.9	石磨刀	7
35	石磨	ほぼ完形	サメカイト	3.3	1.4	0.3	1.2	石磨刀	7
36	石臼		流紋岩	6.3	5.2	4.5	282.6		7

表 3 包含層 出土遺物(弥生)観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (内面) (外面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
37	壺	口径 4.9 器高 8.8 底径 3.9	口付部の大きい底部、瓶形沈線2条、ナデ沈線3条1組が6條、胴中位沈線3条。	① ナデ ② ヘラミガキ(横方向)	ナデ	黄褐色 灰黄褐色	石長0-0 ◎	異状	8
38	壺	口径(11.7) 残高 4.3	胴部沈線2条。	ナデ	ナデ	褐色 褐色	石長0-0 金ウシモ ◎		8
39	壺	口径(10.6) 残高 10.5	胴部削り出し内唇3本。	コソナデ	ナデ	淡褐色 淡褐色	石長0-0 ◎		
40	壺	口径(13.1) 残高 5.6	直立する頸部、胴部削り出し凸唇1本以上。	マメツ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石長0-0 ◎		8
41	壺	残高 3.8	内脣する頸部のヘラ指沈線文2条以上。	ヘラミガキ(横方向)	ヘラミガキ(横方向)	淡黄色 淡黄色	石長0-0 ◎		8
42	壺	残高 4.7	直立する頸部、削り出し凸唇3条本以上。凸唇上、底目。	ヘラミガキ(横方向)	マメツ	淡黄褐色 淡黄褐色	石長0-0 ◎		8

包含層 出土遺物(弥生)觀察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面)	胎 土 焼 成	備考	国産
				外 面	内 面				
43	蓋	残高 8.0	内側する長い頸部をもつ。 ヘラ模状線文2条以上。	ナデ	ナデ	淡茶褐色 赤褐色	石炭 0-0 ◎		8
44	壺	残高 5.7	口縁部境に段をもつ。 段上に刻み目をもつ。 口縁部面に1条の沈線文。	ヘラミガキ (横方向)	ヘラミガキ (横方向)	淡黄褐色 淡青褐色	石炭 0-0 ◎		8
45	蓋	口径(33.0) 残高 4.1	口縁部境に段をもつ。 口縁部面はナデによる面をもつ。	マメツ	ヘラミガキ (横方向)	褐色 黄褐色	石炭 0-0 ◎		8
46	壺	口径(21.7) 残高 4.7	人型器。ヘラ模状線文3条。	模ハテ	模ハテ	暗灰色 暗灰色	石炭 0-0 ◎		8
47	蓋	口径(34.0) 残高 4.2	外面ヘラ模状線文3条。 内面沈線3条。口縁部刻文 2列。口縁部沈線1条。	ヨコナデ	ナデ (1等)	淡黄褐色 淡青褐色	石炭 0-0 ◎		8
48	壺	残高 5.3	丸みのある胴部。ヘラ模状 線文3条。仕上げ1等。	ヘラミガキ (横方向)	ナデ	赤褐色 青褐色	石炭 0-0 ◎		9
49	蓋	残高 4.7	丸みのある胴部。ヘラ模状 線文4条以上。	ヘラミガキ (横方向)	ナデ	灰黄色 灰青褐色	石炭 0-0 ◎		9
50	壺	残高 3.0	ヘラ模状線文。新石器で模 状文の可能性をもつ。小片。	ナデ	ナデ	淡青褐色 淡茶褐色	石炭 (中) ウツモ ◎		9
51	蓋	残高 3.7	ヘラ模状線文。線状文で、 柄は孤立。	ミガキ→ナデ	ナデ	灰黄色 赤褐色	石炭 0-0 ◎		9
52	壺	残高 2.8	ヘラ模状線文。線状文で、 柄は孤立。	ミガキ	ナデ	淡青褐色 青色	石炭 (中) ウツモ ◎		9
53	壺	残高 2.3	貝殻文。赤土文。	ナデ	ナデ	乳白色 黒色	石炭 0-0 ◎		9
54	壺	残高 2.8	ヘラ模状線文。3条の木立 文。	ミガキ	ナデ	茶褐色 暗茶褐色	C-0 0-0 ◎		9
55	壺	残高 3.5	ヘラ模状線文。4条以上の 孤立。	ナデ	ナデ	淡黄褐色 黒灰色	石炭 0-0 ◎	黒地	9
56	壺	残高 4.0	ヘラ模状線文。3条1横の 孤立の横配列。	ミガキ	ナデ	暗茶褐色 暗灰黄色	石炭 (中) ◎		9
57	壺	残高 4.5	ヘラ模状線文。3条1横の 孤立。1-1配列。	ミガキ→ナデ	ナデ	暗褐色 暗褐色	石炭 0-0 ウツモ ◎		9
58	壺	残高 4.1	ヘラ模状線文。2条1横で 孤立ない山形文。	ミガキ→ナデ	ナデ	黄褐色 褐色	C-0 0-0 ◎		9
59	壺	残高 3.5	ヘラ模状線文。3条1横の 山形文か。ヨコ→ナメ。	ミガキナデ	マメツ	淡黄色 褐色	石炭 0-0 ◎		9

座拝坂遺跡の調査

包含層 出土遺物(弥生)観察表 土製品

(3)

番号	器種	流量 (cm)	形態・施文	調 整		(内面) 色調 (外面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
60	壺	残高 2.5	へう橋状施文。3条1組の山形文か。	ナデ	ナデ	黒灰色 黄灰色	赤(石) ◎		9
61	壺	残高 2.5	へう橋状施文。文様不明。	ミガキ	ナデ	黒灰色 黄灰色	赤(石) ◎		9
62	壺	口径(21.7) 残高 3.5	へう橋状施文。2条のヨコ波線→3条の山形文。口縁部下部削み。	ナデ	ナデ	黒茶褐色 暗茶褐色	赤(石) ◎		10
63	壺	口径(25.1) 残高 2.5	へう橋状施文2条。口縁部下部削み。	ヨコナデ	ナデ	黄褐色 灰黄褐色	赤(石) ◎		10
64	壺	口径(31.3) 残高 6.0	へう橋状施文1条。口縁部の削み方は全面らじド形に施す。	ナデ	ナデ	黄茶褐色 黄赤褐色	赤(石) ◎ 女山形		10
65	壺	口径(20.4) 残高 3.6	内湾する口縁部をもつ。口縁部下部に削み目。	マメツ	マメツ	淡黄褐色 淡黄褐色	赤(石) ◎		10
66	壺	口径(25.0) 残高 4.0	裏面の強い口縁部。へう橋状施文2条。磨莹は早い。	ナデ	マメツ	乳白色 乳白色	赤(石) ◎		10
67	壺	口径(20.0) 残高 4.7	割の張り強い。割り出して凸帯2本。口縁部下部に削み目。	ヨコハナ	⑪ ヨコナデ ⑫ ハナナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	赤(石) ◎		10
68	壺	口径(21.5) 残高 5.2	割の張り強い。へう橋状施文3条。口縁部全面削み目。	ナデ	ナデ	灰白色 淡灰褐色	赤(石) ◎ ウシモ		10
69	壺	残高 2.7	短く外湾する口縁部。有段。口縁部上部削み目。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	赤(石) ◎		10
70	壺	残高 4.9	短く強い口縁部。取り付け凸帯文1本。	ナデ	⑬ ヨコナデ ⑭ ナデ	黄茶褐色 灰茶褐色	赤(石) ◎		10
71	壺	残高 2.7	短く鋭折する口縁部。取り付け凸帯文1本。小片。	ナデ	ナデ	茶褐色 赤褐色	赤(石) ◎		10
72	壺	口径(25.7) 残高 3.3	口縁部に施して、粘土粒を貼り付ける。口縁部と凸帯文1を削む。	ナデ	へうミガキ(横方向)	茶褐色 茶褐色	赤(石) ◎ ウシモ		10
73	壺	口径(26.6) 残高 3.0	口縁部に施して、粘土粒を貼り付ける。凸帯文1を削む。	ヨコナデ	ハナナデケシ	茶褐色 赤褐色	赤(石) ◎		10
74	壺	口径(21.2) 残高 2.9	口縁部に施して、粘土粒を貼り付ける。内帯文1を削む。口縁部は丸みのある方形。	ナデ	ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	赤(石) ◎ ウシモ		10
75	壺	口径(20.0) 残高 3.0	口縁部に施して、粘土粒を貼り付ける。口縁外端削み目。凸帯方形。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄灰褐色 黄灰褐色	赤(石) ◎		10
76	壺	残高 3.5	胴部片。肩部に削み目。	ナデ	ヨコナデ	暗褐色 灰白色	赤(石) ◎	黒斑	10

包含層 出土遺物(弥生)調査表 土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・本文	調 整		(内面)胎土色質 (外面)焼成	備考	図版
				外 面	内 面			
77	甕	口径(25.3) 残高 8.0	肩許する口縁部、口縁端丸みのある方形でやや歪い。	① ココナテ ② ハテ	① ココナテ ② ハテ+ナテ	赤褐色 茶褐色	石長0-0 ◎	
78	甕	残高 2.4	肩り付け口縁。腹面中の筋り付け凸部文1本。口縁部全周刻み口。	① ナテ ② ハテ+ミガキ	ナテ	赤褐色 茶褐色	石長0-0 ◎	
79	甕	口径(37.7) 残高 10.0	口縁部成形不明確。口縁部輪刻み口。肩み凸部1本。	ナテ	ココナテ	赤褐色 茶褐色	石長0-0 ◎	
80	甕	口径(4.5) 残高 6.4	上げ瓶。	縦ヘラミガキ(マノツ)	ナテ	赤褐色 灰青色	石長0-0 ◎	
81	甕	口径 6.9 残高 4.6	くびれの上げ甕。	マノツ	ナテ	暗褐色 灰褐色	石長0-0 ○	
82	甕	口径(5.8) 残高 9.3	肩平の側部。大きき平尻。	① 割中 横ミガキ ② 割下 縦ミガキ	ナテ(ツメ板有)	黒色 黄褐色	石長0-0 ウツシ多 含 ◎	11
83	甕	口径(11.2) 残高 2.9	小一中型腹合口縁部。口縁端部外反する。	ナテ	① 細いココハテ ナテ	淡茶褐色 淡茶褐色	石長0-0 金ウツシ ◎	11
84	甕	口径(13.0) 残高 5.7	中型腹合口縁部。内湾する口縁部。	① ナテ ② 縦ハテ	① ナテ ② ハテ	赤褐色 茶褐色	石長0-0 ◎	11
85	甕	口径(23.3) 残高 7.2	大型腹合口縁部。横筋文。5本の波状文。3本の凸筋文。	ハテナテ	ハテナテ	黄褐色 黄褐色	石長0-0 ウツシ ◎	11
86	甕	口径 14.9 器高 18.7 底径 4.0	突出する小さい上げ瓶。ゆりゆかに外反する口縁部。	① ナテ ② 縦ハテ	① 横ハテ ② ヘラケズリ	赤褐色 赤褐色	石長0-0 ◎	11
87	甕	口径(14.3) 残高 9.5	ゆるやかに外反する口縁部。内面に横をもつ。	ハテ	ハテ	均質褐色 赤褐色	石長0-0 ウツシ ○	
88	甕	口径 11.8 器高 17.0 底径(2.0)	点弁して外反する口縁部。口縁端は薄い。小さい。丸みのある平底。	① ハテ+ナテ ② 細いココハテ	ハテ(短マノツ)	黒灰色 灰黄褐色	石長0-0 金ウツシ ◎	11
89	甕	口径(14.8) 残高 20.3	外反する口縁部。内面腹部下に軌土咬合状。叩き技法。	① ハテ+ナテ ② 割中 タタキ ③ 割下 タタキ ロツ	① ナテ ② タズリーナテ	残褐色 暗茶褐色	石長0-0 ◎	11
90	甕	口径(11.0) 器高 11.0 底径 3.4	ゆるやかに外反する口縁部。突出する平底。粗筋刻み。	① 細いハテ ② 粗筋刻み	① ハテ マノツ	暗茶褐色 淡茶褐色	(石長0大) ◎	11
91	甕	口径 4.0 残高 7.0	突出する上げ瓶。腹筋刻み。小形品。	マノツ	ヘラケズリ	黄褐色 黄褐色	石長0-0 ◎	11
92	甕	口径 4.5 残高 12.1	丸みのある上げ瓶。中小型。	① 細いハテ ② 粗いハテ	ヘラケズリ	黄褐色 灰黄褐色	石長0-0 ◎	
93	甕	口径(6.3) 器高 5.2 底径 2.5	丸みのある平尻。直口口縁。口縁端部は丸い。	マノツ	ハテ(マノツ)	赤褐色 赤褐色	石長0-0 ◎	

産祥坂遺跡の調査

包含層 出土遺物(弥生) 観察表 土製品

(5)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
94	鉢	口径 12.5 器高 6.5 底径 4.2	小型品。甲壳状。口縁端部丸い。	ナタキ	ハケ	灰青褐色 灰黄褐色	石浜田-1 ◎	出處	12
95	鉢	底径 5.7 器高 4.6	鉢の底部分。くびれの大きい上げ蓋。	ハケ(マメツ)	マメツ	淡茶褐色 黄褐色	石浜田-1 ○	出處	
96	甕 (口径)	口径 5.3 器高 6.7 底径 3.0	子甕ね品。くびれの上げ蓋。	ナタ ミダキ(マメツ)	ナタ	淡茶褐色 淡黄褐色	石浜田 ◎		12
97	器内	口径(25.2) 残高 3.1	中笠蓋。上面に竹筵文4列。竹筵付き門形浮文。縁部成鉄文3条。	ハケ(マメツ)	マメツ	淡黄褐色 茶褐色	石浜田-1 ◎		12
98	器内	口径 8.0 器高 1.5 底径 9.2	小型品。低い直筒。底部縁部縁より小さい。	ナタ	マメツ	黄褐色 黄褐色	石浜田-1 ◎		12

包含層 出土遺物(弥生) 観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
99	石筴	半	遺坑産	14.7	4.8	0.30	149.1		12
100	石筴	半	安山岩	(9.45)	6.0		305		12
101	石楯丁	完整	緑色片岩	6.1	4.2	0.75	27.6	同層 伏り	12

包含層 出土遺物(弥生) 観察表 鉄製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
102	鉄線中	半	鉄	13.1	約幅 3.4		18.3		12

表4 包含層 出土遺物(古墳)観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
103	甕	口径(10.3) 残高 3.7	甕形の天舟部をもち。かえりは短く、口縁増加よりはたがらない。	回転ナタ	回転ナタ	青灰色 青灰色	否 ◎		
104	甕坏	残高 2.2	甕室縁部つまみの付く片蓋。天舟部は平頭で、口縁部に向かつてゆるやかに屈曲。	回転ナタ	回転ナタ	灰色 灰色	砂粒 ○		13
105	甕坏	口径(16.5)	平頭な天舟部から口縁部に向かつて屈曲する。底部は丸く仕上げする。	回転ナタ	回転ナタ	灰色 灰色	否 (石1-2) ◎		
106	甕坏	口径(18.0) 残高 1.2	天舟部と口縁部の境は段をもちて屈曲し、口縁部はさらに下内方へ屈曲する。	回転ナタ	回転ナタ	灰色 灰色	甕 ◎		

包含層 出土遺物 (古墳) 観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (内面 外面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
107	坏身	口径(9.5) 残高 2.5	立ち上がりは短く内傾し、 壱部は尖り気味に丸い。受 部は短く上外方にのびる。	同転ナデ	同転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
108	平	口径(11.3) 器高 3.2	体部は内傾して立ち上がり、 口縁部でやや外反する。壱 部は平直。	⑪ 同転ナデ ⑫ 同転ヘラケツリ	同転ナデ	灰色 灰色	密(右) ◎		13
109	平	口径(14.3) 器高 3.7 底径 10.3	体部は外反気味に弱め上方 に立ち上がり、口縁部は 外反する。壱部は平直。	⑪ 同転ナデ ⑫ 同転ヘラケツリ	⑬ 同転ナデ ⑭ 同転ナデナナテ	灰色 灰色	密(具) ◎		
110	平	口径(13.6) 器高 4.0 底径 10.5	体部と壱部の境は緩やかな。 高台は八の字に開き、平 直で後反。	⑪ 同転ナデ ⑫ 同転ヘラケツリ +同転ナデ	ナデ	灰色 灰色	密 ○		13
111	皿	口径(10.3) 残高 1.8	口縁部は内傾気味に立ちあ がり、壱部は丸く仕おろす。 底部は平直。	ナデ	ハケナデ	青灰色 青灰色	密 ○		
112	皿	口径(12.9) 器高 1.5 底径(8.3)	口縁部は外反して立ちあ がる。口縁壱部内面にわず かに稜あり。平直の底。	⑪ 同転ナデ ⑫ 同転ヘラケツリ	⑬ 同転ナデ ⑭ ナデ	灰色 灰色	密 ○		
113	高坏	口径(12.1) 残高 4.7	口縁部は丸みのある稜を なす。体部は内傾してたち 上がり、口縁部は丸い。	同転ナデ	同転ハケ	灰色 灰色	密(右) ○		13
114	壺	残高 15.8 底径(12.6)	体部は斜め上方に漸強的に 立ち上がり、口部で緩くな して収束する。	同転ナデ	同転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		13
115	壺	口径(6.5) 残高 2.8	口縁部は内傾し、壱部は尖 り気味に丸い。壱部は水平 に近く張る。器壁薄し。	同転ナデ	同転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		13
116	壺	口径(10.0) 残高 8.6	口縁部は斜め上方に立ちあ がり壱部は内傾する面をな す。壱部の腹りに強い。	カキ目	同転ナデ	青灰色 青灰色	密(右) ◎		13
117	壺	底径(12.7) 残高 7.5	壱部可。斜め上方に立ちあ がる腹。	縦方向の工具痕あり	ナデ	緑灰色 灰色	砂粒 ◎	自然熱	13

表 5 SK 2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (内面 外面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
118	鉢	口径(25.0) 残高 6.7	口縁部上方にナデ乱敷。 内面と稜をもつ。	⑬ ココナデ ⑭ 同ハケ	⑮ ハケ ⑯ ハケナデ	黄褐色 黄褐色	赤灰0-0 ○		14
119	碗	口径(18.1) 器高 4.0 底径(8.9)		ヘラナデ		黒色 灰黄褐色	密 ◎		14
120	皿	口径(14.1) 器高 1.3	ヘラ切り。縦目肌。	ナデ	ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	密 ◎		14
121	碗	器高 3.3 底径 6.0	ヘラ切り。	⑱ ヘラ切り ナデ	ナデ	黄褐色 赤褐色	密 ◎		14

座拝坂遺跡の調査

表 6 包含層 出土遺物(古代)観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		(内面) 色調 (外面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
122	皿	口径 22.2 底高 10.5	内面口縁、口縁端面ナテ凹み。	① ココハテ ② ハテ	ナテ	暗褐色 暗褐色	石炭0-0 ○		14
123	皿	口径(23.7) 底高 7.2	内面口縁、口縁端面ナテ凹み。	ハテ(マメツ)	マメツ	灰色 淡灰褐色	石炭0-0 ○		14
124	皿	口径(26.8) 底高 7.5	内面外反口縁、口縁端部上方にナテ凹み。	黒いハテ	① ハケ→ナテ ② ナテ	淡茶褐色 淡茶褐色	石炭0-0 ○		14
125	鉢	口径(26.2) 底高 6.0	内面外反口縁、口縁端部上方におおかにナテ凹み。	① ココナテ ② 黒ハテ	① ココナテ ② ナテ	暗灰褐色 灰褐色	石炭0-0 ◎	※	14
126	小	口径 12.5 器高 3.5 底径 6.7	底面付片、口縁ヘラ切り。	ナテ	ナテ	乳白色 乳白色	市(石)◎		14
127	杯	口径 13.2 器高 4.0 底径 5.8	口縁ヘラ切り。	マメツ	ナテ	赤褐色 乳褐色	市◎		
128	杯	口径 13.2 器高 3.4 底径(6.7)	口縁ヘラ切り。	ナテ	ナテ	乳褐色 乳褐色	市◎		14
129	杯	口径(9.6)	外反する口縁部。	ココナテ	ココナテ	淡黄褐色 淡黄褐色	市(石)◎		
130	皿	口径(12.4) 器高 1.7 底径(9.2)	口縁端部わずかに外反する。ヘラ切り。	マメツ	マメツ	暗灰褐色 茶褐色	市◎		
131	杯	口径(16.2) 器高 3.5 底径(11.2)	口縁部にややあがる口縁部、口縁端は丸い、器壁厚い。	ナテ	ナテ	灰褐色 灰褐色	市◎	裏面	14
132	碗	口径 3.0 底高(6.9)	輪高台。	ナテ	ナテ	暗褐色 淡褐色	市◎		14
133	皿	口径(9.5) 底高 1.0	外反する短い口縁部、ヘラ切り。	マメツ	マメツ	黄褐色 淡黄褐色	市◎		

第 3 章

金毘羅山遺跡

## 第3章 金毘羅山遺跡の調査

### 1. 調査の経過

#### (1) 調査の経緯

平成元年、松山市は、松山市平田町824-1を多目的広場とする公園整備を計画した。本調査は、この公園整備事業に伴う事前調査である。調査地は、舌状丘陵地の南面中腹部にある荒廃した山林地である(図版15)。また、地元では、古墳の所在やこれにまつわる土器の埋納(埋納した場所には祠が建立されている)などが知られる土地である。地元総代、松山市公園緑地課、文化教育課の三者は協議し、事業に伴い遺跡が消失する地域に対し、調査を実施することとなった。

#### (2) 調査組織

遺跡名 金毘羅山遺跡  
調査地 松山市平田町824-1  
調査面積 対象面積 1,100㎡  
調査期間 平成2年1月18日～同年4月3日  
調査委託 松山市 公園緑地課  
調査担当 調査員 松村 淳 調査補助員 山本 健一  
調査作業員 近藤 茂、松岡 欣弘、松友 利夫、藤家 厚美、他5名



第23図 調査地位位置図

(S=1:5,000)

## 2. 層位 (第24図)

調査地は、舌状丘陵の南面中腹部で、不整形な長方形を呈する。東は農道に接し、西は急傾斜が示され、南面段状下には常福寺、金毘羅宮が所在している。従って東面を基準線とし、1辺8m四方の小区画を設定した。小区画の符号は任意に南より北へローマ字、東より西へ数字により通し番号を付記した(第25図)。方位は磁北を使用し、出土遺物は小区画毎に番号をつけ、取り上げを行った。

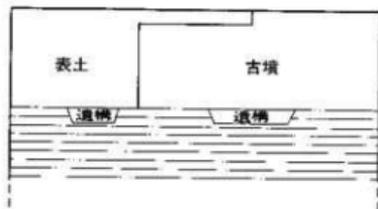
層位は、表土下は赤色土の地山となり包含層は検出されなかった。また、表土は後述する古墳の盛土及びその崩落土であり、表土以下の土壌も同じく古墳の盛土ないし、盛土の崩落土で形成されている。

調査の結果、竪穴住居址3基、上墳7基、溝2条、古墳4基、掘立柱建物址2棟、性格不明掘り込み(凹地)3基が確認された。遺構は、全て地山面での検出である(古墳直下のもを含む)。また、調査地の西及び東は近現代の造成により階段状の段がみられる。

遺構のうち竪穴住居址SB1~3、上墳SK6・7、SX1は弥生時代に、古墳築造以前(6世紀以前)の遺構には、土壌SK1~5、溝SD2があげられる。古墳時代の遺構には、溝SD1と古墳1~4号基がある。さらに、近世以降の遺構には掘立柱建物址1・2が検出された。

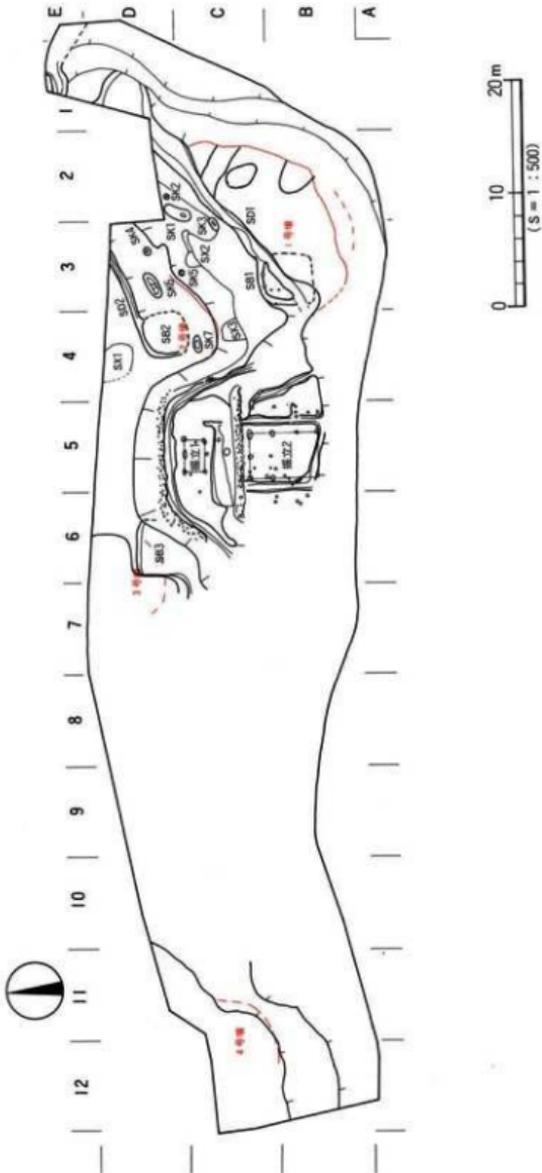
なお、SX2・3は凹地で、人為的であるかは判断できなかったが、地山での検出により弥生時代として報告する。

古墳はいずれも削平を受け、主体部は検出されていないが版築層の確認により古墳と断定した。従って、墳丘規模や形態は不明である。またSB2・3及びSK1~7、SD2はともに古墳を削除した後検出された遺構である。



第24図 基本層位図

金毘羅山遺跡の調査



第25図 遺構配置図

### 3. 遺構と遺物

#### (1) 弥生時代の遺構と遺物

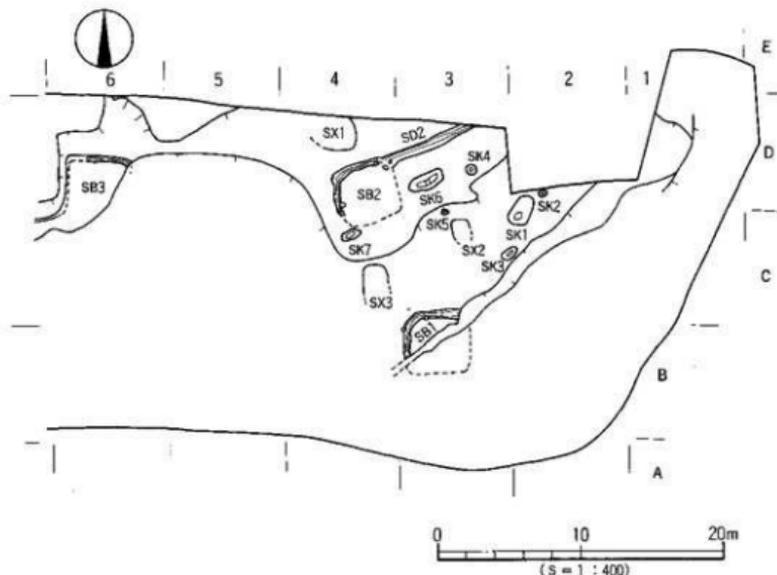
弥生時代後期の竪穴式住居址SB1～3の3棟、土壇SK6・7の2基、SX1の1基がある。また、古墳直下で検出した遺構は断定できないが、弥生時代と考えられるもので、清SD2の1基、土壇SK1～5の5基、SX2・3の2基があげられる。

##### 1) 竪穴式住居址 (SB)

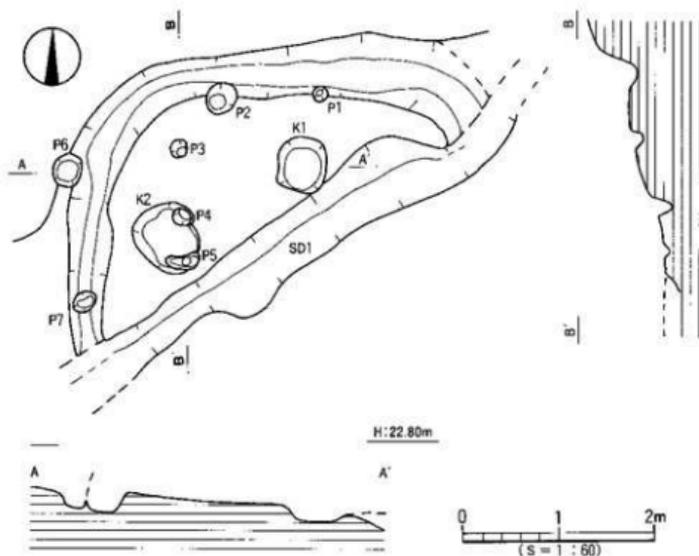
##### SB1 (第27図、図版16-2)

調査地B3区に検出され、1辺3m前後の四角形を呈するものと思われる。遺構の全様は、溝SD1によって削平されているため不明である。北側で壁体溝が検出されている。一巡したものと考える。床面(南傾斜)や壁体溝内部、壁体溝外縁部検出の柱穴(P1～7)は不整列で、柱間65～180cmが測られ規格性に欠ける。また床面では、径50～70cmの浅い掘り込み(K1・2)が検出されたが、内部には焼けた近世平瓦や角礫などがみられる。この遺構は後世のものである。本住居址からの出土遺物はない。

時期：本住居址は、SB2と同形態を呈することより弥生時代後期末。



第26図 弥生時代の遺構配置図



第27図 SB1 測量図

SB2 (第28図、図版17)

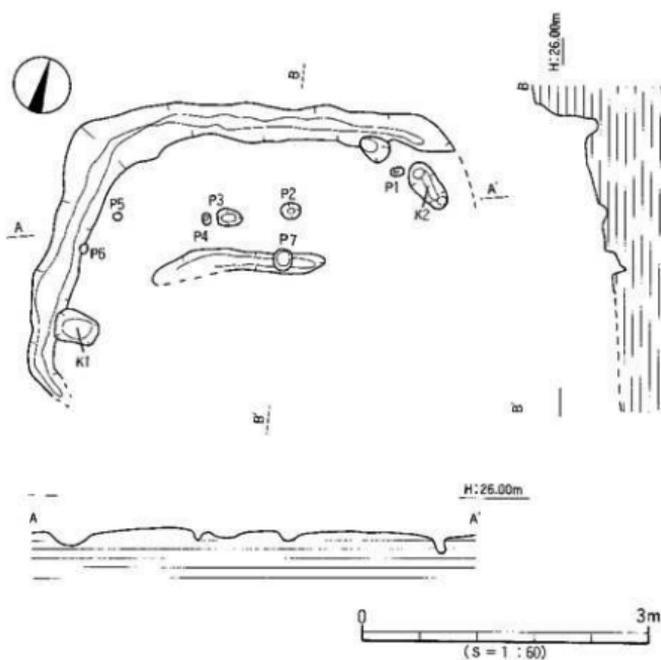
D4区で、2号墳丘直下で検出された。1辺3~3.5m、隅丸四角形を呈する竪穴式住居址であろう。北側の地山を深くL字状に掘削し、壁体がつくられる。壁体直下には深さ20cmの壁体溝がみられ、壁体溝東端部は後述の溝SD2に接する。接点では、両溝の分枝が僅かに残存検出されるが、切り合い関係は不明であった。西端は自然消滅するが、壁体溝内部には遺物が集中し、第29・30区に示す弥生時代後期の壺形土器、甕形土器、鉢形土器、支脚形土器、石錘が出土している。南傾斜の床面からは柱穴、小溝、土塊が検出されている。柱穴は、規模、深さに均等性はみられないものの、P2・P3は深さにおいては同値が示される。床面中央部に位置する小溝は深さ5cmと浅い。間仕切りの要素が窺えるが定かでない。床面西南端の土塊(K1)は深さ5cmで、甕形土器が出土し、壁体溝内より出土したもの(第29図-6)と接合した。

## 遺構と遺物

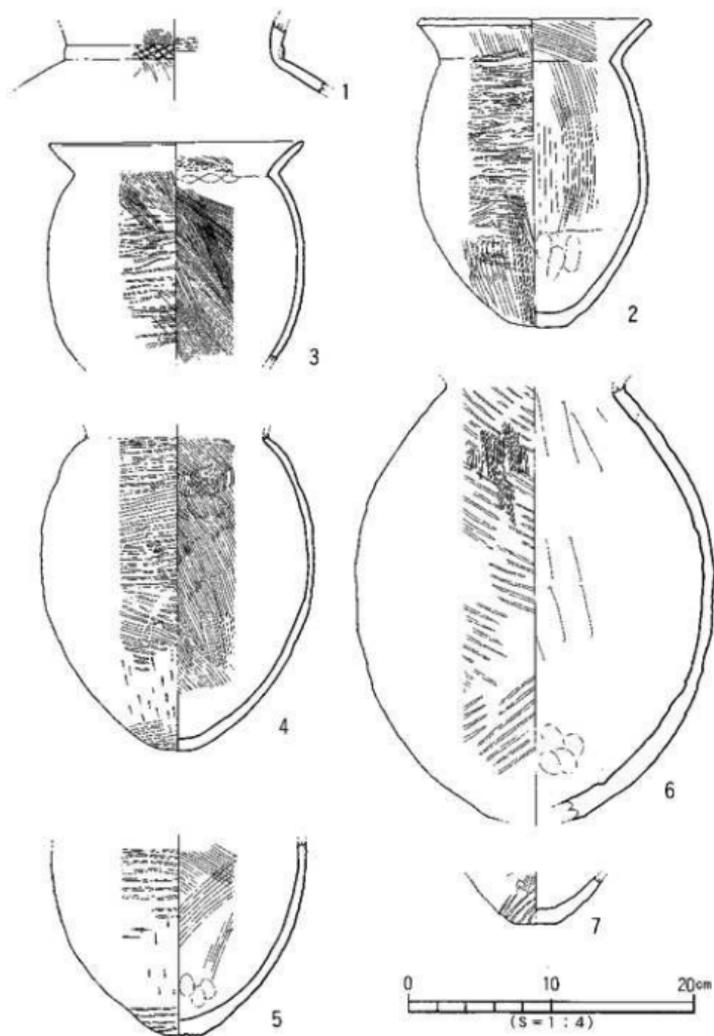
出土遺物 壺形土器 1点、甕形土器 6点、鉢形土器 7点、支脚形土器 3点、石錘 1点が出土した(第29・30図、図版22・23)。

1は壺形土器である。頸部に貼り付け凸帯文をもつ。凸帯文上には斜格子目文の刻み目が見られる。

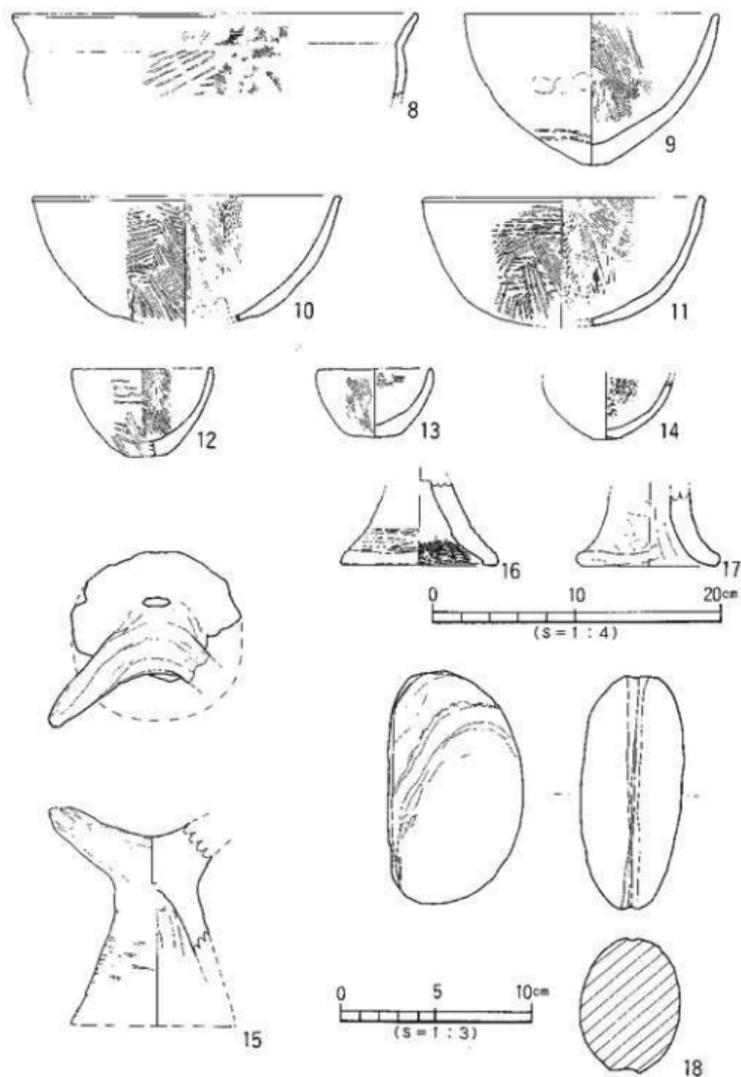
2～7は甕形土器である。いずれも叩き技法で成形される。2は肩部の張りが弱く、口縁部は長く、屈曲するものである。底部は丸みのある平底となる。3は肩部の張りが強いもので、口縁部は長く、端部が先細りするものである。やや頸部径が大きく、締りのないものとなる。4は頸部が張り、頸部の締りが強いものである。叩き成形後、胴下位は板状工具によるナデないし削りが行われる。5は4と同形態のものである。6は長胴で胴下半部が丸く張るものである。7は4・5と同形態のもので底部片である。底部外面(接地面)にも叩き痕を残す。



第28図 SB 2 測量図



第29図 SB 2 出土遺物実測図(1)



第30図 SB 2 出土遺物実測図(2)

8～14は鉢形土器である。8は屈折する口縁部に張りのあまり強くない肩部をもつ。叩き成形後に口縁部が折り曲げられる。9は小さい平底に直口の口縁部をもつものである。胴下半部が縮まる。10・11は同一品の可能性が高いものである。胴下半部はふくらみをもち、口縁端部は小さく「コ」字状を呈する。12・13は丸みのある平底に直口の口縁部をもつものである。口縁部は丸みをもつ。14は小さい底部で、上げ底となる。上部の形態は不明である。

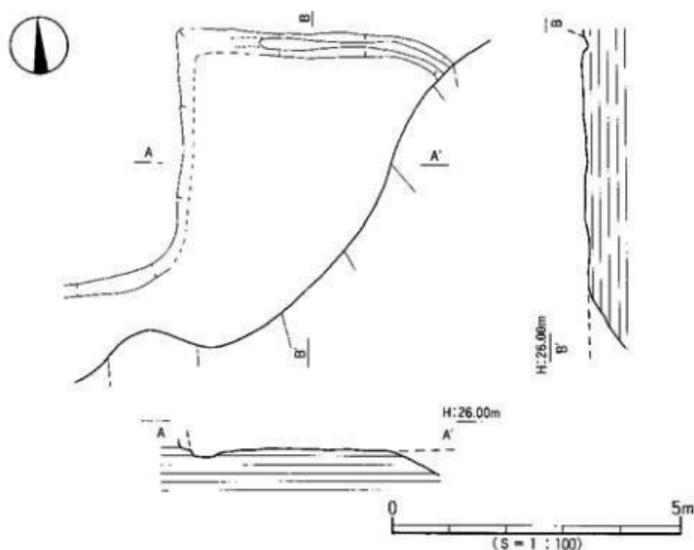
15～17は支脚形土器である。15は受部に2ヶの突起をもち、背面に円孔を穿つ。16・17は裾部片である。16は裾端部の内面が平坦となる。叩き痕、指頭痕が顕著である。

18は石錘である。重さ616gの流紋砂岩質である。紐かけ溝は弧状部は「V」字状に、直線部は幅広の「U」字状となる。

時期：梅本編年弥生後期Ⅲに比定され弥生時代後期末。

### S B 3 (第31・32図、図版24)

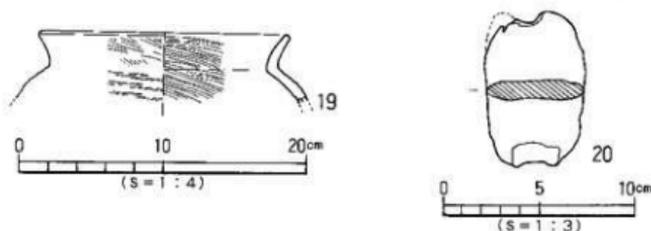
D 6区で、3号墳丘下で検出された。北面と西面の地山をL字状に掘削し壁体をつくり、壁体直下と床面に溝が配される。東側は削平される。平面形態は四角形で、北ないし西に張り出し部をもつものと思われる。検出部分の床面の測量値は1辺4mを測る。床面より柱穴は検出されなかった。出土遺物は床面より石錘と壺形土器の口縁部が出土している。



第31図 SB 3 測量図

19は瓠形土器片である。叩き技法が看取される。20は緑色片岩の石錘で、重さ8.26gが計られる。形態は石砲丁を呈するが、刃部がないことと、石砲丁よりは厚みがあることより石錘と判断した。

時期：出土遺物より、本住居址は弥生時代後期末に比定する。



第32図 SB3出土遺物実測図

## 2) 溝 (SD)

### SD2

土壌群の北に位置し、第26図に示すように東西全長6m、幅0.2m、深さ2cmを測る。北壁が高くつくられ、溝は南西に延長する様相が強い。前述のごとくSB2との切り合いは不明である。内部から遺物の出土はみられない。

## 3) 土壌 (SK)

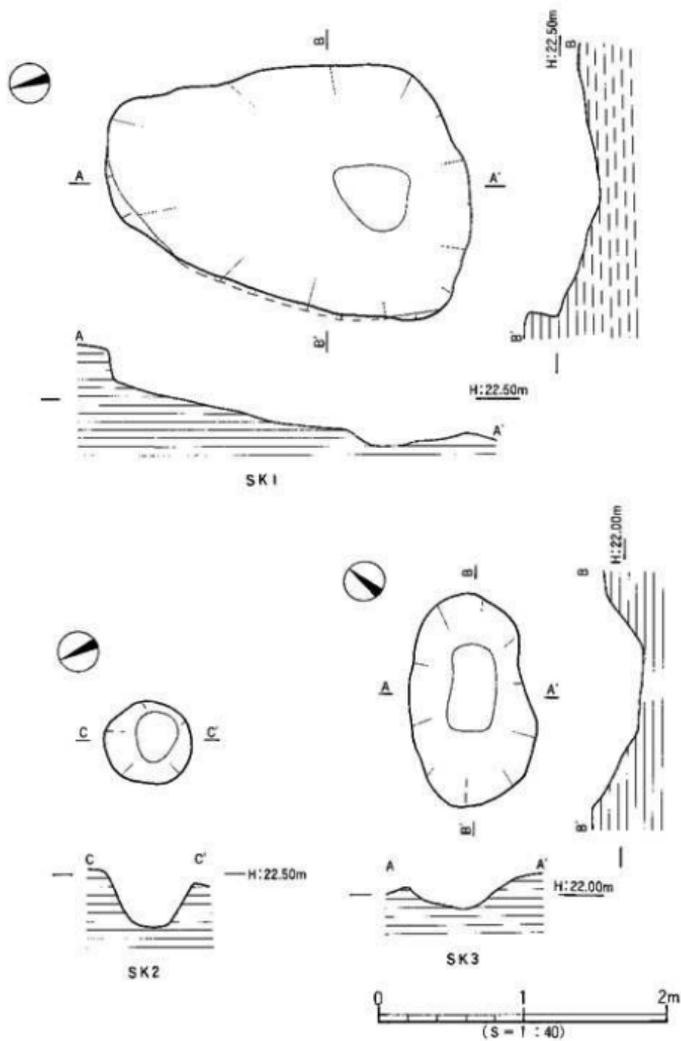
第26図に示すように、7基が群をなし検出された。7基のうち2基 (SK6・7) からは弥生土器が出土したが、その他の土壌 (SK1～5) には遺物はみられない。土壌はいずれも土器が出土した2基に近接し、半径5m以内に位置するところから、弥生時代の土壌と考える。

SK1 (第33図、図版18-1) D2区にある。不整楕円形で、床面は傾斜がみられる。規模は2.5×1.7m、深さ20cmを測る。検出上面では弥生土器を表面採集している。

SK2 (第33図) C2区にあり、SK1 (第26図) に接する。円形で、直径60cm、深さ34cmが測られる。出土遺物はない。

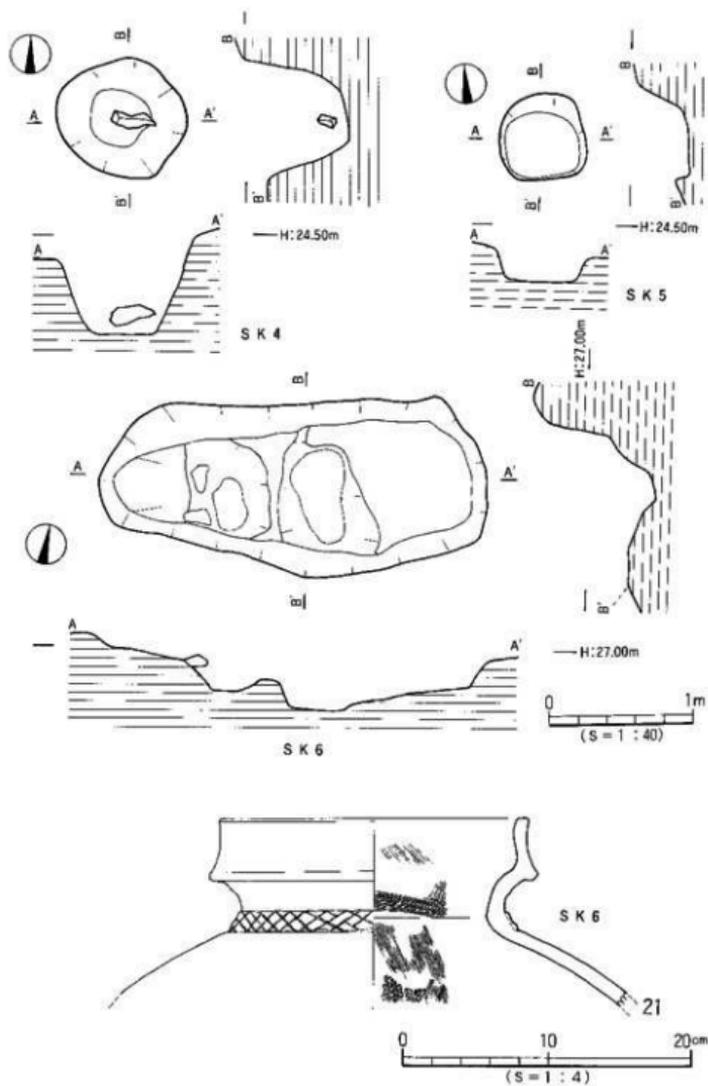
SK3 (第33図) C3区に位置し、楕円形を呈する。規模は、1.5×0.85m、深さ30cmを測る。出土遺物はない。

全尾羅山遺跡の調査



第33図 SK1・2・3 測量図

遺構と遺物



第34図 SK 4・5・6 測量図・出土遺物実測図

S K 4 (第34図) C 3 区にあり、円形を呈し、直径90cm、深さ70cmが測られる。基底面より10cm上位に角礫が検出されている。角礫は、石器素材ではない。

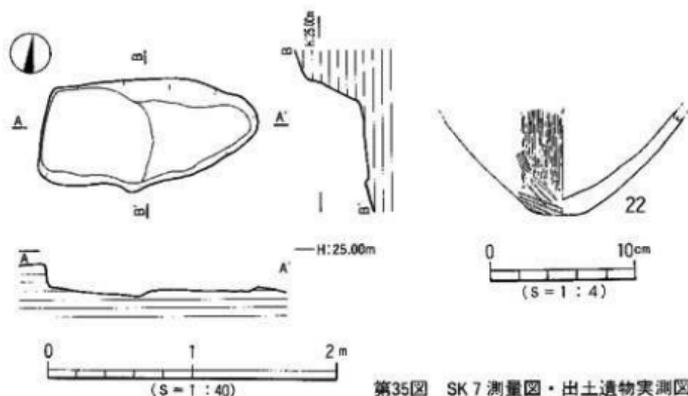
S K 5 (第34図) D 3 区にあり、円形を呈し、直径60cm、深さ20cmを測る。出土遺物はない。

S K 6 (第34図、図版24) D 3 区にあり、不整楕円形を呈し、東西2.7m、南北1.2m、深さ0.4mが測られる。内部より複合口縁壺と角礫が出土している。21は複合口縁壺である。口縁接合部はタガ状にわずかに外方に張り出す。頸部の貼付凸帯上には、斜格子日文が施される。弥生時代後期末。

S K 7 (第35図、図版18-2) D 5 区にあり、不整楕円形を呈する。東西1.5m、南北0.8m、深さ25cmが測られる。内部より、鉢形土器底部が出土している。22の底部は、外面に叩きが施される。弥生時代後期末。

#### 4) その他の出土遺物 (第36図、図版24)

23はD 3 区の表探品である。23の鉢底部は、叩き成形され、放射状に5面がつくられる。前述のS B 2 出土の支脚 (第30図-16) に同技法がみられる。



第36図 表探遺物実測図

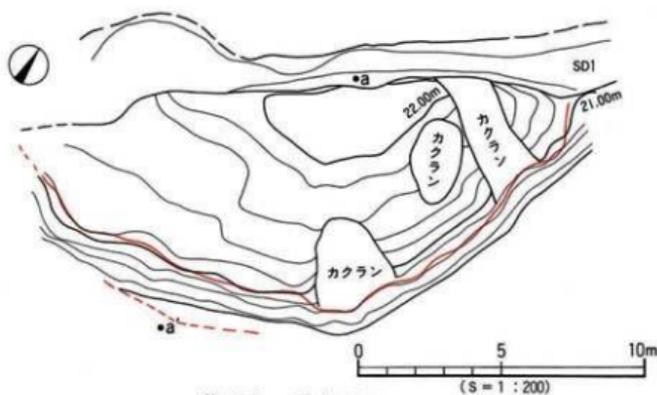
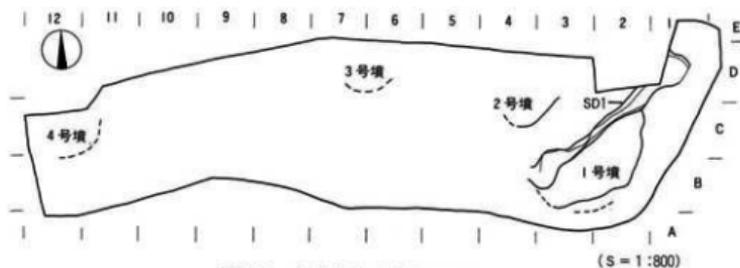
(2) 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、古墳4基（1～4号）、溝1基（SD1）があげられる（第37図）。

1号墳（第38・39図、図版19-1）

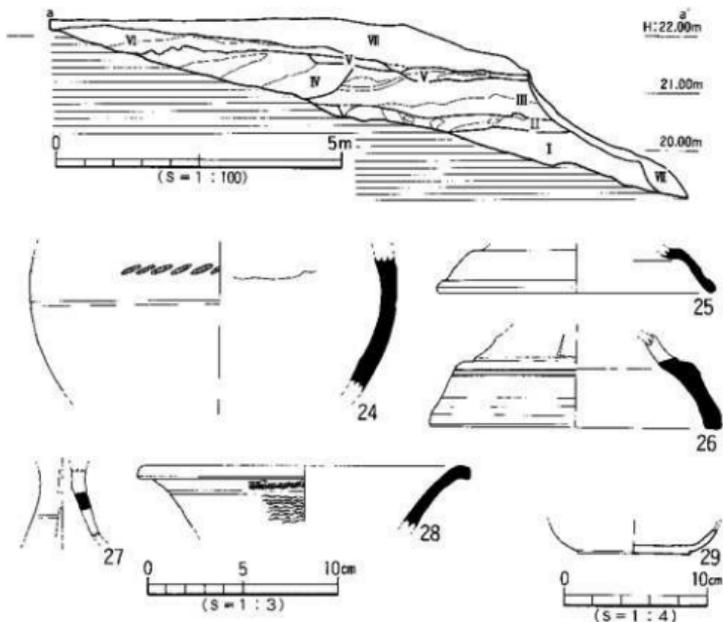
B2・3～C2区で検出された。SD1に北側を切られ、墳形は現状では半円形が示される。主体部は未検出である。墳丘の東部では後世の掘り込みが検出された。作業終了段階で墳丘裁ち割を行った結果、第39図に示す土器が検出された。

墳丘は版築層を確認した。墳丘の盛り土は、6つに大別される（第39図）。



工程Ⅰ：地山削平後、淡褐色土（赤褐色土がブロック状に入る）を盛り、乗平化させる。  
 工程Ⅱ：褐色土に赤色粘土や暗褐色土を混入したものを盛り。工程Ⅲ：淡黄褐色土と暗褐色土を互層とし、褐色土や暗褐色土の一部に用いる。工程Ⅳ：北部に盛土を行う。工程Ⅴ：工程Ⅲの上部を淡褐色土（赤褐色土のブロック入）と淡黄褐色土との互層で覆う。工程Ⅵ：工程Ⅳの上部を淡褐色土（赤褐色土のブロック入）と褐色土の互層で覆う。工程Ⅵ以降については盛土が近現代層（Ⅶ）となるため不明である。出土品（第39図24～29）は29を除くと24～28は版築層の出土であり、墳丘築造時の混入品と考えられるものである。

24～28は須恵器である。29は土師器。24は壺で肩部に2条の沈線を施し、沈線上位には斜格文が刻まれる。25の外面には、2段に凹線が施され段状を示す。裾部と脚部の境には稜がみられる。26の脚部には透かしが施され、裾部と脚部の境には上下2段の凹線が施され、誇張がみられる。27は高坏脚部で、長方透かし穴と凹線が施される。28は壺の口縁部で口唇面が胎子状に肥厚する。頸部には横沈線を施し、これを境に上下に波状文が刻まれる。29の坏底部は糸切りで、回転痕が直上に延びる。



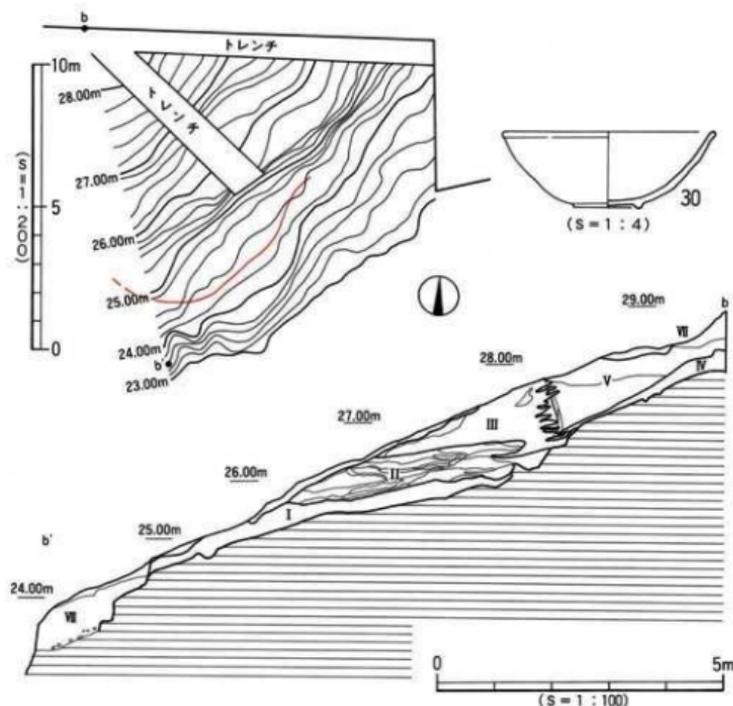
第39図 Ⅰ号墳土層図・出土遺物実測図

## 遺構と遺物

### 2号墳(第40図)

C3～4区にあり、西側が深く削平され(土砂採集地点とされる)、主体部は未検出である。墳丘は、残存する限り5つに大別される。工程I:地山削平の後、暗褐色土を盛る。工程II:工程Iの上部に緑～暗褐色土と礫を混入させた土を互層としたものを盛る。工程III:黒色土を盛る。工程IV:北部の基盤層を黒色土を用いて築造する。工程V:工程IVの上部に、褐色土と赤色土を用いて盛り上げる。以降の工程は、現表土(VII)にて不明である。出土遺物は、後世の遺物はあるが、古墳に直接関係するものは出土していない。

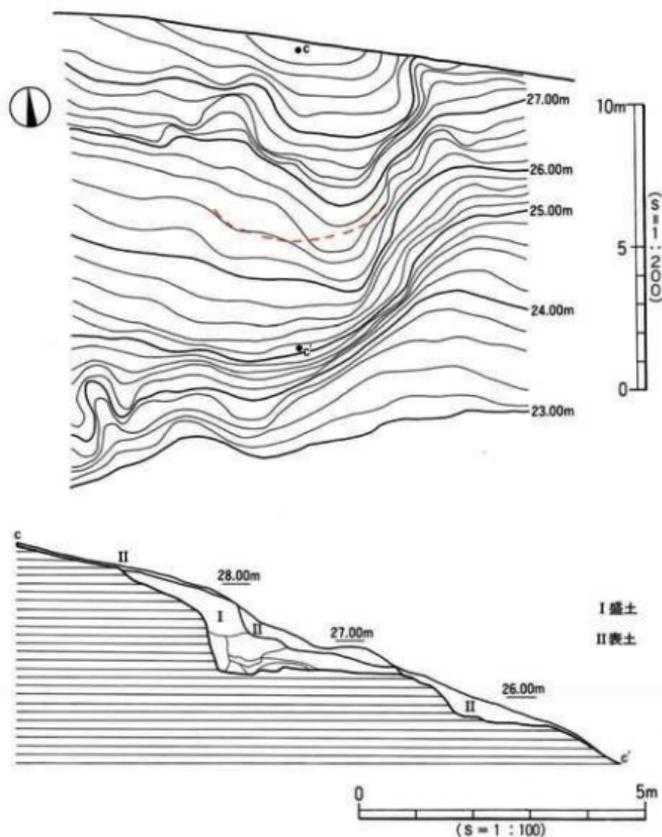
30(第40図、図版24)は瓦器で、輪高台がみられる。口唇端部は丸く仕上げられ、外面直下は撫でられ凹状を呈する。指頭調整の器面は凹凸が多く、内面には暗文はみられない灰色を呈する。



第40図 2号墳測量図・出土遺物実測図

3号墳 (第41図)

D6区で、SB3の上部にあたり、墳丘東面は深く削平される。残存形態は半円形で、わずかに盛り土が残存する。西側は耕地整備によって段状地となり、主体部は未検出である。墳丘は、地山削平の後、黄褐色土と黒色土、褐色土を用いて盛土される。出土遺物はない。

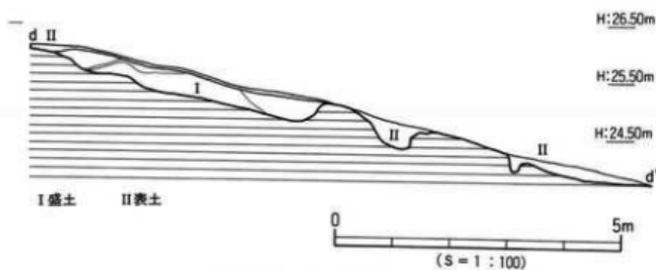
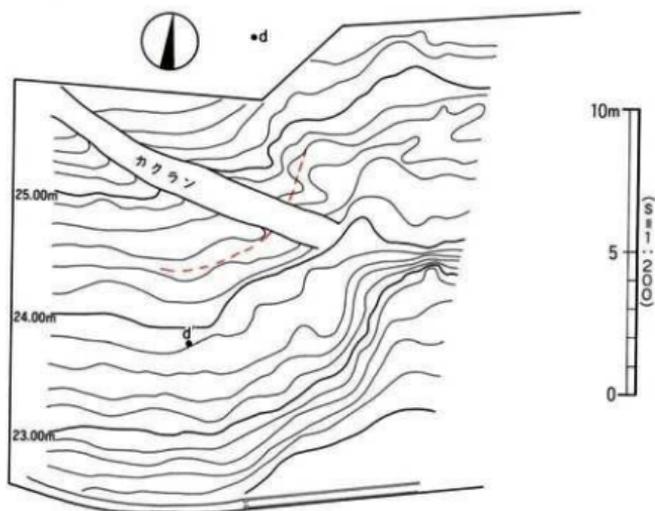


第41図 3号墳測量図

遺構と遺物

4号墳 (第42図)

調査地西端で検出された。墳丘は後世の耕作による整地のために段地となり、調査前にはすでに地山の一部がみられ、主体部は検出できなかった。墳丘の一部を検出し、地山削平の後、褐色土と小礫を含む褐色土により、盛土されていたことを確認した。出土遺物はない。



第42図 4号墳測量図

SDI (第37・38図、図版19-2)

B3～C2にある。東端はD1区の落ち込みに接し、西は1号墳を経て、SB1の中心部を貫き消滅する。幅60cmで、東側部で流入が考えられる弥生土器細片が採集されている。

表採遺物 (第43図)

31はB4区出土の須恵坏身である。立ち上がりは尖り、受部は丸く直立気味である。

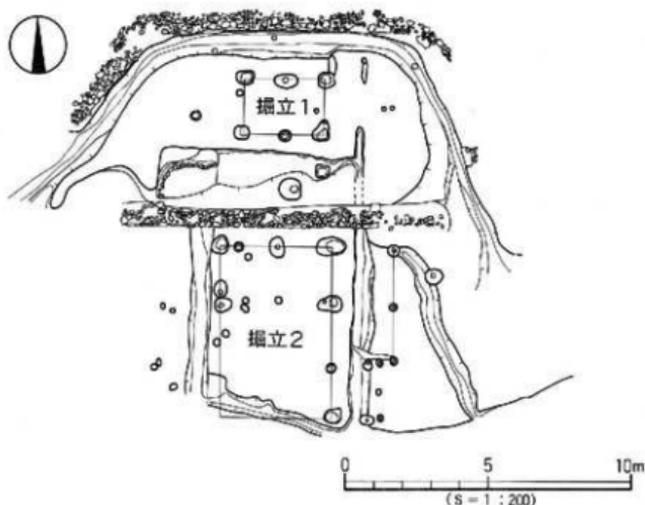


第43図 表採遺物実測図

### (3) 近世以降の遺構と遺物

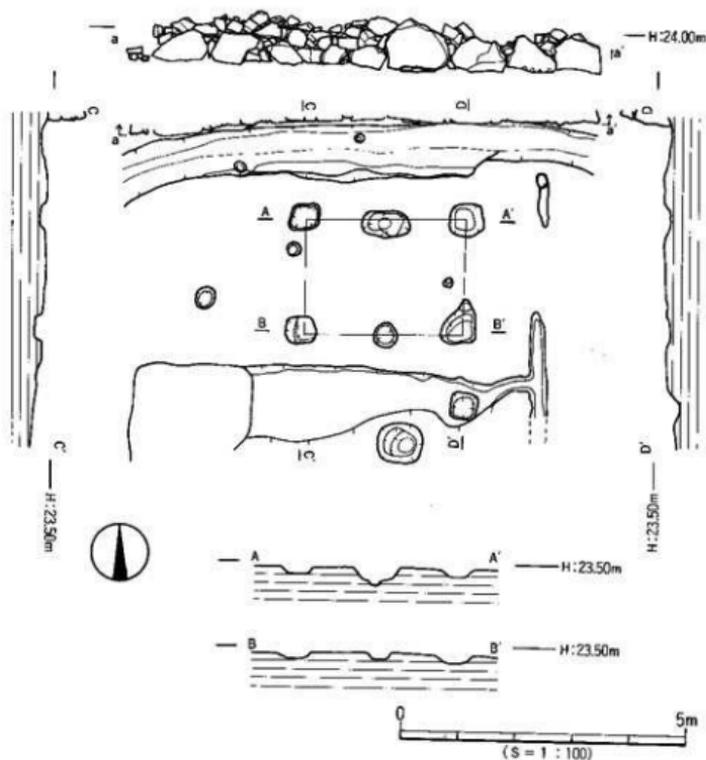
遺構では、調査地中央に検出された山岳寺院の廃寺址がある。平面形が台形の掘削地に北面と南面2段に床面がつくられ、床面より規模の異なる掘立柱建物が検出された。

掘立柱建物1 (第44・45図、図版20) 桁行2間(1.5m等間)、梁間1間(2m)で、さらに東南隅に検出された柱穴から、全体には2×2間が想定される建物である。



第44図 掘立柱建物配置図

遺構と遺物



第45図 掘立柱建物 | 測量図

建物の北には排水路と石垣が配される。また、北面と南面の境は、低い石垣により更に仕切りされる。

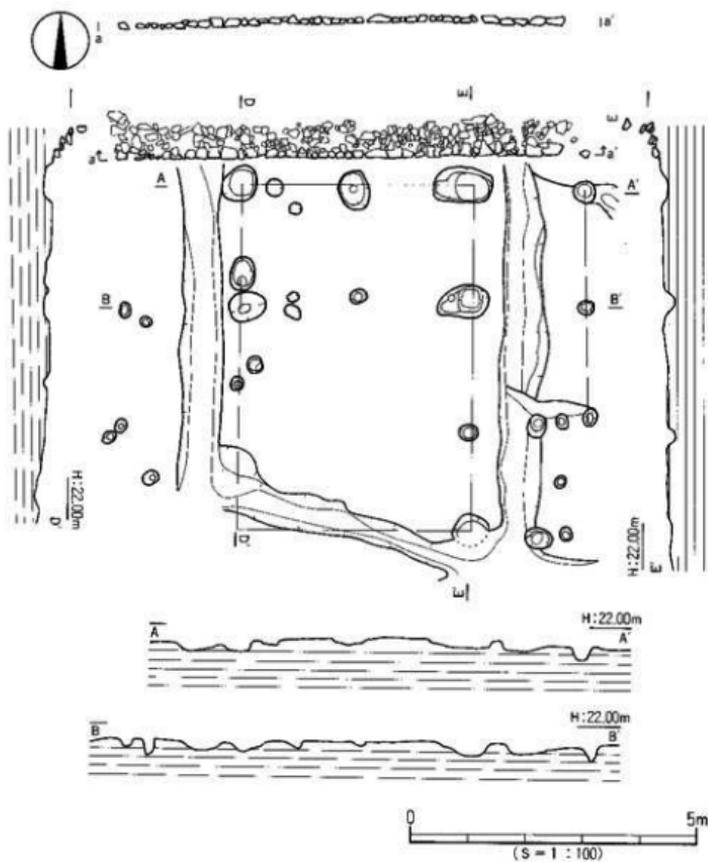
掘立柱建物 2 (第46図) 桁行3間(2m等間)、梁間3間(2m等間と、2.1m)で、小径の柱穴なども検出され、全体では4×3間の規模が想定される。

掘立柱建物 1・2 の出土遺物は、北の建物 1 から陶磁小壺 6 組、南の建物 2 から土師器皿 1 点、灰釉系陶磁皿 3 点、古銭寛永通寶 3 枚が出土している。

建物の性格は北面建物が本堂、南面は回廊付の護摩堂が考えられる。調査区域外の下段には、常福寺、金毘羅宮が現存しており、検出された建物址は旧堂宇が推定される。

出土遺物 (第47図) 32-35は北面出土の小壺 6 組の内の 2 組である (32-35以外は図版25-27・29・30に掲載した)。36-38は南面の出土遺物である。

全崑崙山遺跡の調査



第46図 掘立柱建物2 測量図

遺構と遺物

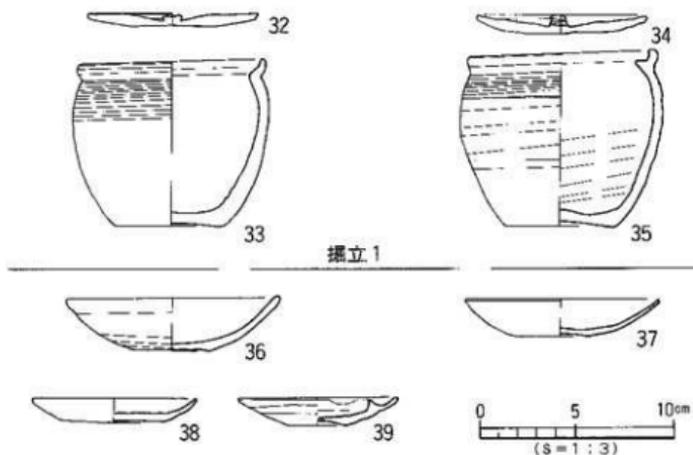
32・34は宝珠形つまみがみられる蓋付き陶磁壺で、蓋の内面に経文梵字の墨書がみられる(図版25・28)。また35に限り壺内部にも墨書がみられる(図版28)。赤銅色を呈する6組の壺は口径10cm、器高9cmのものとやや小型の口径9cm、器高8cm前後のもの2形態がみられる。宝珠付の蓋には、上面水平のものと上方に反りがみられるものがある。端部は、鋭角と丸みをもつものがみられる。口縁蓋受け部は、内側は撫でられ段がつくられる。体部内面は稜が多く段状に、外面は肩部から頸部にかけて1条沈線が回転し多条沈線状を呈する。沈線下位は撫でられる。底面には「匚」(図版27)、「㊦」(図版29)の窯印がみられるものがある。

38は底面糸切りの土師器の坏で、外面は撫でによって稜がつくられる。

36・37は内面灰釉の陶器皿である。

36は淡青色を呈し、内面にはヘラ工具による文様がみられる。37は灰黒色を呈し、レンズ状の上げ底が示される。39は内面にかえり状をもち、かえりには三日月状の注口が施される。

これらは18世紀後半にみられるものである。



第47図 掘立柱建物出土遺物実測図

## 4. 小 結

金毘羅山遺跡の調査では、弥生時代～古代及び近世・近代の生活関連遺構を検出した。

### 弥生時代

金毘羅山遺跡は、松山平野の北端部に近い地域のなかにある。この地域にある弥生時代遺跡には、前期から中期までの堀江遺跡、吉藤遺跡、山越遺跡が知られ、後期に至っては検出例も少なく、三光遺跡が知れるくらいである。このような状況の中で、今回の金毘羅山遺跡の調査では後期末の住居址の一端を垣間見ることができたことは、当地域の弥生時代の集落構造を考える上で貴重な資料となるであろう。

遺構の全容は把握されなかったが、SB1～3は丘陵斜面に立地する竪穴式住居址である。

L字形の高壁を擁し、防風に対する考慮がなされた住居址と考える。河川、海浜に近い丘陵部の住居址形態の一部が示されている。また、掘り方の形態から構築材の削減や構造の簡略化も推定されなだろうか。

D2～C2区にある土壇群は、性格不明の上壇群である。ただし、狭い範囲に集中して検出されることと、SD2によって区画されたものとする、一群のものと考えられなだろうか。

### 古墳時代

古墳に伴う主体部は今回は検出されなかった。調査前には古墳既存の情報も掴み得たが、版築盛土の確認にとどまった。1号墳では他の墳丘より遺物が多く出土する傾向が示される。この盛土は最利用の土壌と考えられるものであり、課題の残される1号墳盛土の遺物である。

### 近代以降

終わりに調査地中央の掘立柱建物址は山岳寺院の御堂を示す。調査区域外の下郷部には常福寺が所在し、やや東寄りには金毘羅宮が位置する。従って検出の建物址は、現存する寺院の旧堂宇が考えられる。検出した柱穴の規模によって、上の建物を本堂、下を護摩堂と推定した。文献資料等も乏しく、常福寺は松山市和気町馬木の善福寺の末とされ、元和元年境内に金刀比羅の尊体を安置、崇敬したと記述がみられる。元和年間(1615～1623年)以降、幾度かの改築があり、今回検出されたものは、その内のひとつと考えられる。

以上のような結果に基づき、金毘羅山遺跡は、弥生時代後期末から近世・近代に至る複合遺跡として判断され、和気・堀江地域の同時代の集落構造解明の数少ない資料として、貴重な調査資料であると評価される。

なお、今回の調査において、多くの御配慮をいただいた常福寺、金毘羅宮の関係者には末ながら記して感謝申し上げます。

遺構・遺物一覧—凡例—(梅木謙一・水口あをい)

(1) 以下の表は、本検査検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 ( ) : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胸中→胴部中位、柱→柱部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( ) 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 砂・長(1~4)多→「1~4mm大の砂粒・長石を多く含む」である。焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表7 竪穴式住居址 一覧

竪穴(SB)	時期	平面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	主柱穴 (本)	内 部 施 設				埋 埋 溝	備 考
					高床	土 壇	炉	カマド		
1	弥生後期か	四角形	3.00×——						○	
2	弥生後期	隅丸四角形	3.00×3.30×0.20	2					○	
3	弥生後期	四角形	4.00×4.00×——						○	

表8 土壌 一覧

土壌(SK)	地区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ(m)	埋 土	出土遺物	備 考	時 期
1	D 2	不整形円形	舟底状	2.30×1.70×0.20	暗褐色土	ナシ	流石込みで弥生片	弥生
2	C 2	円形	舟底状	0.60×0.57×0.34	褐色土	ナシ		弥生
3	C 3	楕円形	舟底状	1.30×0.85×0.30	褐色砂質土	ナシ		弥生—古墳
4	C 3	円形	舟底状	0.90×0.70×0.60	黄褐色土	片礫、ナシ		弥生—古墳
5	D 3	円形	平底状	0.60×0.60×0.20	黄褐色土	ナシ		弥生—古墳
6	D 3	不整形円形	舟底状	2.66×1.20×0.40	黄褐色土	弥生土器片 角燧		弥生後期末
7	D 5	不整形四角形	平底状	1.50×0.75×0.25	暗褐色土	弥生土器片		弥生後期

金毘羅山遺跡の調査

表9 S B 2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	寸法(cm)	形態・施文	調 整		色 (内面) (外面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	壺	残径(19.0) 残高 4.0	底残存。底部下側に貼り付けの書文。凸帯土は割割丁の跡あり。	ハケ	㊦ ハケ ㊧ マメツ	淡灰褐色 淡茶褐色	石Ⅱ0-2 ○		22
2	罎	口径 16.3 器高 21.7 底径 4.3	底く外反する口縁部。丸みのある平底。胴下がふくらむ。	㊦ ハケ ㊧ タタキ ㊨ 胴下 タタキ→ハケ	㊦ ハケ ㊧ 押押正	灰青褐色 灰褐色	石Ⅱ0-4 ◎		22
3	罎	口径(17.7) 残高 15.5	外反する口縁部。口縁部は丸く細い。	㊦ ナデ ㊧ タタキ→ハケ ㊨ タタキ	ハケ	黄赤褐色 淡茶褐色	石Ⅱ0-4 金ウソモ ◎	庫	22
4	罎	残高 22.5 底径 3.0	ふくらみをもつ胴部。底部は小さく丸みをもつ平底。	㊦ ハケ→タタキ ㊧ 胴上 ㊨ 胴中 ㊩ 胴下 タタキ(底の) タタキ ウソリ タタキ	㊦ 胴上・中 ハケ ㊩ 胴下 ナデ	淡茶褐色 灰黄褐色	石Ⅱ0-2 ○	出現	22
5	罎	残高 13.5 底径 3.5	ふくらみをもつ胴下。底部は小さく丸みをもつ平底。底外側に印が強い。	㊦ タタキ→ハケ ㊧ タタキ	㊦ 押押正 ハケ	黄灰色 灰灰褐色	石Ⅱ0-3 ◎		22
6	罎	残高 31.0	ふくらみをもつ胴部。底部のしまりが強い。	㊦ 胴上 ㊧ タタキ→ハケ ㊨ 胴中 タタキウソリ	㊦ 胴上・中 灰ナデ ㊩ 胴下 ナデ	淡茶褐色 灰黄褐色	石Ⅱ0-2 ○		22
7	罎	残高 3.3 底径 3.0	丸みのある平底。	タタキ→ハケ	ナデ	灰黄褐色 黒灰色	石Ⅱ0-2 ◎	黒点	
8	鉢	口径(27.5) 残高 5.3	外反する口縁部。内面に凹。甲き縁口縁成形。	㊦ ハケ ㊧ タタキ	㊦ 胴上ハケ	黄褐色 黄褐色	石Ⅱ0-0 ○		
9	鉢	口径 17.5 器高 10.8 底径 1.5	丸みのある小さい平底。口縁部ナデにより面をとる。	タタキ→ナデ直し	ハケ	灰褐色 灰褐色	石Ⅱ0-0 ◎	黒点	23
10	鉢	口径(21.0) 残高 8.3	直口口縁。口縁部はナデにより面をとる。	タタキ→1部ハケ	ハケ	黄褐色 黄褐色	石Ⅱ0-0 ○		
11	鉢	口径(19.0) 器高 9.5	直口口縁。口縁部はナデにより面をとる。	タタキ→1部ハケ	ハケ	黄褐色 灰黄褐色	石Ⅱ0-2 ○	黒点	23
12	鉢	口径 9.8 器高 3.8 底径(3.0)	丸みのある平底。直口口縁。口縁部は丸い。	タタキ→ハケ	ハケ	黄褐色 黄褐色	石Ⅱ0-0 ◎	黒点	23
13	鉢	口径 7.8 器高 4.8 底径 3.5	丸みのある平底。直口口縁。口縁部は細く丸い。	㊦ ナデハケ ㊧ ナデ	割割多 1部にハケ	茶褐色 茶褐色	石Ⅱ0-0 ◎	黒点	23
14	鉢	残高 4.0 底径 2.0	小さい直出する底盤。小さく上げ部となる。直口口縁。	マメツ	ハケ	黄褐色 灰褐色	石Ⅱ0 ○		23
15	支脚	器高 12.8 底径(12.3)	足部は支脚が2本。背側に直径2cmの円孔1ヶ。	㊦ ナデ ㊧ タタキ	ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石Ⅱ0-4 ◎	出現	
16	支脚	残高 6.0 底径(11.0)	甲きにより器上部が重なる。	タタキ	ハケ	茶褐色 茶褐色	石Ⅱ0-0 ◎		
17	支脚	残高 5.3 底径(8.8)	器底部は、器壁が厚く、凹凸が強い。	タタキ(マメツ)	ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石Ⅱ0-2 ◎		

小 結

SB 2 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
18	石鏃	完形	燧石	12.3	7.1	5.1	616		23

表10 SB 3 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (内面) (外面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
19	甕	口径(17.4) 残高 4.8	明き口縁部完形。	㊶ ハケ ㊷ タタキ	ハケ	黄茶褐色 黄茶褐色	石灰口-口 赤色酸化土 ○		24

SB 3 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
20	石鏃	完形	燧石片	5.0	8.2	1.0	8.26		24

表11 SK 6 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (内面) (外面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
21	壺	口径(21.4) 残高 13.0	筒身口縁人型窓、胴下部に 胎り付け凸部文。内面には 斜格子の刻み目。	磨滅不明	ハケ	灰褐色 灰褐色	石灰口-口 ○		26

表12 SK 7 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (内面) (外面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
22	甕	口径(3.0) 残高 7.0	丸みのある平底。	タタキ ハケ ㊶ タタキ	磨滅	灰褐色 灰褐色	石灰口-口 ○		

表13 表採 遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (内面) (外面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
23	埴	口径 1.0 残高 2.0	突出する小さい突起。胎り による面をもつ。	灰ナゲ	灰ナゲ	灰黄褐色 粉灰褐色	石灰口-口 ◎		24

表14 1号墳 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (内面) (外面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
24	壺	残高 7.2	壺の胴部片。胴部下に1 条の凹線、中段に刺突状点 文を施す。	ヘラタズリーヨコナテ	ヨコナテ	淡灰色 灰色	赤 ◎		24
25	片断	直径 13.2 残高 2.4	片断の物部片。胴部は 丸く外方にわずかに肥厚す る。	凹線ヨコナテ	凹線ヨコナテ	灰色 灰色	赤 ◎		24
26	片断	直径 15.6 残高 3.1	胴部片。胴中位部で段をな して曲角。胴部は平削な 面をなす。スキャンあり。	凹線ヨコナテ	凹線ヨコナテ	黄灰色 青灰色	赤(赤)長形 ◎		24

全尾羅山遺跡の調査

1号墳 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(内面)色調 (外面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
27	高坏	残高 3.6	高坏断片。上下に3段の長方形スリあり。	ココナテ	ココナテ	黒灰色 黒灰色	密 ◎		24
28	甕	残高 4.0	胴部に1条の沈線が走り、その上下に流状文を施す。 口縁部は下巻する。	ココナテ→飯文	ココナテ	灰色 灰色	密(砂粒) ◎		24
29	皿	口径 17.0 残高 1.9	平底の底形。口縁部は内凹気味にたちあがる。	ココナテ	ココナテ	淡黄褐色 淡黄褐色	密(砂粒) ○		

表15 2号墳 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(内面)色調 (外面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
30	瓶	口径(14.8) 器高 3.4 底径 4.7	胴部、輪高台の丸く厚い口縁部はわずかに外反する。	ナテ	ヘラミカキ	灰色 淡出灰色	密 ◎		24

表16 表探 遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(内面)色調 (外面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
31	坏身	口径(11.0) 残高 3.7	たちあがりは細く内傾し、端部は尖る。受帯は上方にのみ、受帯端は広くおさめる。	ココナテ	ココナテ	灰色 灰色	密 ◎		

表17 掘立柱建物1・2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(内面)色調 (外面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
32	蓋	口径 8.8	墨書あり。 (四版参照)			赤褐色 赤褐色	密 ◎	掘立1	25 26
33	蓋	口径 9.4 器高 8.7 底径 8.3				赤褐色 赤褐色	密 ◎	掘立1	25 26
34	蓋	口径 8.7	墨書あり。 (四版参照)			赤褐色 赤褐色	密 ◎	掘立1	25 26
35	蓋	口径 9.6 器高 9.15 底径 8.2	墨書あり。 (四版参照)			赤褐色 赤褐色	密 ◎	掘立1	25 26
36	坏	口径(11.0) 器高 2.7 底径 2.8	口縁部削り。	口縁部に軸	軸	淡青色	密 ◎		掘立1
37	皿	口径(10.0) 器高 1.13 底径 3.3	底径、おすかに凹む。	口縁部二軸	軸	灰褐色	密 ◎		掘立2
38	皿	口径 8.3 器高 1.2 底径 6.4		横ハケナテ	横ハケナテ		密 ○		掘立2
39	皿	口径 18.2 器高 1.5 底径 5.0	底径におすかに凹む。かえりをもつ。	皿	皿		密 ◎		掘立2

第 4 章

墳古石ツ三谷<sup>な</sup>船<sup>たに</sup>ヶ

## 第4章 船ヶ谷三ツ石古墳の調査

### 1. 調査の経過

#### (1) 調査の経緯

1989（平成元）年9月、四国セルラー電話株式会社より、松山市船ヶ谷町乙14-1、同乙13-1、同乙9-1における開発にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課に提出された。

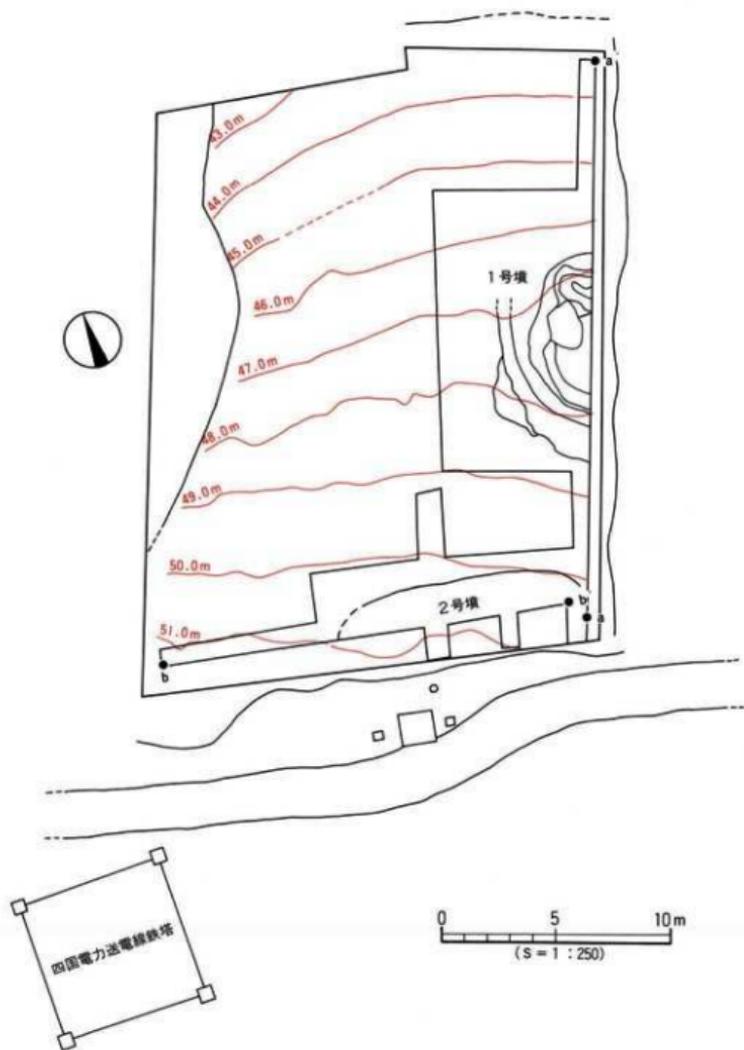
当該地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「17 東山町古墳群」内にあたり、周知の遺跡として知られている。当地は丘陵の尾根部にあり、丘陵下の沖積低地には、縄文時代後・晩期の船ヶ谷遺跡や大河遺跡がある。また、当地を含む松山市北西部の丘陵地帯には前方後円墳（永塚古墳、船ヶ谷向山古墳）や前期古墳（高月山古墳・方墳）があり、古墳時代の墓域であったことが近年の調査により明らかとなってきている。



第48図 調査地位置図

(S=1:5,000)

船ヶ谷三ツ石古墳の調査



第49図 調査区測量図

## 調査の経過

これ等のことより、松山市教育委員会は、当該地における埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲や性格を確認するために、1989（平成元）年10月に試掘調査を実施した。試掘の結果、古墳の一部と須恵器が検出された。

この結果を受け、松山市教育委員会と四国セルラー電話株式会社の両者は、遺跡の取り扱いについて協議を行い、開発によって失われる遺構について記録保存のために、発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、当地域の古墳群の構造を解明することを主目的とし、松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センターが主体となり、四国セルラー電話株式会社の協力のもと1990年2月13日より調査を開始した。なお、野外調査は2～3月、室内調査は4～9月の間にわたり実施した。

### （2）調査組織

遺跡名	船ヶ谷三ツ石古墳
調査地	松山市船ヶ谷町乙14-1、乙13-1、乙9-1
調査面積	519㎡
調査期間	平成2年2月13日～同年9月30日
調査委託	四国セルラー電話株式会社
調査担当	森原 敏秀（現 新潟県六日町教育委員会）

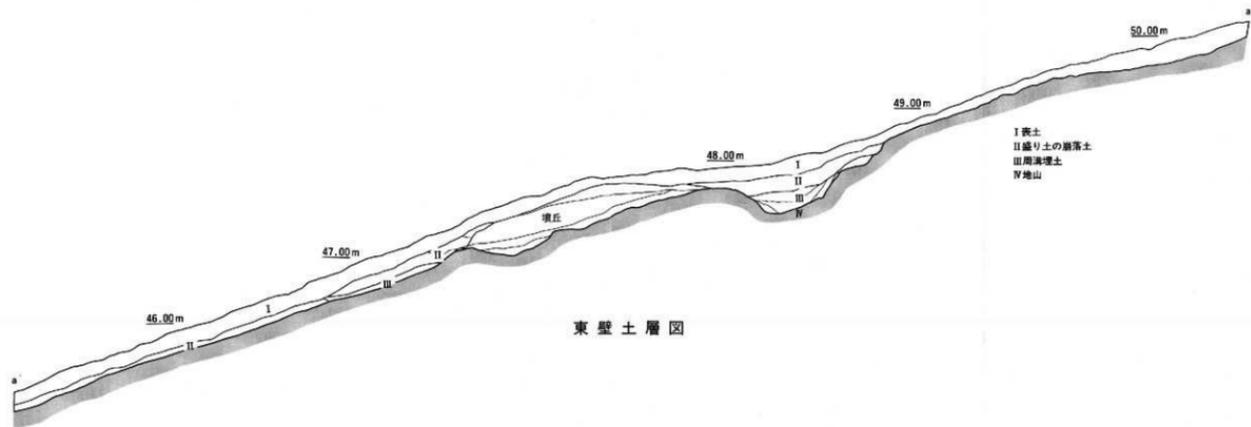
## 2. 層位

調査地は、丘陵の傾斜地であり、標高42.6～51.8mに立地する。堆積土壌は、その立地条件より表土下は赤色の地山（基盤層）となっている。よって基本層位は、表土と地山に大別され、さらに表土は現・旧耕作土と、古墳の墳丘盛り土と考えられる土層に細分される。また地山は、土壌の硬軟により細分も可能である。

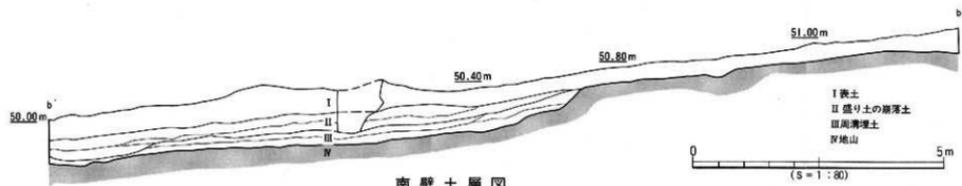
検出遺構は、古墳2基と近現代の耕作に伴う土壌（木の根など）が検出された。

古墳は、調査区の北と東にあり、周溝の一部と墳丘の一部を検出したにとどまり、いずれも古墳の範囲は調査区外におよんでいる。表土を剥くと古墳の墳丘や周溝が検出され、古墳の現況は良好なものではなかった。

なお、調査地の周辺地より埴輪片（図版40）を表採している。



東壁土層図



南壁土層図

第50図 層位図

### 3. 遺構と遺物

検出遺構は、近現代のものを除くと古墳2基を検出した。いずれも前述のごとく、古墳の一部を検出するとどまった。記述上、東壁で検出されたものを1号墳、北壁で周溝の一部を検出したものを2号墳とする。

#### 1号墳 (第51・52図、図版33~36)

調査地の東端中央部で、墳丘と周溝の約4分の1を検出した。表土を剥くと墳丘と周溝が検出された。南に高く、北に低い立地となる。

墳丘は、上部を大きく削平され、さらに木の根により残存部分の一部は破壊されていた。残存する墳丘の規模は、南北(第52図)6.2m、東西2.0mであり、現在高は1.2mを測る。北側に直径1.5×1.9m深さ50cmの不整形な土壇があり、主体に関連する施設が検出された。ただし土壇からの出土遺物はなく、その性格は明確には判断できなかった。墳丘は、南側は地山の削り出しによるもので(上部は削平)、北側は先の上墳とも関係するが、盛り土が検出され、やや異なる築造方法をとる。ただし、これは立地と大きく関係するものと考えられる。墳丘からの遺物の出土はない。

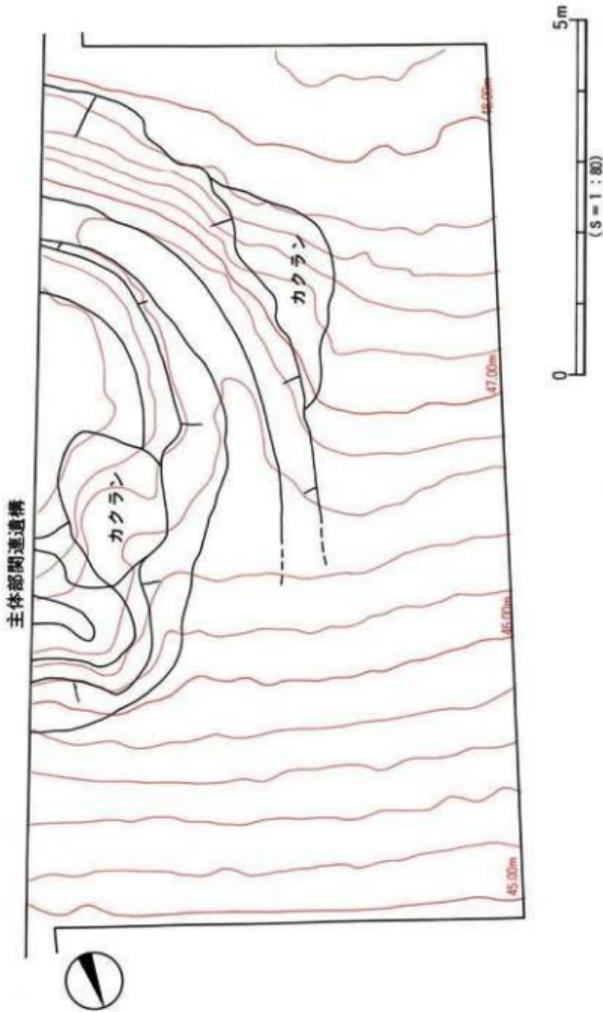
周溝は、南側は残りが良好で、北側は削平され、周溝の肩部は検出できなかった。周溝は、高所である南側では幅が広く検出値は2.7m(上部で)を測る。断面は、ゆるやかな「U」字状を呈し、深さ1.1mを測る。溝底及び埋土下部では須恵器の高坏が設置された状況で検出され(図版35)、その他須恵器の壺や土師器の壺も出土している。後述するが遺物は短期間のなかで時期比定されるものであり、出土状況も有蓋高坏は蓋がされた状況で出土しているなど、一括性の高い良好な資料である。また、これは周溝基底部より出土していることより、周溝内祭祀具として考えられるものである。なお、土器以外の遺物の出土はない。

#### 出土遺物 (第53~55図、図版37~40)

##### 須恵器

蓋(1~9) 全て蓋環の蓋に中央がくぼんだつまみを付した有蓋高坏の蓋。天井部は丸味を帯びており、天井部と口縁部の境界の稜は、丸味を帯び短い。口縁部は端部付近でやや外反しており、器高の約1/2を占める。口縁部は内傾して凹面をなしており、中には明瞭な段をなしているものもある(4・6・9)。調整は天井部の1/3~1/2の範囲で回転ヘラ削りを行い、その後一部分回転ナデ調整を施している。

高坏(10~18) 10は無蓋高坏。坏部は浅く、口縁部は外反している。口縁部は丸くおさめている。体部には2条の凸線の下に波状文を施している。脚部は「ハ」の字形に外反し、端部は大きく段をなしている。脚体部にはカキ目調整を行い、4方向に長方形のスカシ窓がみられる。



第51図 1号墳測量図

11～18は有蓋高坏。坏部のたちあがりは内傾しており比較的高い。端部は内傾し、明瞭な段をなしているものもある(11～13)。底部は丸く、受部は短く上外方へのびており、端部はやや丸味をもつ。底部には1/3～2/3の範囲で回転ヘラ削り調整を行い、一部にカキ目調整を行っているものもある(15)。脚部は「ハ」の字形に外反し、端部は段をなしている。脚体部は全て3方向に長方形のスカシ窓がみられ、カキ目調整を行っているものがある(16～18)。

甕(19～21) 口頸部は外反し、端部は下方、あるいは上方へ屈曲する。19は口頸部外面に波状文を施し、20は頸部から胴部にかけてカキ目調整を行い、更に胴部には平行叩きがみられる。

短頸壺(23) 口縁部は短く直立し、端部は丸く仕上げられている。肩の張りは明瞭で、体部から底部へと扁球形を呈している。外面の胴部下半には回転ヘラ削りを行い、胴部上半には回転ヘラ削りの後、回転ナデ調整を行っている。口頸部と内面の調整は、回転ナデ調整である。

#### 上師器

甕(25) 口頸部は短く外反し、口縁部は丸くおさまられている。体部は球形を呈している。外面胴部上半にはハケ目調整、胴部下半にもハケ目調整をした痕があるが、磨滅している。内面はナデ調整を行っている。

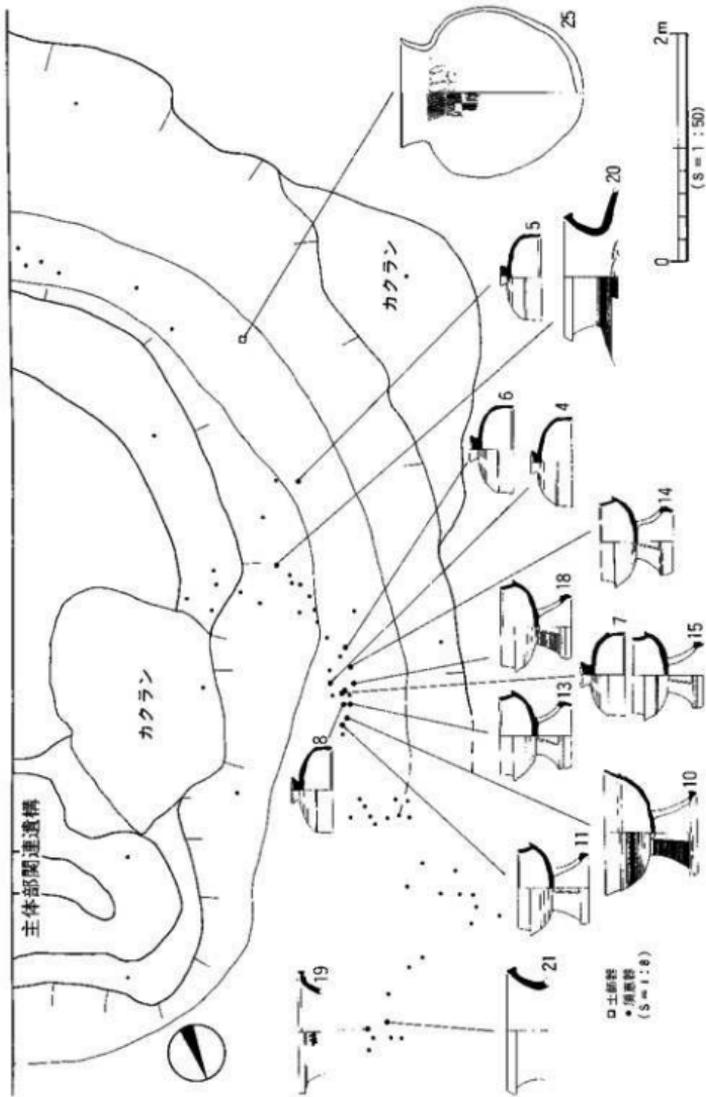
時期：周溝内出土の一括遺物は中村浩編年Ⅰ形式4段階に比定され、築造時期は遅くとも5世紀末～6世紀初頭と考えられる。

#### 2号墳(第49図)

調査地の南端部にあり、調査地外におよぶ。本格的な調査開始にあたり、南端部に東西方向のトレンチを掘り、土層の確認調査をした。その結果、いくつかの土層の互層を検出し、検討の結果古墳の周溝であることを確認した。ただし、周溝の南側部分の肩部は、先述のトレンチにより消失しており、周溝の南側端部は検出できなかった。また、墳丘部は調査地外にあり、今回の調査では周溝の一部の検出と、古墳の墳丘が調査地の南接地にあることを確認するにとどまった。

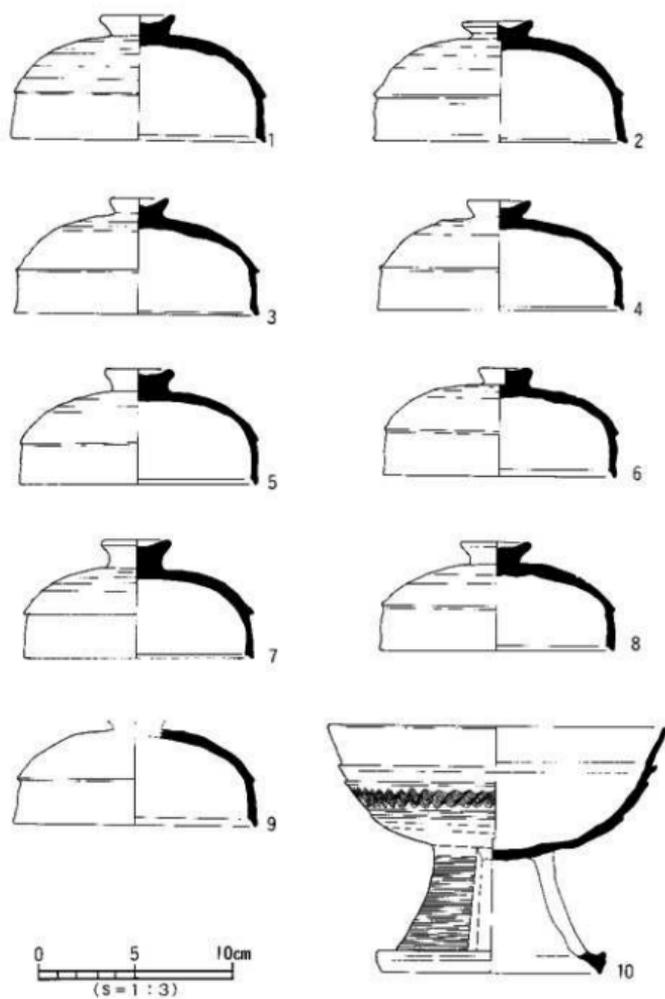
検出できた周溝は、検出値で長さ16.6m、深さ70cmとなる。周溝は幾つかの埋土で埋められた後、墳丘の盛り土により覆われ、その上に近・現代の耕作土が堆積している。周溝からは、遺物の出土はない。

時期：遺物の出土はなく時期を断定できないが、1号墳と同じ墳墓群に含まれるものと考え、6世紀代以降と推定される。



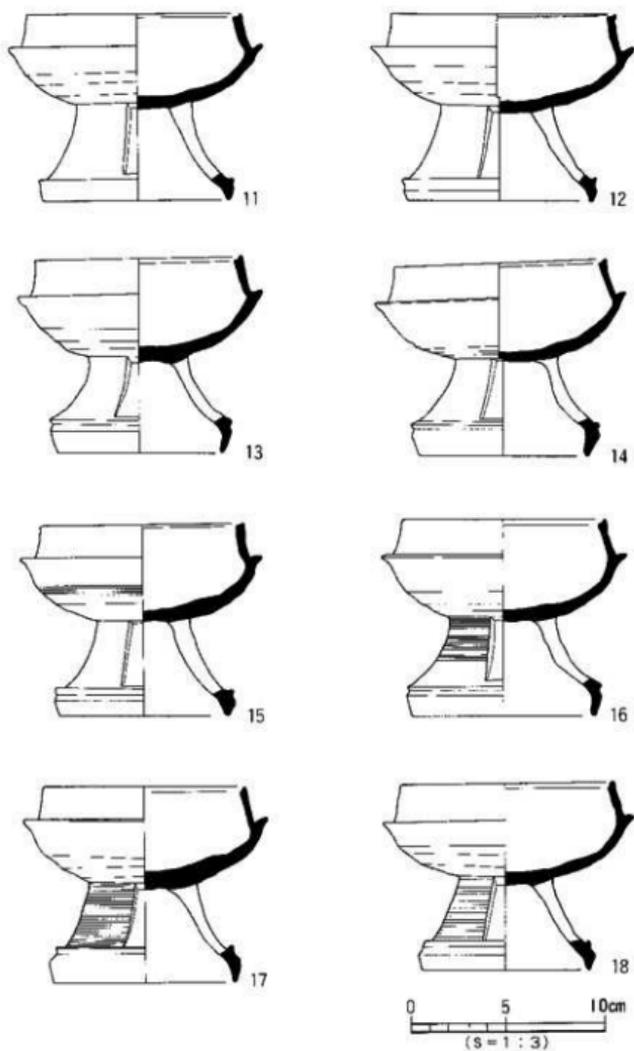
第52図 1号墳遺物出土状況

船ヶ谷三ツ石古墳の調査



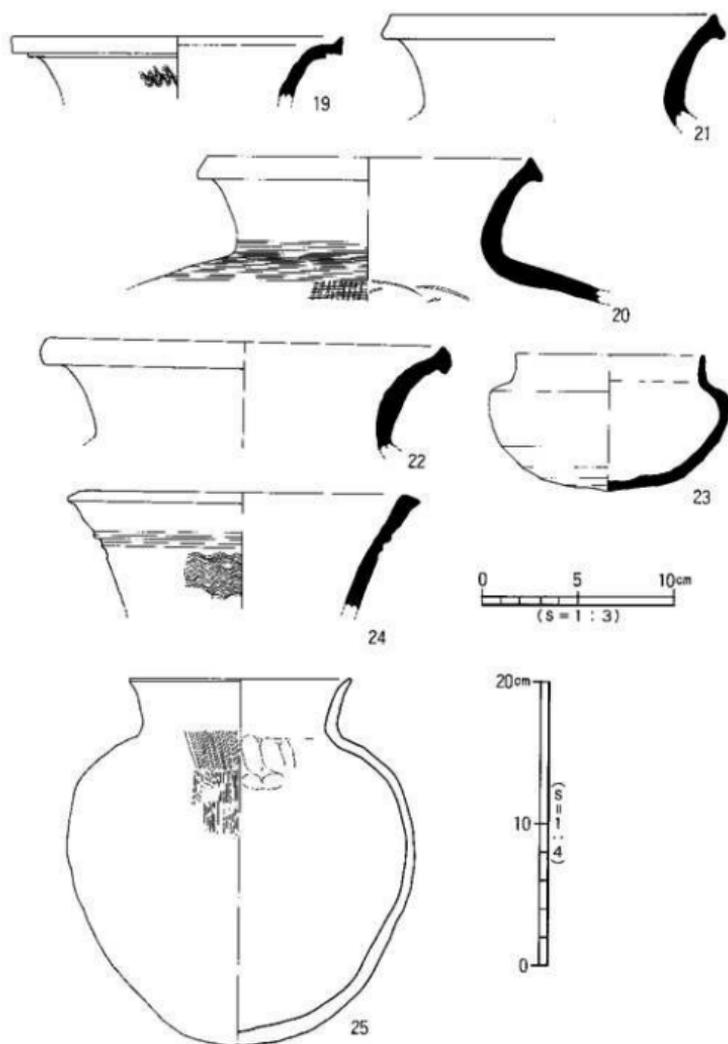
第53図 1号墳出土遺物実測図(1)

遺構と遺物



第54図 1号墳出土遺物実測図(2)

船ヶ谷三ツ石古墳の調査



第55図 1号墳出土遺物実測図(3)

## 4. 小 結

今回の調査では、2基の古墳を検出し、東山町古墳群の一部を確認することとなった。

1号墳は、古墳の約4分の1を検出するにとどまったが、周溝内より出土した遺物は、出土状況より周溝内祭祀遺物である可能性が考えられるものである。松山平野では、周溝内祭祀の確実な事例報告が数少ないことより、基礎資料として貴重であるといえる。さらに、周溝内の遺物は、5世紀末～6世紀初頭に比定される一括資料であり、「消費生活から考える土器編年」の資料としては良好な資料といえる。同時期の資料には、平野内では、集落内出土品として、松山市辻町遺跡S X 1〔真木 1992〕、道後姫塚遺跡1号住居址〔坂本 1979〕福音寺筋遺E遺跡竪穴式住居〔池田・宮崎 1989〕、若草町遺跡S B12〔相原・栗田 1991〕等の資料があげられる。

2号墳は、周溝を検出するにとどまったが、当該地域に墳墓群が存在することを示す資料としては有効なものとして評価される。尾根線にあり、1号墳と距離なく存在することは群集墳の様相の一面をうかがえるものである。なお、調査にあたり2号墳の調査は、調査方法を再認識させられたものである。

松山平野北部にある和気・堀江地域は、沖積低地と丘陵地からなる。丘陵は、低地をはさむように東西にあり、船ヶ谷三ツ石古墳は西の丘陵にある。この丘陵には、前述のごとく多くの古墳があるが、調査事例は少なく、後期古墳の調査としては船ヶ谷向山古墳〔池田・宮崎 1989〕と本調査事例に限られる。両古墳は、谷を一つ挟んだ尾根にあり、時期も大差ない。ただし、向山古墳は前方後円墳、三ツ石古墳は円墳であり、墳形・規模・出土品に差異が生じている。これ等の事象は和気・堀江地域内における5世紀末～6世紀初頭の墳墓構造を解明する資料であるといえる。この結果は、今回の調査成果と今後の調査・研究の課題となるものである。

また、東の丘陵にも多くの古墳があり、今後はこの東・西の丘陵地にある墳墓群や低地にある生産地や居住地といった集落（現在までに古墳時代後期の生活関連遺物の確認事例はない）との関係を解明しなければならない。

本報告にあたり、調査を担当した藤原敏秀氏には、退職したにもかかわらず報告書作成にあたり配慮と協力をいただき、誠に感謝するしだいである。

なお、本報告の執筆は1号墳出土遺物は平岡が、他は梅木が担当した。

## 【参考文献】

- 真木 潔 1992 「辻町遺跡」「朝美遺跡・辻町遺跡」朝松山生涯学研究所埋蔵文化財センター  
 坂本安光 1979 「道後姫塚遺跡（資料編）」愛媛県教育委員会  
 池田 学・宮崎泰好 1989 「筋遺E遺跡」「船ヶ谷向山古墳」松山市埋蔵文化財調査年報II 松山市教育委員会  
 相原浩二・栗田茂敏 1991 「若草町遺跡」松山市埋蔵文化財調査年報III 松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

## 遺物観察表一凡例一 (平岡直美)

(1) 以下の表は、本調査出土遺物観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 ( ) : 復元推定値

形態・施文欄 土器の各部位名称を略記。

例) 口→口縁部、胴中→胴部中部、柱→柱部、胴底→胴部～底部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 砂→砂粒、長→長石、石→石英、密→精製土。( ) 中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 砂・長(1~4)多→「1~4mm程度の砂粒・長石を多く含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表18 1号墳 出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		胎土	焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
1	壺	口径 13.1 器高 6.6	天井部中央に中くぼみのつまみが付く。天井部と口縁部の境界の線は短い。	つまみ 同転ナテ ◎ 同転へう割り ⑪ 同転ナテ	同転ナテ	赤 ○			37
2	壺	口径 13.0 器高 6.3	天井部中央に中くぼみのつまみが付く。縁の下方をくぼませている。	つまみ 同転ナテ ◎ 同転へう割り ⑪ 同転ナテ	同転ナテ	赤 ○			37
3	壺	口径 12.5 器高 6.1	天井部中央に中くぼみのつまみが付く。	つまみ 同転ナテ ◎ 同転へう割り ⑪ 同転ナテ	同転ナテ	赤 ◎			37
4	壺	口径 12.8 器高 5.75	天井部中央に中くぼみのつまみが付く。口縁部は内傾して段をなす。	つまみ 同転ナテ ◎ 同転へう割り ⑪ 同転ナテ	同転ナテ	赤 ◎			37
5	壺	口径 12.3 器高 6.1	天井部中央に中くぼみのつまみが付く。縁の下方をくぼませている。	つまみ 同転ナテ ◎ 同転へう割り ⑪ 同転ナテ	ナテ ⑪ 同転ナテ	赤 ○		口縁部に自然釉	37
6	壺	口径 12.1 器高 5.65	天井部中央に中くぼみのつまみが付く。口縁部は内傾して段をなす。	つまみ 同転ナテ ◎ 同転へう割り ⑪ 同転ナテ	同転ナテ	赤 ○			37
7	壺	口径 11.9 器高 6.2	天井部中央に中くぼみのつまみが付く。口縁部はわずかに内傾している。	つまみ 同転ナテ ◎ 同転へう割り ⑪ 同転ナテ	同転ナテ	赤 ◎			37
8	壺	口径 12.0 器高 5.8	天井部中央に中くぼみのつまみが付く。縁は短く短い。	つまみ 同転ナテ ◎ 同転へう割り ⑪ 同転ナテ	同転ナテ	赤 ○			37
9	壺	口径 12.6 器高 5.65	口縁部は内傾して段をなしている。つまみ欠損。	◎ 同転へう割り ⑪ 同転ナテ	同転ナテ	赤 ◎			
10	無刃 高弁	口径 17.4 器高 12.8 底径 11.3	口縁部は外反し、外部には流状文を施している。胴部は4方向に通しあり。	◎ 同転ナテ ◎ 十字目	同転ナテ	赤 ◎			38

小 結

1号墳 出土遺物観察表 土製品

(2)

番号	種類	流量 (cm)	形態・施文	調 整		(外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外 面	内 面				
11	有蓋 高杯	口径 10.9 器高 9.8 底径 9.6	肩部のたれあがり端部は内傾し、段をなしている。	① 同転ナデ ② 同転ナデ ③ 同転ナデ	同転ナデ	淡青灰色	密 ◎		38
12	有蓋 高杯	口径 11.5 器高 9.9 底径 9.45	肩部のたれあがり端部は内傾し、段をなしている。	① 同転ナデ ② 同転ナデ ③ 同転ナデ	④ ナデ ⑤ 同転ナデ ⑥ 同転ナデ	淡青灰色	密 ◎		38
13	有蓋 高杯	口径 10.8 器高 10.1 底径 8.6	肩部のたれあがり端部は内傾し、段をなしている。脚端部は下方へ屈曲。	① 同転ナデ ② 同転ナデ ③ 同転ナデ	④ ナデ ⑤ 同転ナデ ⑥ 同転ナデ	青灰色	密 ◎		39
14	有蓋 高杯	口径 10.9 器高 10.25 底径 8.8	肩部のたれあがり端部は内傾し、受部は細く、脚端部は下方へ屈曲。	① 同転ナデ ② 同転ナデ ③ 同転ナデ	④ ナデ ⑤ 同転ナデ ⑥ 同転ナデ	淡青灰色	密 ◎		39
15	有蓋 高杯	口径 10.4 器高 10.1 底径 8.7	たれあがり端部は内傾し、受部は丸味をもつ。	① 同転ナデ ② カキ目 ③ 同転ナデ	同転ナデ	淡青灰色 淡青灰色	密 ◎		39
16	有蓋 高杯	口径 10.63 器高 10.3 底径 9.4	たれあがり端部は内傾し、受部は細く丸みがある。脚端部は下方へ屈曲。	① 同転ナデ ② 同転ナデ ③ カキ目 ④ 同転ナデ	⑤ ナデ ⑥ 同転ナデ ⑦ 同転ナデ	青灰色 淡青灰色	密 ◎		39
17	有蓋 高杯	口径 10.4 器高 10.3 底径 9.5	受部は比較的長く、上外方へのびる。脚端部は下方へ屈曲。	① 同転ナデ ② 同転ナデ ③ カキ目 ④ 同転ナデ	同転ナデ	灰色 淡青灰色 灰色	密 ◎		39
18	有蓋 高杯	口径 11.1 器高 9.6 底径 8.05	受部は細く、丸味をもち、受部端に乳線がある。	① 同転ナデ ② 同転ナデ ③ カキ目 ④ 同転ナデ	同転ナデ	淡青灰色	密 ○		39
19	蓋	口径(17.0) 残高 3.2	口縁部は外反し、外面に1条の内線、頂部外面に放射文を施す。	同転ナデ	同転ナデ	淡青灰色	密 ◎		40
20	蓋	口径(16.6) 残高 7.6	口縁部はゆるやかに外反し、端部は下方へ屈曲。	① 同転ナデ ② カキ目 ③ 平反するカキ目	(口縁) 同転ナデ ④ 叩き	青灰色	密 ◎		40
21	蓋	口径(16.7) 残高 5.05	口縁部はゆるやかに外反し、端部は下方へ屈曲。	同転ナデ	同転ナデ	淡青灰色	密 ◎		40
22	蓋	口径(20.4) 残高 3.2	口縁部はゆるやかに外反している。	同転ナデ	同転ナデ	淡灰色	密 ◎	自然物	40
23	無蓋 盆	口径 9.7 器高 7.25	圓錐形の体部から口縁部が直交し、口縁部は丸くおさまる。	①-③ 同転ナデ ④-⑥ 同転ナデ	同転ナデ	青灰色	密 ◎		40
24	不 明	口径(18.2) 残高 6.2	口縁部は外反し、3条の内線を巡らして、放射文を施している。	同転ナデ	同転ナデ	淡青灰色	密 ◎	自然物	
25	蓋	口径(13.6) 器高(31.0)	口縁部は細く外反し、口縁部は丸くおさまっている。体部は球形を呈する。	① 磨滅 ② 磨滅 ③ 磨滅 ④ ハケ ⑤ 磨滅(口縁部)	① 磨滅 ② ナデ	淡青灰色 赤褐色	長(1-2) ○		40

## 第5章 座拝坂遺跡出土の弥生前期土器

梅木謙一・水口あをい

はじめに

松山平野の弥生前期土器の研究は、阿方・片山遺跡出土資料を標式にする「阿方・片山式」の研究に代表されるところである。前期前半の土器様相は、近年の良好な資料とその整理・分析により、明らかになりつつある。前期後半の上器様相は、阿方・片山式に比定される前期末～中期初頭の資料が多数出土し明らかな部分も多いが、そこには前半のものと器形や施文等に大きなヒアタスが認められる。

今回、座拝坂遺跡の調査では、良好な出土状況とは言い難いが、弥生前期後半に比定されると考えられる土器資料が得られている。

本稿では、座拝坂遺跡出土資料の整理・分類を行い、加えて同じ土器様相をもつ松山市南中学校構内遺跡出土資料を取り上げ、松山平野における弥生前期後半の土器様相を検討するものである。  
(梅木)

### 1. 座拝坂遺跡出土資料 (第56図)

本節では、座拝坂遺跡第5～9層より出土した弥生前期土器169点を取り上げ、器種構成や器形、施文等について整理・分類する。

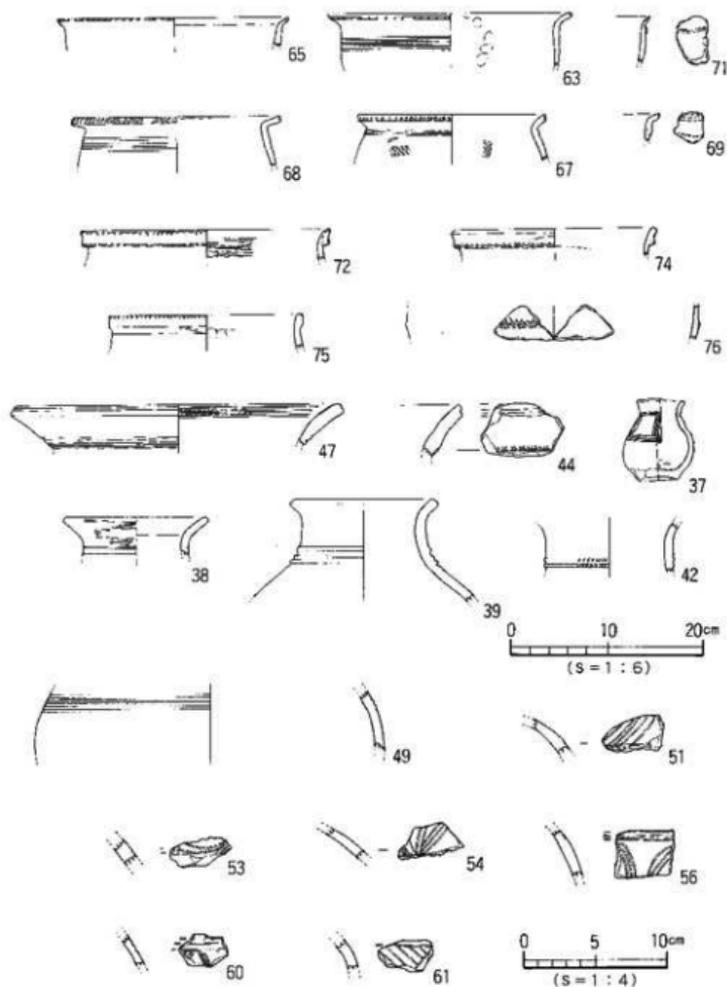
#### (1) 器種と器形

器種は、甕形土器と壺形土器があり、他の器種の出土はみられなかった。

甕形土器 口縁部片51点・体部片5点。器形には、如意形系(42点)と縄文晩期凸帯文系(9点)の2形態が存在する。如意形系は、口縁部がやや長く、屈曲するもの(63)と、口縁部が短く、強く屈曲するもの(67・68)がある。後者は胴部の張りが弱干強くなるものである。また小型のものに頸部下に凸帯を巡らすものがある70。凸帯文系は、やや外反しながら立ち上がる口縁部をもつもの72・74と、直口気味に立ち上がる口縁部をもつもの75があり、ほとんどのものが断面三角形の貼付凸帯を施す。なお、断面形態が方形のものが1点みられる。口唇部は先尖りのものと面取りされ「コ」字状を呈するものがある。

壺形土器 口縁部片19点・体部片93点・完形品1点。口縁部の法量(推定)より、大型品44・47(30cm以上)・中型品38・39・42(15～30cm未満)・小型品37(15cm未満)の3タイプに分ける。大型品(6点)は、口縁部が大きく外反するもので、ほとんどのものが端部は「コ」字状を呈する。中型品(10点)は、頸部が直立ないし内湾ぎみに立ち上がり口縁部で外反するものである。端部は丸くおさめるものと「コ」字状を呈するものがある。小型品(4点)は、中型品と同形態を呈する。

座拝取遺跡出土資料



※番号は、本文中に同じ

第56図 座拝取遺跡出土資料

## (2) 施文

甕形土器 如意形系では、頸部もしくは頸部下に1～5条の直線文を(ヨコ方向)施すもの63・68(14点)、貼付け凸帯を巡らすもの70(3点)、段を有するもの69(1点)、胴部有段部に刻み目を施すもの76(1点)、削り出し凸帯を施すもの67(1点)、無文のもの(1点)、不明なもの(25点)がある。またほとんどのものが口縁部に刻み目を施す。凸帯文系は、口縁部と凸帯上に刻み目を施すものがある。

壺形土器 施文には段をもつものと、直線文をもつものがある。段では口縁部下もしくは頸部に段を有するもの(7点)、段上に刻み目を施すもの(1点)、削出しによる段を施すもの(6点)がある。ヘラ描き沈線文では、直線文(ヨコ・33点、ヨコ+タテ1点)、木葉文(貝殻1点)、弧文(5点)、段+弧文(1点)、羽状文(5点)、山形文(5点)があり、文様不明なもの(45点)もある。また、大型品では口縁部内面に直線文+刺突文(1点)、口唇端面に直線文(ヨコ)を施すものがみられる。

## (3) 調整

甕形土器 如意形系では、ハケ目調整をわずかに残すものもあるが、最終仕上げはナテ調整が主体である。凸帯系では、内面に横方向のヘラミガキを施し、外面はナテ調整を施すものがある。

壺形土器 口縁部内面に横方向のヘラミガキを施し、外面はナテ調整を施すものがあるがマメツの為不明瞭なものが多い。(水口)

## 2. 松山市南中学校構内遺跡SD1出土資料(第57図)

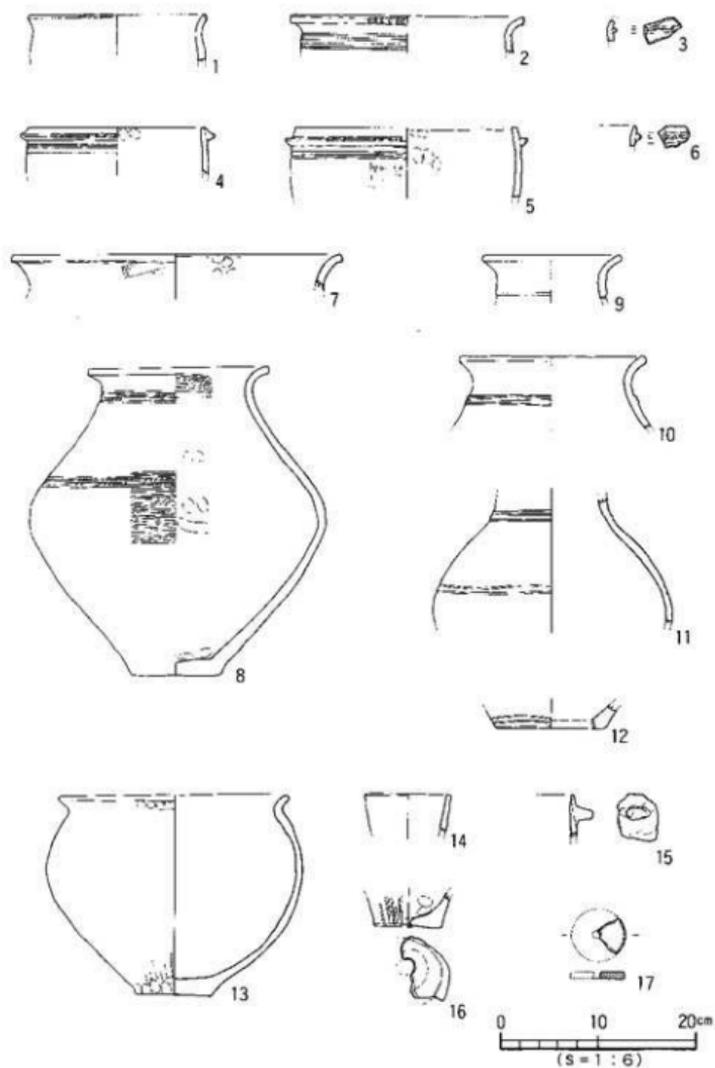
南中学校構内遺跡は、松山平野中央部の沖積地上に立地する遺跡である〔栗田茂敏 1993〕。遺跡の東方には、弥生時代～中世の複合遺跡群で、特に古代の官衙・鹿野寺跡として著名な米住・久米(久米高畑)地区が存在する。遺跡の周辺には、石井東小学校遺跡(弥生前期・壺棺墓)〔森 光晴 1986〕、西石井荒神堂遺跡・浮穴小学校遺跡(弥生後期・壺棺墓)〔森 光晴 1980〕等があり、弥生時代後期を中心として、集落が広く展開していたことが想定される地域である。

南中学校構内遺跡では、溝が3条検出され、SD1からは弥生前期の資料が出土している。SD1出土品は、弥生前期の資料に限られ、出土量は個体設定が可能なもの100点余りを数える。なお、遺跡や遺構・遺物についての詳細は報告書を参照していただきたい。

器種は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器がある(註1)。

甕形土器は、口縁部片が43点と胴部片が出土している。甕形土器は、口縁部形態より4分類される。口縁部を折り曲げて形成するもの1～3(仮称、a:如意形系)、直立する体部で、口縁端部に接して(外面に)断面三角形の凸帯を施すもの4(仮称、b:所謂「瀬戸内系」、口縁よりやや下る位置に貼り付け凸帯を施すもの5(仮称、c:所謂「下城系」、bと同様

松山市南中学校構内遺跡SD1出土資料



第57図 南中学校構内遺跡出土資料

な形態を呈するも貼り付け凸帯の断面形が扁平なもの6（仮称、d：縄文晩期刻み目凸帯文系）の4形態がある。その比率は、出土量が少ないがaが6割と多数を占め、b・c・dと順にその出土量は少なくなる。なお、dの出土量は1点にとどまる。甕形土器の調整は、刷毛目調整を顕著に残さず、最終調整にナデ調整を行うものが多い。施文は、ヘラ描き沈線文を1～4条施すものがみられる。

壺形土器は、口縁部片が35点と胴部片が30点余り出土している。口縁部の口径（推定）より大型品7（30cm以上）・中型品8・10・11（15～30cm未満）・小型品（15cm未満）があり、その出土量は、中・小型品が多数を占める。上器片は小片が多く、全様を知り得るものは少ないが、口頸部形態をみると、内傾する頸部に外反する口縁部をもつものと、直立ぎみに立ち上がる頸部に外反する口縁部をもつものがある。胴部は、中位よりやや上に最大径をもつものが知れる。調整は、ヘラ磨きが主体である。施文は口頸部境と頸胴部境、胴中位やや上にヘラ描き沈線文を施す傾向にある。ただし、口頸部境や頸胴部境に弱い段やこの弱い段を強調するために段上に沈線文を施すものもある。また、特徴的な施文として、削り出し凸帯が幾つかのもの10・11にみられる。その他、刺突文8や底部にヘラ描き沈線文を施すものもある。

鉢形土器は、直口口縁をもつもの3点と如意形口縁をもつもの1点が出土している。直口口縁をもつものには、耳状の粘土塊を貼り付けたもの15がある。如意形口縁をもつものは、胴部の張りが強いものがある。なお、13の鉢形土器の口縁端面には刻み目が施されず、甕形土器のそれとは大きく異なる。

この他、SD1では、焼成後穿孔しコシキに転用した底部片16や土製の紡錘車17も出土している。  
(梅木)

### 3. 比較検討

前述の両遺跡より出土した資料は、幾つかの共通する土器要素を有している。ここでは、この共通要素を提示し、二つの上器群がもつ土器様相について考えていくものとする。

器種は、甕形土器、壺形土器があり、鉢形土器も伴うものと考えられる。高環形土器や土製の蓋形土器については今後の資料の増加に期待するが、少数ではあるが出土するものと考えている。甕形土器は、口縁部形態に幾つかのものがみられ、成形過程を重視すると折り曲げ口縁のものや直口口縁に貼り付け凸帯を施すものに二分別される。折り曲げ口縁のものは、屈曲（屈折）が強く、胴部径が口縁部径を凌ぐものがみられる。直口口縁に貼り付け凸帯を施すものは、縄文時代晩期（刻み目凸帯文系）の深鉢形土器の口縁部形態をとどめるものが僅かに出土する。両遺跡に出土をみないが、南中学校構内遺跡SD1からは、「瀬戸内系（形甕）」と呼ばれるものや、東九州に分布が濃い所謂「下城式土器」に類似したものが出土しており注目される。前者では、南中学校構内遺跡SD1出土品の形態は、座拝取遺跡包含層出

上の貼り付け口縁のものにその形状が類似しており、瀬戸内系（形）甕の出自について一つの想定（仮定）を可能にするものであると考える。一方、下城式に類似するものは、松山平野の前期末～中期前半に少数ながら出上し、甕形土器の一系譜を担うものとなり、今回の資料はその最古のものとし、かつその出口において、再考しなければならないことを提示する資料であると考えている。

甕形土器の調整は、刷毛目痕を顕著に残さず、最終調整にナテを用いる傾向が強いことは共通している。施文は、ヘラ描き沈線文を1～4条施すものがあり、座拝坂遺跡包含層では削り出し凸帯を施すものがあり注目される。また、折り曲げ口縁のものに、胴曲部直下に貼り付け凸帯をもつものが少数ではあるが両遺跡に共通してみられることも注目される。

壺形土器は、大・中・小型品があり、口径が30cmを越える大型品は少数みられるにとどまる。器形は、頸部が直立し、短い筒状になるものがみられることが特徴的である。調整はヘラ磨きで、施文は各部位境と胴部最大径のやや上に加飾部位をもつ。文様は、ヘラ描き沈線文で、ヨコ方向の沈線文を1～4条施す。座拝坂遺跡包含層では羽状文・木葉文・弧文・山形文があり、加えて施文具として貝殻腹縁を使用していることは注意したい。また、施文では甕形土器と同じく削り出し凸帯をもつものがみられることも注目される。

鉢形土器 出土量が少なく比較検討が難しいが、器形では折り曲げ口縁のものと直口縁のものがみられる。南中学校構内遺跡SD1出土の15は、口縁部下に耳状の粘土塊をもっており注意したい一点である。  
(梅木)

#### 4. 結 語

座拝坂遺跡包含層及び南中学校構内遺跡SD1出土資料の整理と比較を行った。

その結果、資料の出上状況や遺存状況に課題をもつが、両遺跡の資料には幾つかの共通要素があることが明らかとなった。資料の特徴は、甕形土器には複数の系譜のものがあり、壺形土器では頸部の直立長頸化がみられることがあげられる。さらに、施文ではヘラ描き沈線文1～4条や、削り出し凸帯を施すものがみられることが特徴といえる。

さて、両遺跡資料の時間的位置付けであるが、前期前半に比定される山越遺跡2次SD2〔梅木・武正 1993〕や文京遺跡4次SB2〔柴田茂敏 1992〕、梅味遺跡SD4〔宮本一夫 1989〕出土資料と比較すると、形態や施文において後出するものであるといえる〔梅木・水口 1993〕。また、鶴ヶ峰遺跡野蔵穴〔西尾幸則 1986〕、斎院烏山遺跡SD1〔西尾幸則 1986〕、米住V遺跡1・2号環濠〔吉本広 1981〕出土の多重沈線文をもつ甕形土器や、長頸化し、口縁部の内面に貼り付け凸帯や体部に多重の沈線文・貼り付け凸帯文を施す壺形土器の一群と比較すれば、今回の資料は先行する形態と施文をもつものだといえる。従って、今回の資料は前期前半と前期末を結ぶ資料といえ、弥生前期後半の古い様相を示した資料と理解される。

座拝取遺跡包含層、南中学校構内遺跡SD1の資料は、松山平野では資料数の稀薄な時期のものであり、また、その様相が少なからず知りえたことで貴重な資料といえる。ただし本稿では、当該期の土器様相の一部が明らかになったにすぎず、今後は追認資料の発見と分析及び検証が必須だといえる。(梅木)

本稿執筆に際しては、愛媛大学下條信行先生より御指導を、南中学校構内遺跡資料については栗田茂敏氏の配慮を賜った。また、整理と分析では西岡早苗氏の協力と助言をいただいた。末筆ながら記して謝意を表するものである。

〔註〕

1. 出土資料のなかに1点、蓋形土器の受部片と思われるものが出土している。今回は、断定できなかったために資料提示をさけた。

〔参考文献〕

- 梅木謙一・武正良浩 1993 「山越遺跡・2次調査」「山越・久万ノ台の遺跡」 松山市教育委員会・勤松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 梅木謙一・水口あをい 1993 「山越遺跡（2次）出土の弥生前期土器」「山越・久万ノ台の遺跡」 勤松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 梅木謙一・宮内慎 編 1992 「朝美遺跡・辻町遺跡」 勤松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 栗田茂敏 1992 「文京遺跡4次調査」「道後城北遺跡群」 勤松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 栗田茂敏 1993 「石井幼稚園遺跡・南中学校構内遺跡-第2次調査-」 松山市教育委員会・勤松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 西尾幸則 1986 「鶴ヶ峰遺跡」「富院鳥山遺跡」「愛媛県史資料編考古」 愛媛県史編さん委員会
- 宮本 夫編 1989 「廣下・得味遺跡の調査」 愛媛大学埋蔵文化財調査室
- 森 光晴 1980 「浮穴・西石井寛神堂・東本Ⅱ・Ⅲ・桑原高井遺跡」 松山市教育委員会
- 森 光晴 1986 「石井東小学校遺跡」「愛媛県史資料編考古」 愛媛県史編さん委員会
- 吉本 雄 1981 「未住V遺跡」「一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」 愛媛県教育委員会・勤愛媛県埋蔵文化財調査センター

## 〔補 稿〕

本論では、座拝坂遺跡と南中学校構内遺跡出土資料を整理し、松山平野の弥生前期後半の土器様相の特徴を一部提示した。同時期の土器様相の全てについて抽出できなかったため、本論では周辺地域との比較分析は論をさけた。

補稿では、「削り出し」技法の出現と、甕形土器における瀬戸内系（形）甕とへら描き沈線文（3～4条）の使用に着目し、周辺地域の研究成果を取り上げ、その比較を試る。今後の研究（時間的併行関係等）の序論とするものである。

岡山県：平井勝氏の前期Ⅲ期、秋山浩三氏の前期第Ⅲ期の概念にはほぼ一致する。特に、秋山が指摘する「瀬戸内型甕」の出現の可能性……については、本論の結果は大いに参考になる資料と考える。

広島県：伊藤実氏の前期Ⅲ期に相当するものと考ええる。ただし、壺形土器の器形（長頸化等）にやや違いがみられるようである。

山口県：山本一郎氏の宮原3式、伊東照雄氏の綾羅木ⅢA式中に甕形土器の施文技法（多重沈線文）に類似性がみられる。

福岡県：長嶺正秀氏の下神田Ⅱ式に類似がある。Ⅱ式中には、西瀬戸内系の土器が存在（3%）することが明らかとなっている。

大分県：近年、瀬戸内系（形）甕の出土事例が増加している。ただし、いずれも多重沈線文が5～7条以上であり、本論の土器群よりもやや新しい様相をもつ資料である。例えば大分市下郡遺跡では、高橋 徹氏の前期Ⅱ期-3に比定される資料中に、前述の瀬戸内系（形）甕が伴出している。

以上、各地域の編年との比較を略記した。座拝坂・南中学校構内遺跡資料の特徴は、瀬戸内地方各地の前期後半ないし、前期後葉の特徴に包括されるようである。

今後は、松山平野前期後半の土器様相の解明とその特徴の抽出につとめ、さらには、瀬戸内地方各地の編年との比較検討を進めなければならないと考えている。 (梅木)

## 〔参考文献〕

- 平井 勝 1992 「1、弥生時代への移行」『古備の考古学的研究（上）』 鶴山陽新聞社  
 秋山浩三 1992 「3、弥生土器」『古備の考古学的研究（上）』 鶴山陽新聞社  
 伊藤 実 1986 「広島県東部の弥生時代前期の土器」『亀山遺跡』 広島県立埋蔵文化財センター  
 山本一郎 1993 「山口県東部（周防）弥生前期土器編年」 山口大学考古学研究室談話会資料  
 伊東照雄 1981 「弥生土器の種類と時期区分」『綾羅木遺跡』 下関教育委員会  
 長嶺正秀 1985 「下神田遺跡出土の弥生時代前期の～中期土器の編年の考察」『下神田遺跡』 福岡県行橋市教育委員会  
 高橋 徹 1991 「弥生時代・弥生文化の成立」『大分県史 先史篇Ⅱ』  
 讃岐和夫・坪根伸也編 1990 「下郡遺跡群」 大分市教育委員会

## 第6章 調査成果と課題

座拝坂遺跡、金毘羅山遺跡、船ヶ谷三ツ石古墳の調査では、和気・堀江地域の弥生時代～古代における居住域と墓域を知る資料が得られた。以下、各時代で注目される資料を取り上げ略記する。

### 弥生時代

前期 座拝坂遺跡で出土した前期土器の資料は、出土状況に恵まれないが、平野内で類似する資料が少ない現状にあっては稀少資料として注目される。第5章では、本資料と類似する南中学校構内遺跡SD1出土資料を整理・分析した。その結果両資料は、器種や器形において同様な様相を示しており、本資料の資料性の評価と松山平野の前期後半の土器様相を知る手がかりとなり注目されるものとなった。

今後は、今回の分析結果を基に、追加資料を期待するとともに、松山平野の弥生前期後半の土器様相の解明に努力しなければならない。さらには、今回は補稿としたが、資料が充実すれば瀬戸内地域の弥生前期後半の土器様相の比較検討や併行関係を追究することが容易になるものだと考える。

後期 座拝坂遺跡SB3、金毘羅山遺跡SB2は、後期末に比定される竪穴式住居址である。両者は同時期の住居址であり、立地は傾斜地、平面形態は四角形で、その規模も小さく類似点が多くみられる。後期末の平野検出の竪穴式住居址は、住居規模に大・小をもっている(注1)。小型住居ばかりが検出された点は注意したい。加えて、傾斜地に立地する竪穴式住居址の事例は、中期～後期中葉までのものが報告されており、弥生時代のものとしては最新のものとなる。先述の平面形態や構成も含め、後期末の平地と山間部(傾斜地)の集落形態を検討しなければならないだろう。出土遺物では、後期末の一括資料を得られ、これまで不詳であった後期末の器台形土器の資料を得られたことは大きい。また、大型の石鏃が金毘羅山遺跡SB2より1点出土したが、これは若草町遺跡等より同様な形態かつ出土状況にあり、用途論も含め、当平野の大型石鏃の一形態を再考しなければならない資料といえる。(注2)

### 古墳時代

金毘羅山遺跡で4基、船ヶ谷三ツ石古墳で2基の古墳が検出された。いずれも、主体部は未検出であるが、墳丘の構築方法を知る資料となった。立地はいずれも傾斜地であり、よって、墳丘形成時には地山を大きく削平し、盛り土を用い築造したものである。船ヶ谷三ツ石古墳1号墳では、溝溝内祭祀の様相が強い出土状況を示す土器群が検出された。ただし、土器以外の出土遺物はなく、同時期(5世紀後半～6世紀初頭)における平野内で検出された集落祭祀が石製品を伴うことと様相をやや異にする。例えば、辻町遺跡SX1では滑石製白玉と土器群(真木 潔 1992)、松前町作出遺跡では多量の石製模造品と土器群が伴い出土して

いる(註3)。ただし、出土土器の構成をみると高坏が多く、それに比べ坏身や蓋等、他の器種の出土量が少ないことが類似点としてあげられる。本資料は松山平野における祭祀形態について整理・分析するにあたり、一つの基本資料になるものであるといえる。

## 古代

座拝塚遺跡では、10世紀の資料を得た。SK2は墓と思われ、伴出品は供献土器の可能性がある。構造では、箱式棺で四隅に小穴があることは注意したい。また、出土土器も、119の坏は内面内黒であり、須恵質土師器とも呼ばれるものである可能性があり、松山平野での出土事例も少なく稀少な資料であり注目される。その他、包含層ではあるが、8～10世紀の資料が得られたことは、同時期の資料が少ない松山平野にとっては貴重な資料といえる。

和気・堀江地域では、これまでに縄文～弥生時代の住居址の確認事例は稀薄であったが、今回の資料は弥生時代後期末の住居址を知ることとなり、今後の同地域の集落形態解明の糸口が得られた。古墳時代資料では、古墳時代後期の同地域の東部丘陵の墳墓形態は、以前より知られるところであったが、西部丘陵の資料が確認(発掘調査)されたことで、墳墓領域の差異をどのように理解するのかといった課題を提示するものとなった。また、同時に、古墳時代後期の居住地の特定も進めていかなければならないことを再認識した。

古代の資料は、平野内出土資料が極めて少ない現状にあっては、少量ながら遺物の出土や遺構を確認したことは、重要なことといえる。

以上、三遺跡の調査報告と弱干の分析を行った。同地域は、今後開発が予想される土地が多く、今回の調査が今後の調査や集落研究の助力となればと思っている。

最後になったが、調査に協力いただいた皆様に心より感謝するしだいである。

## 〔註〕

1. 松山平野では、弥生時代後期になると大型の竪穴式住居には円形が、小型のものには四角形が多くみられる。また、その比率は、時期が新しくなるにしたがい四角形に比重がおかれる。

梅本謙一 1991 「松山平野の竪穴式住居址(Ⅰ)」『松山大学構内遺跡』 松山大学・松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

2. 大型石甕については、愛媛大学下條信行先生から御教示をいただいた。
3. 松山平野南部にある伊予郡松前町の出作遺跡では、石製模造品や陶質系土器が出土している他、鉄ていや鉄さいが出土している。現在、整理中。

## 〔参考文献〕

真木 潔 1992 「辻町遺跡」『朝美郡遺跡・辻町遺跡』 朝松山大学生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

写真図版

## 写真図版例言

1. 遺構の撮影は、各調査担当者が行った。

使用機材：

カメラ ニコンニューFM2 他  
レンズ ズームニッコール28～85mm 他  
フィルム ネオンパンSS・カラーネガ

2. 遺物の撮影は、大西が行った。

使用機材：

カメラ トヨ/ビュー45G  
レンズ ジンマーS240mm F5.6 他  
ストロボ コメット/CA-32 2灯・CB2400 2灯 (バンク使用)  
スタンド他 トヨ/無影撮影台・ウエイトスタンド101  
フィルム 白黒 プラスXパン4×5 カラー EPP4×5  
一部赤外線写真 (ハイスピードインフラレッドフィルム) 使用

3. 遺構写真の焼き付け及び遺物写真のフィルム現像・焼き付けは、大西が行った。

(白黒に限る。)

使用機材：

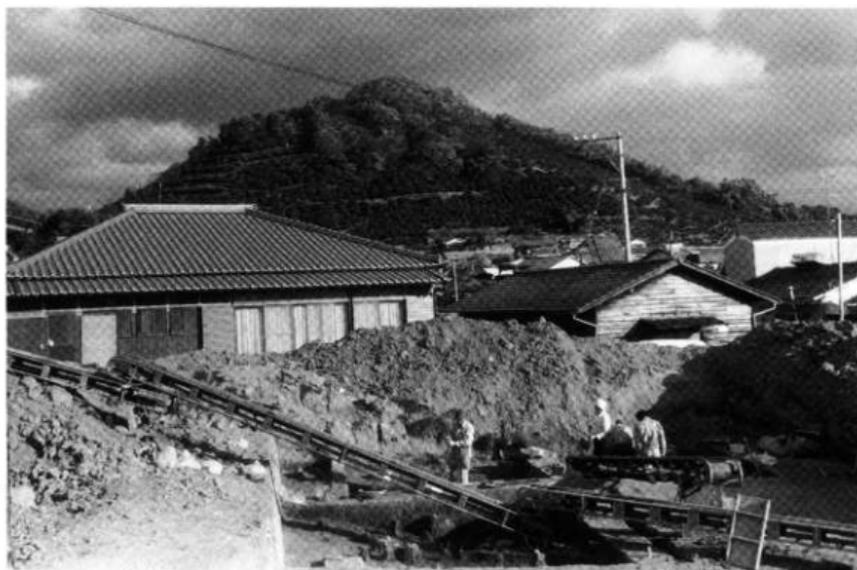
引伸機 ラッキー450MD  
ラッキー90MS  
レンズ エル・ニッコール135mm F5.6A  
エル・ニッコール50mm F2.8N  
印刷紙 イルフォードマルチグレードⅢRC

4. 製版 150 線

印刷 オフセット印刷  
用紙 マットカラー110kg

【参考】『埋文写真研究』Vol.1.1～4

(大西 朋子)



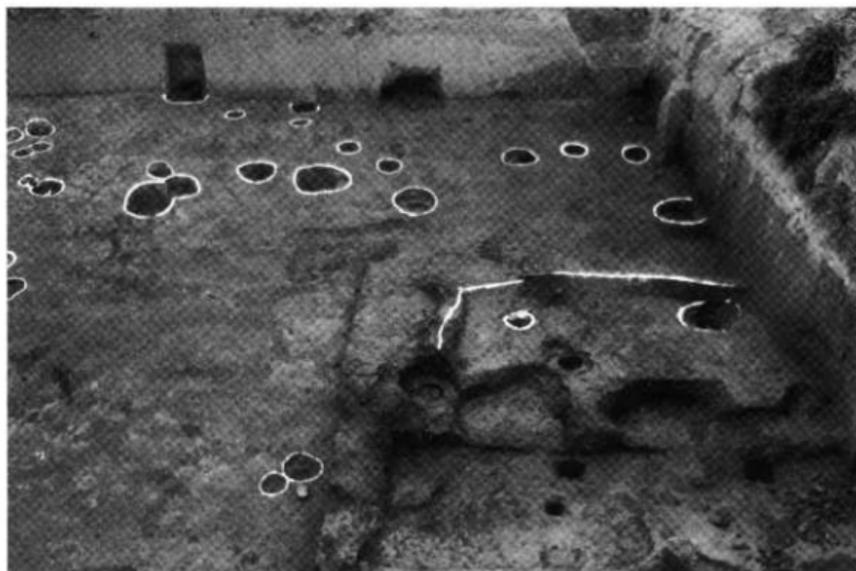
1. 調査地近景 (北より)



2. 遺構検出状況 (西より)



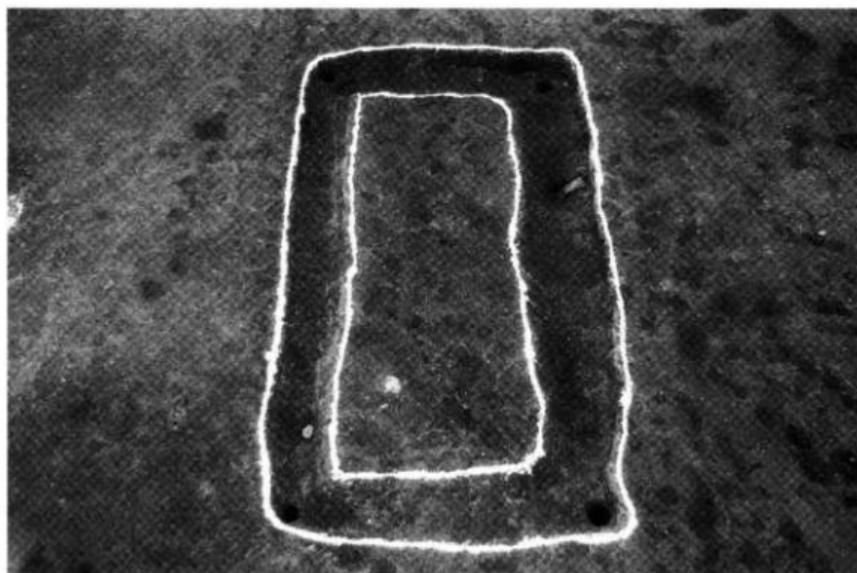
1. SB3 遺物出土状況(南より)



2. SB3 (南より)



1. SB1 (南より)



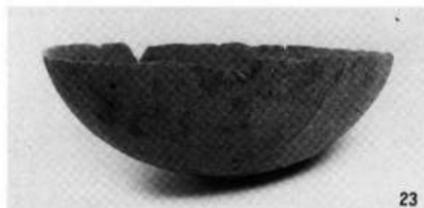
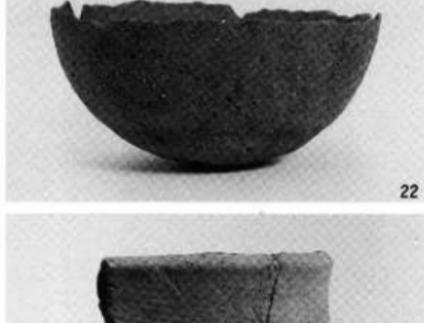
2. SK1 (東より)



1. SB3 出土遺物①



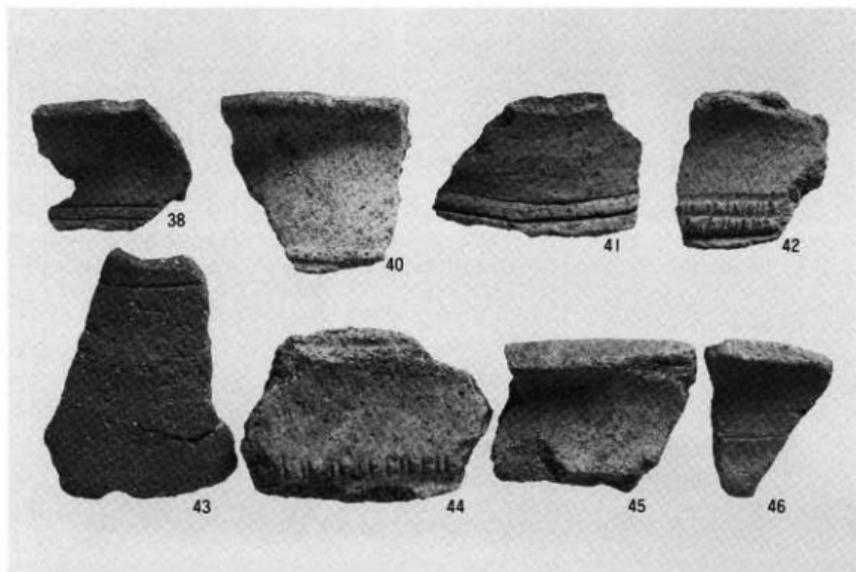
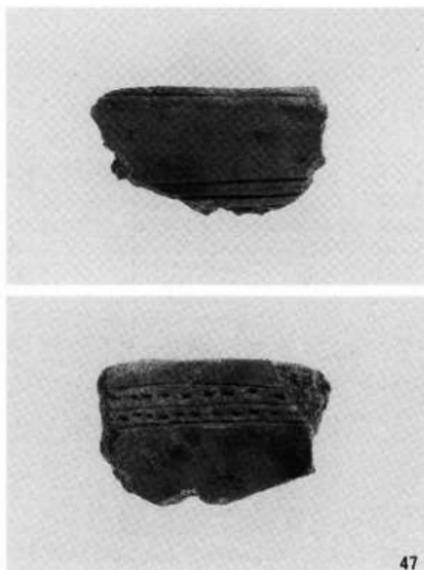
1. SB3出土遺物②



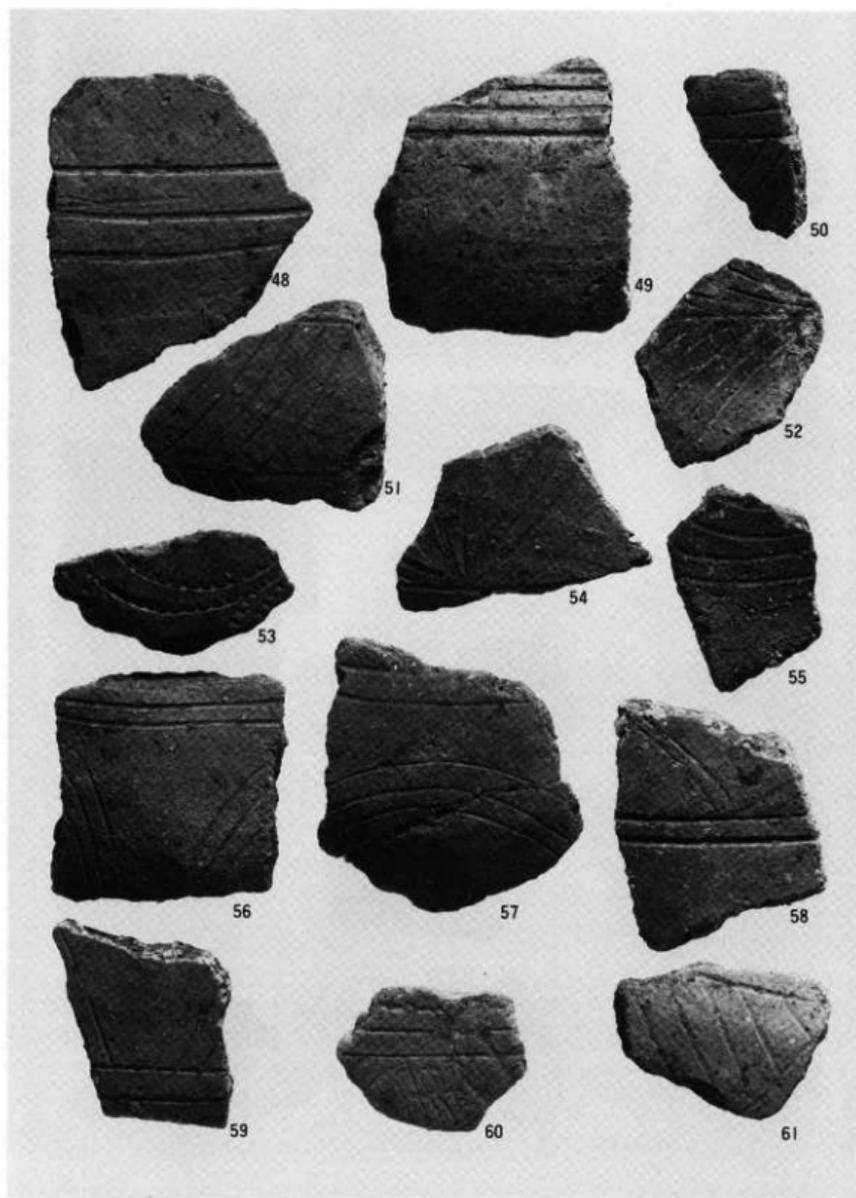
1. SB3出土遺物③



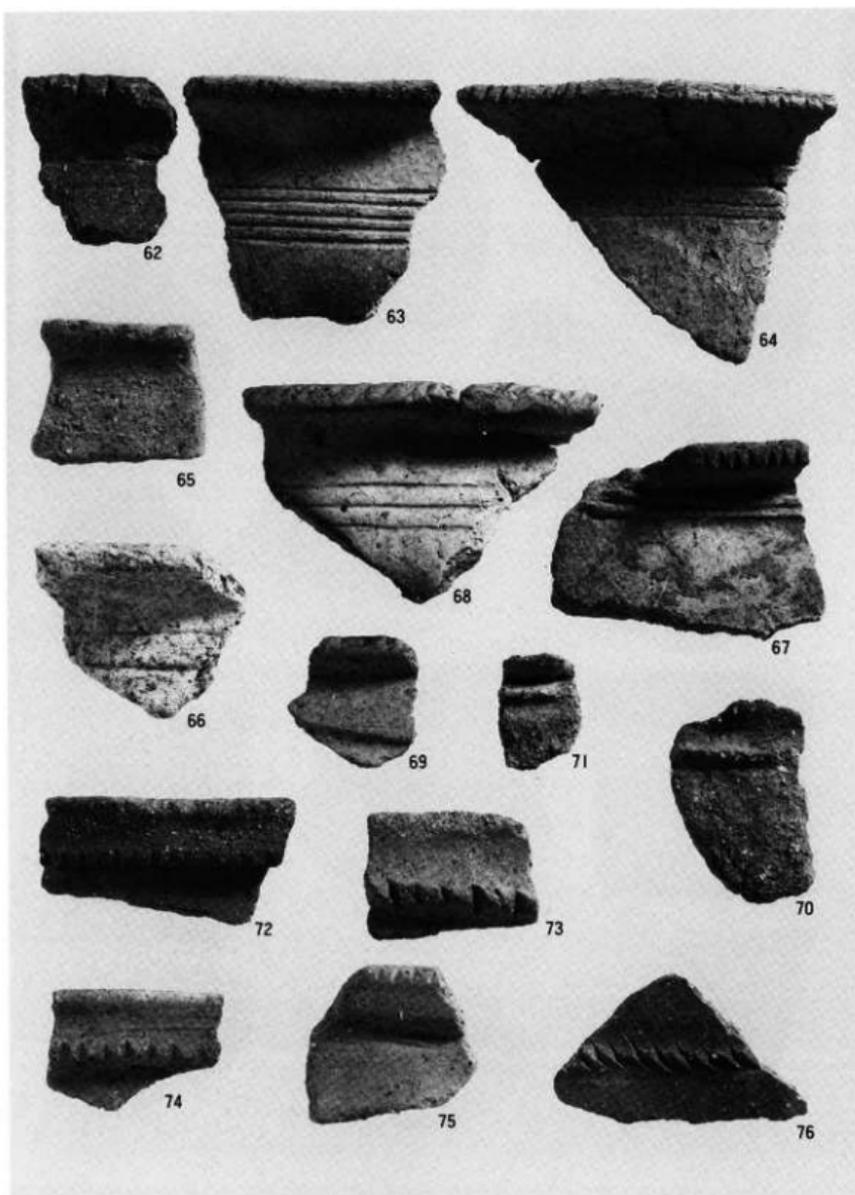
1. SB3出土遺物④



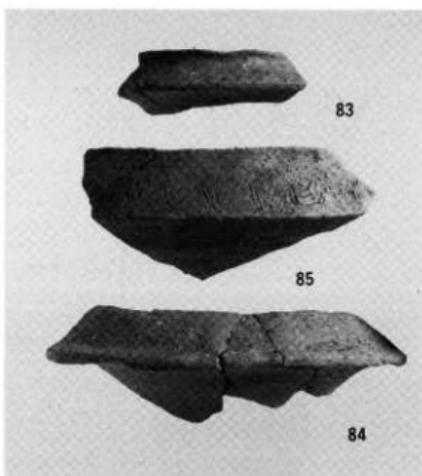
1. 包含層出土遺物 (弥生) ①



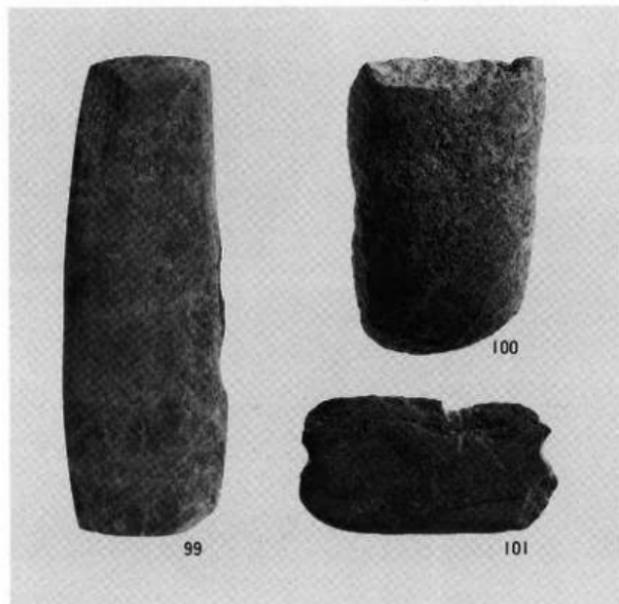
1. 包含層出土遺物 (弥生) ②



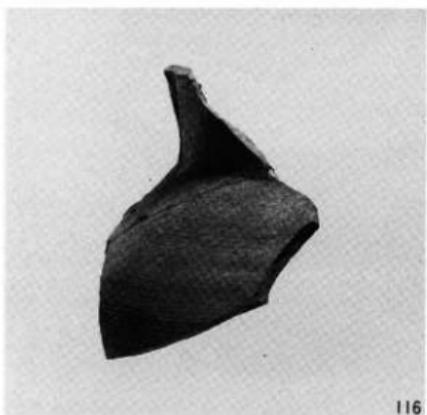
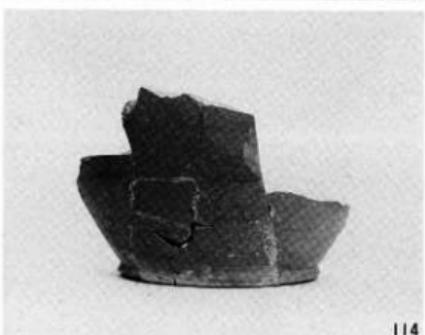
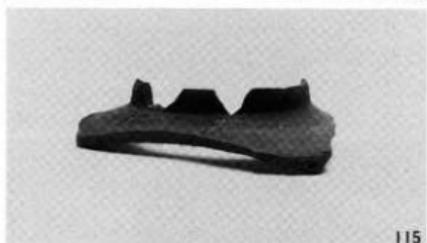
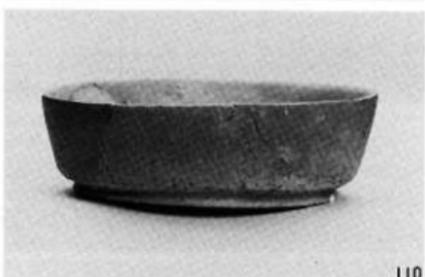
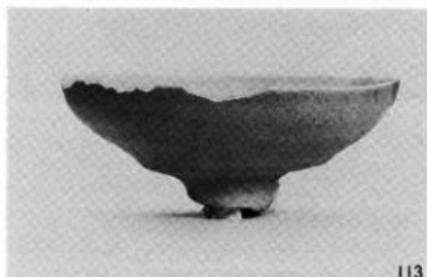
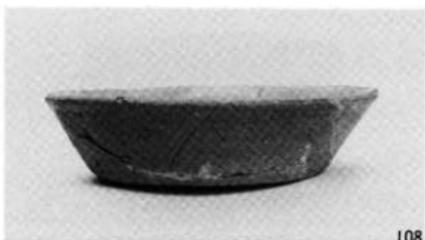
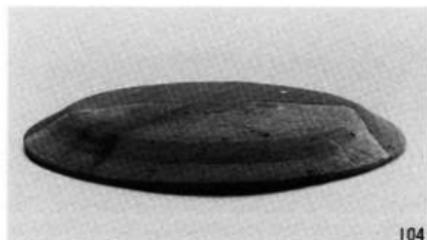
1. 包含層出土遺物 (弥生) ③



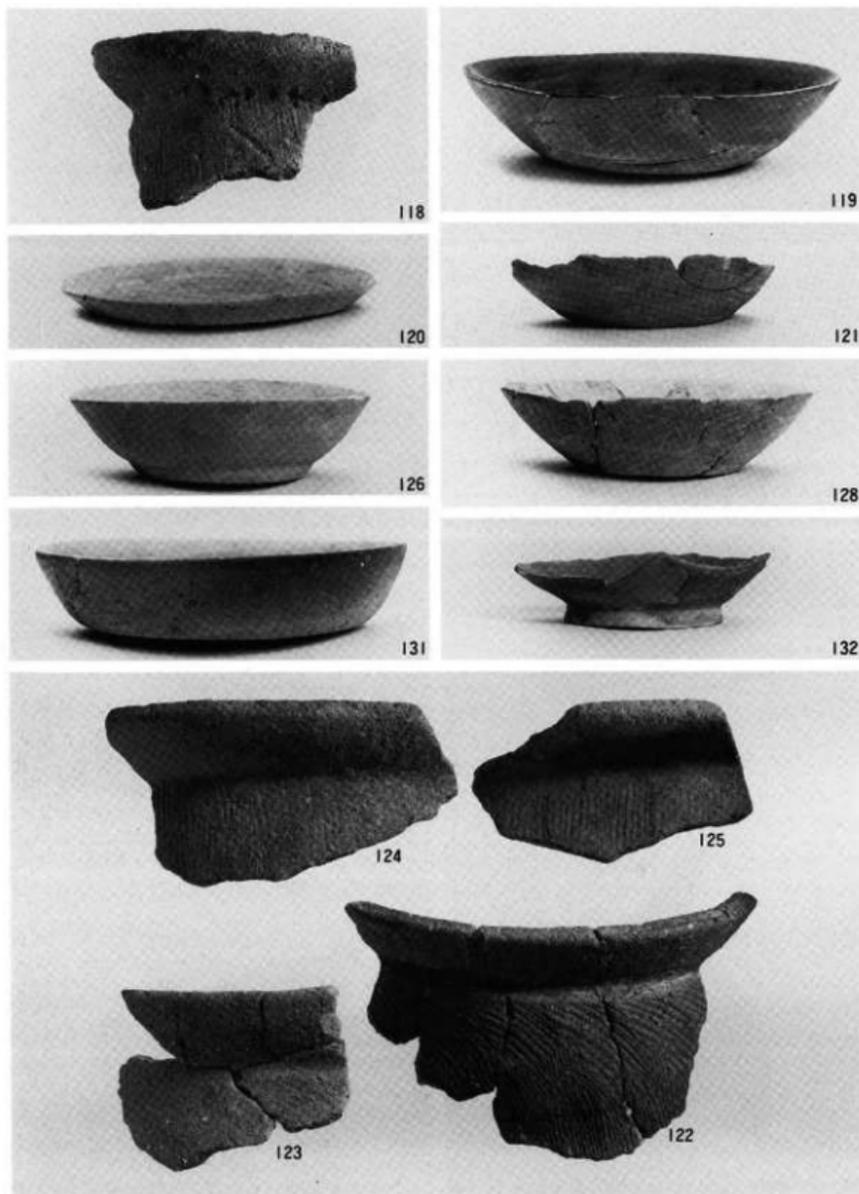
1. 包含層出土遺物 (弥生) ④



1. 包含層出土遺物 (弥生) ⑤



1. 包含層出土遺物 (古墳)



1. SK 2 出土遺物 (118~121) ・包含層出土遺物 (古代122~132)



1. 調査地遠景（南より）



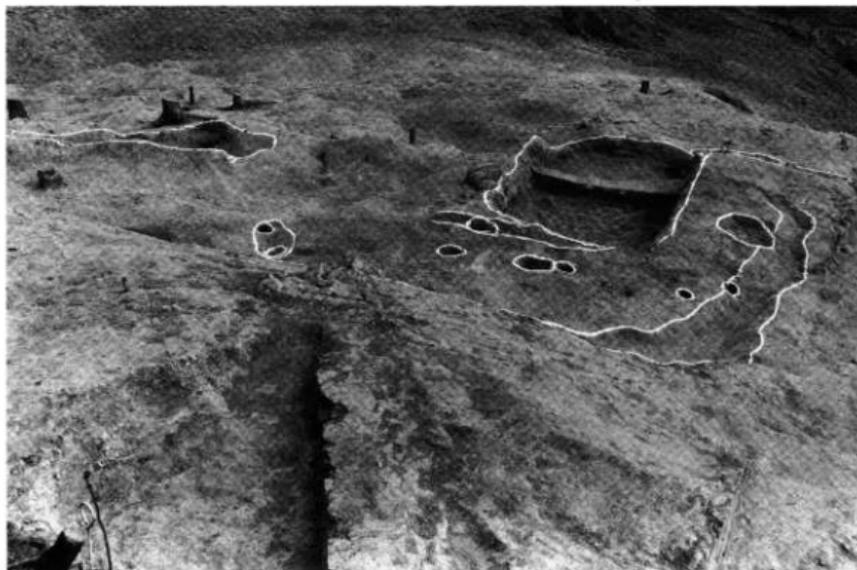
2. 松山平野北部を望む（北東より）



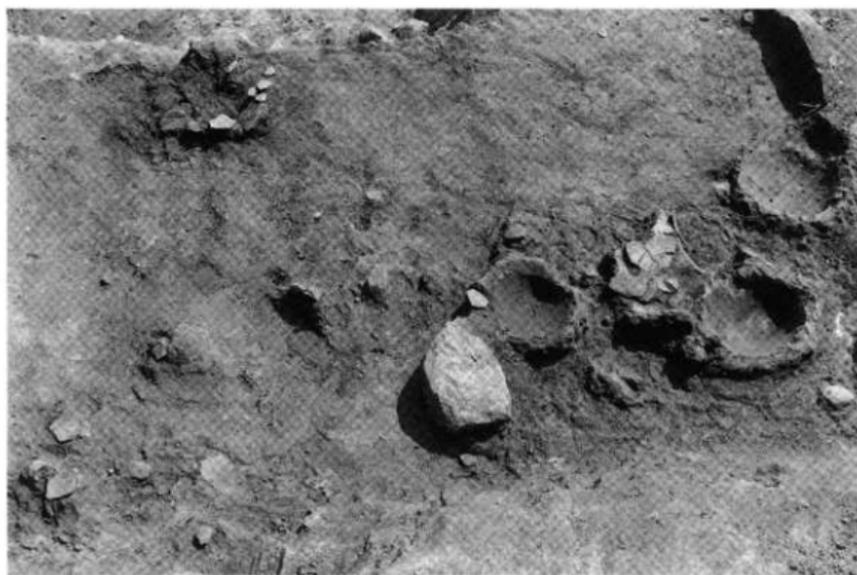
1. 調査区西部発掘状況（南東より）



2. SB1（東より）



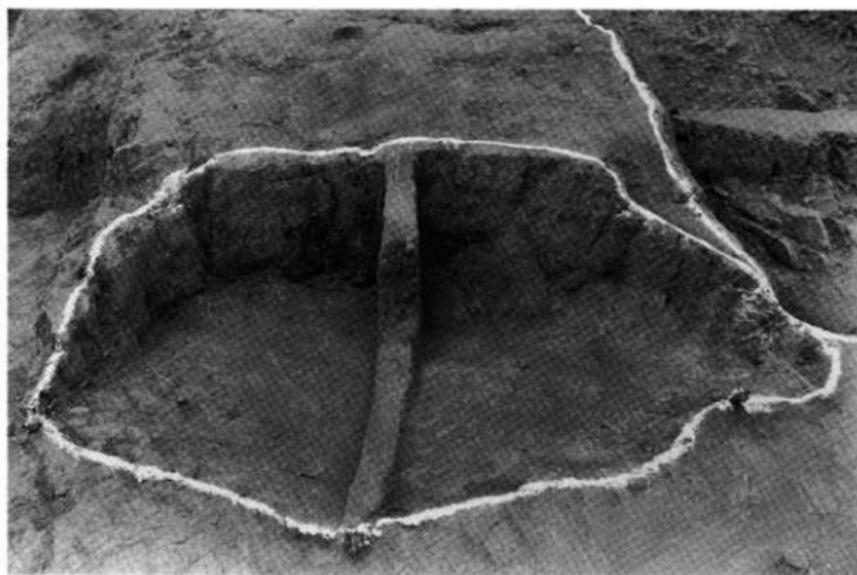
1. SB2 (北より)



2. SB2 遺物出土状況 (北より)



1. SK1 (南より)



2. SK7 (南より)



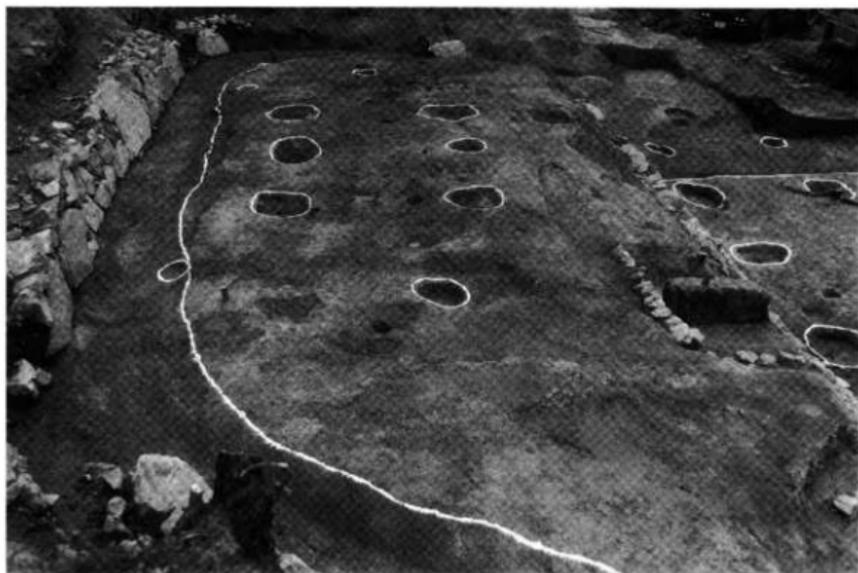
1. 1号墳丘 (西より)



2. SD1 (北東より)



1. 掘立柱建物址（北より）



2. 掘立柱建物1（西より）



1. 掘立柱建物2 (南より)



2. 掘立柱建物2 (西より)



1. SB2 出土遺物①



12



9



13



11



14



15



18



19



21



20



23



24



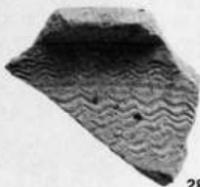
25



26



27



28

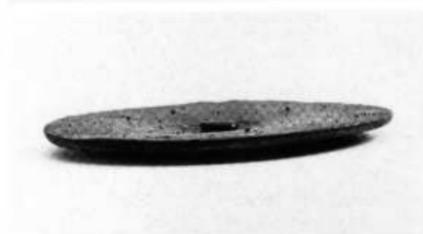


30

1. SB 3 (19・20) ・SK 6 (21) ・表採 (23) ・1号墳 (24-28) ・2号墳 (30) 出土遺物



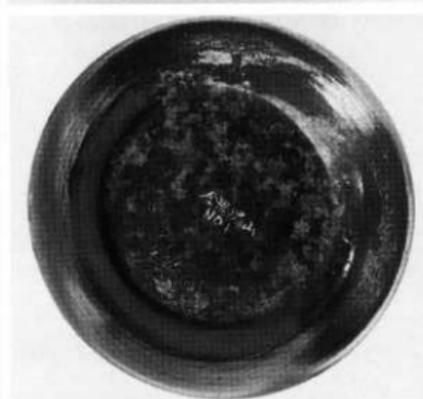
1. 掘立1出土遺物①



33



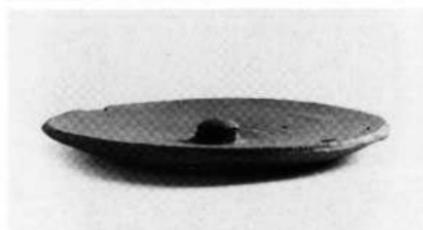
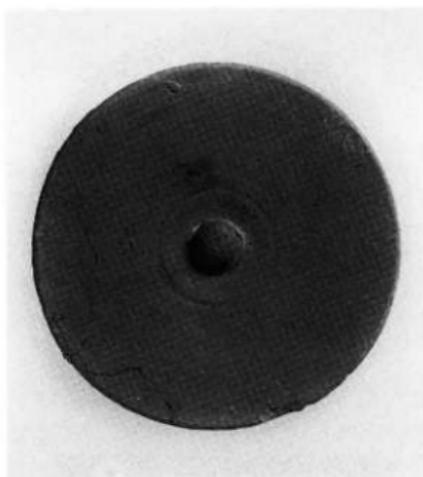
32



1. 掘立1出土遺物②



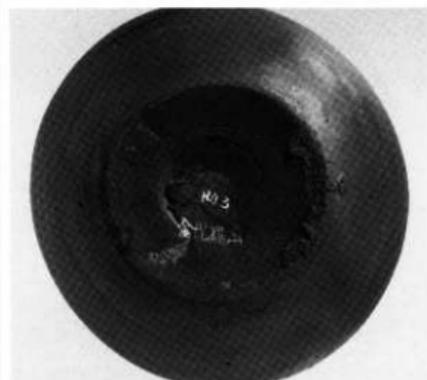
1. 掘立1出土遺物③



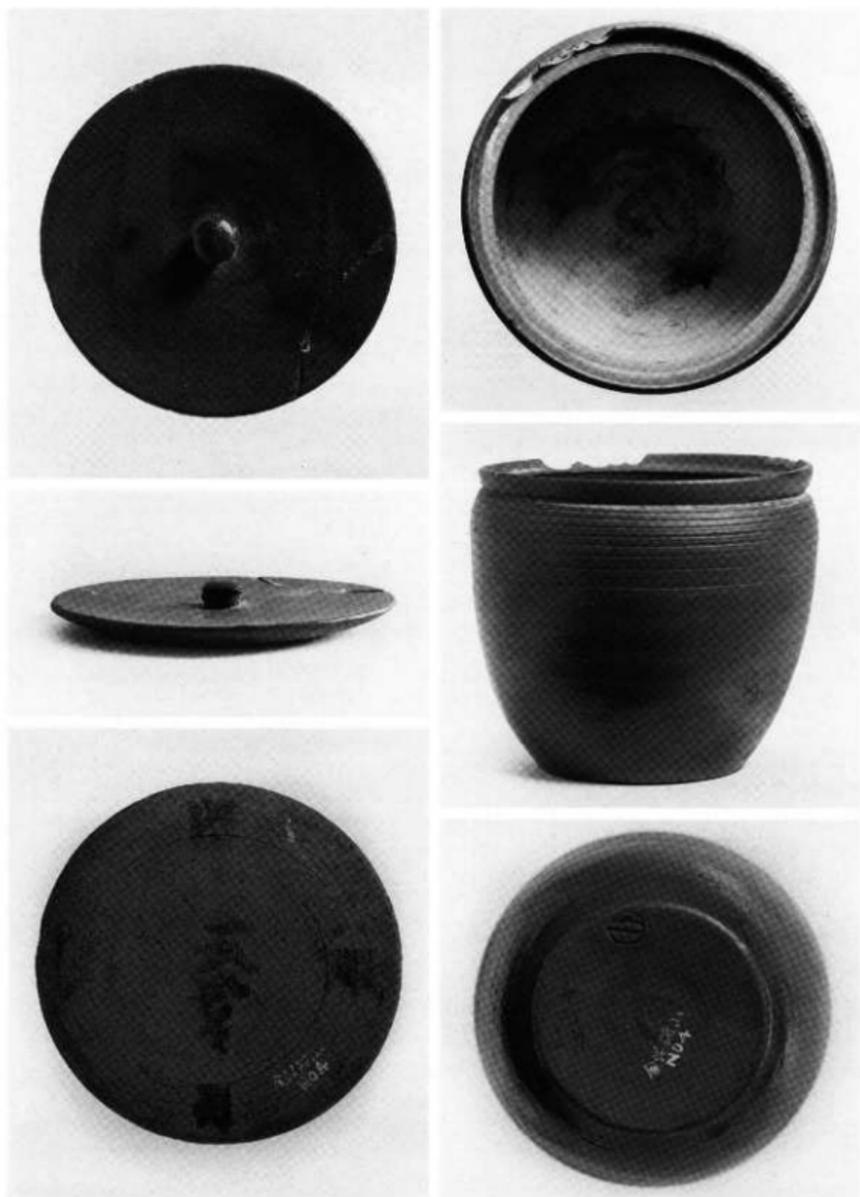
35



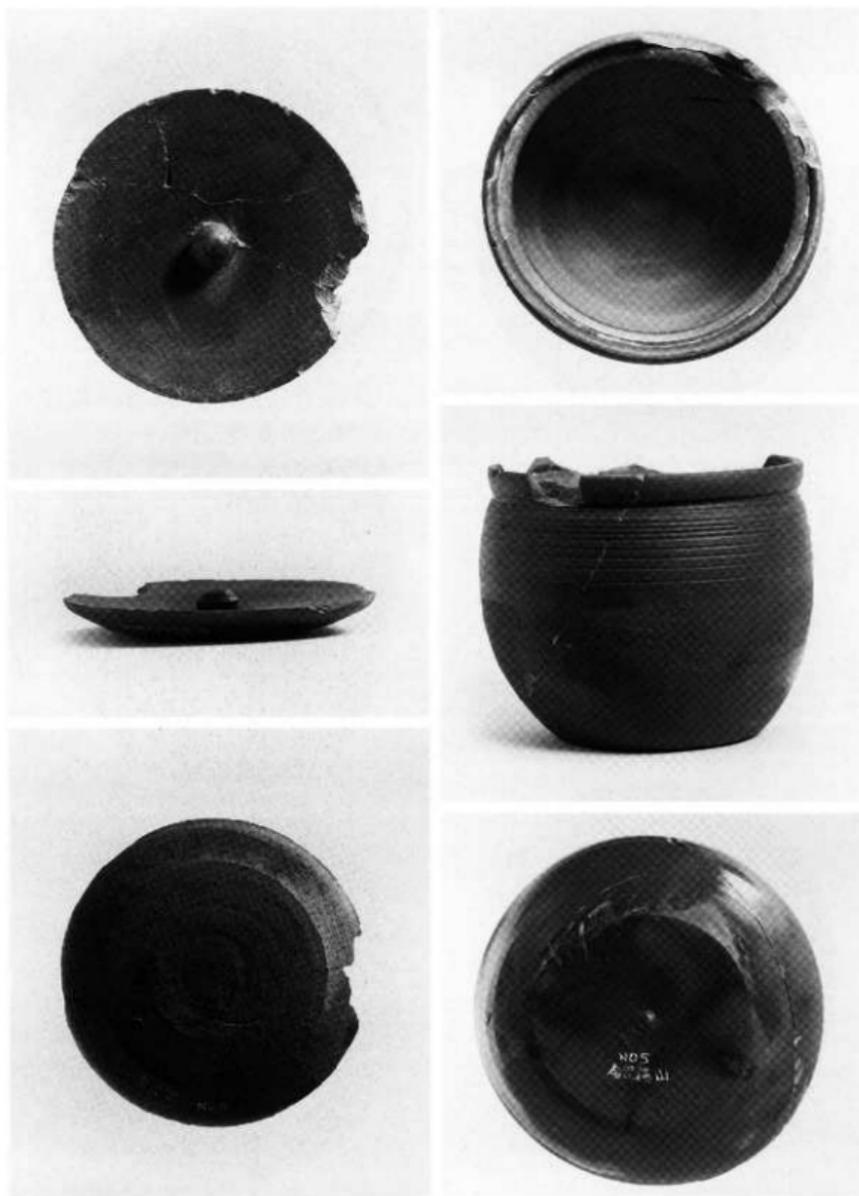
34



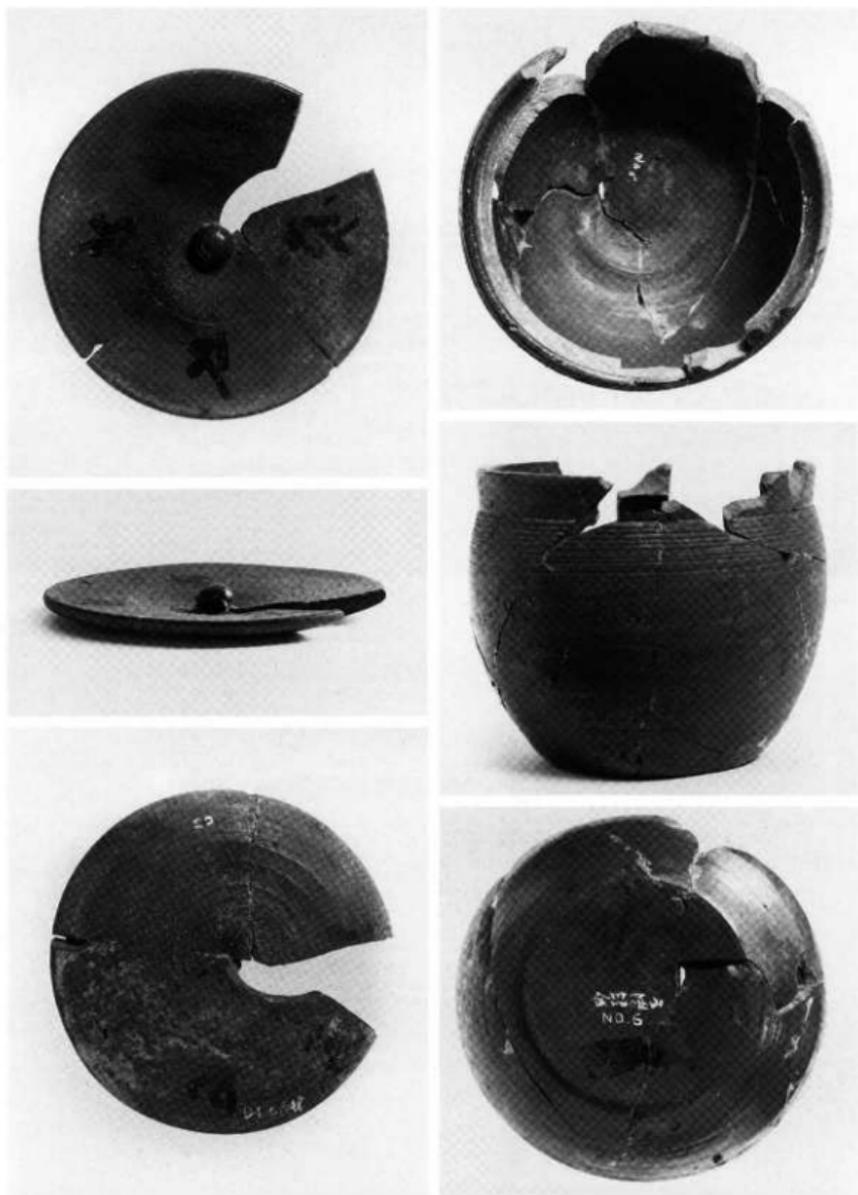
1. 掘立1 出土遺物④



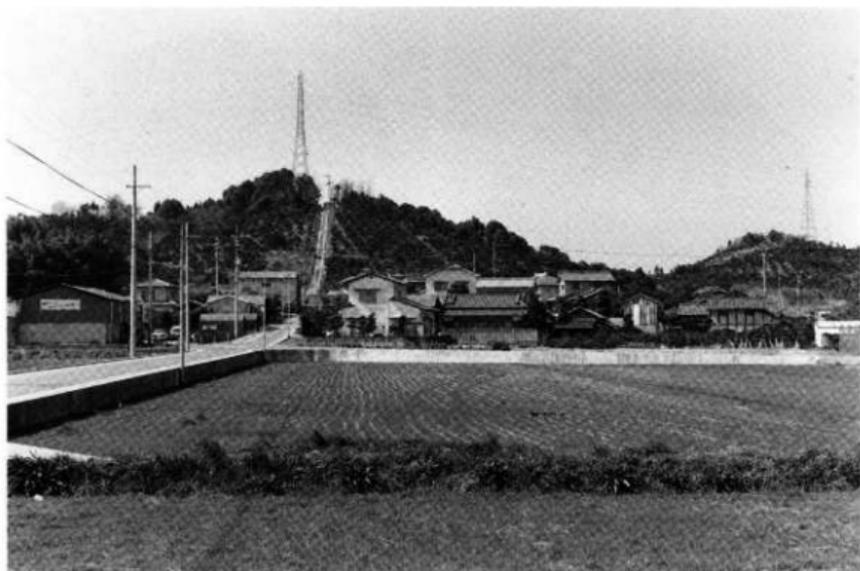
1. 掘立1出土遺物⑤



1. 掘立1出土遺物⑥



1. 掘立1出土遺物⑦



1. 調査地遠景①(東より)



2. 調査地遠景②(北東より)



1. 1号墳検出状況(南より)



2. 1号墳周溝①(南より)



1. 1号墳周溝② (北西より)



2. 1号墳周溝土層 (西より)



1. 1号墳周溝遺物出土状況①(東より)



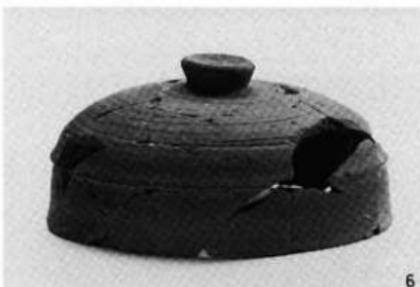
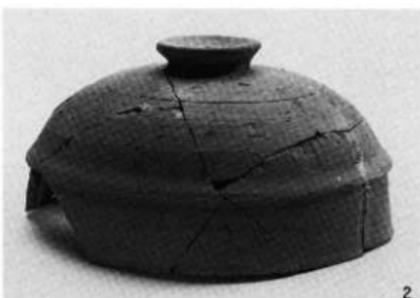
2. 1号墳周溝遺物出土状況②(北西より)



1. 1号墳① (北西より)



2. 1号墳② (南西より)



1. 1号墳出土遺物①



1, 1号墳出土遺物②



13



14



15



16

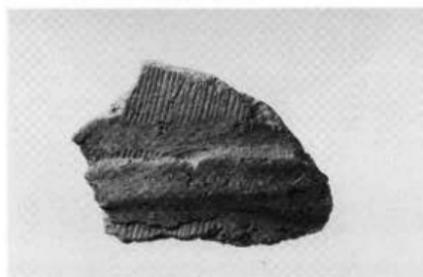
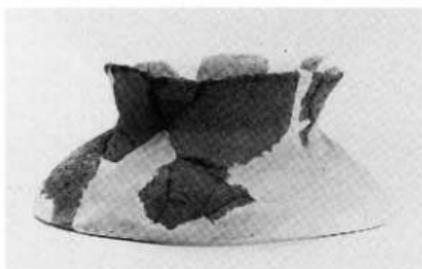
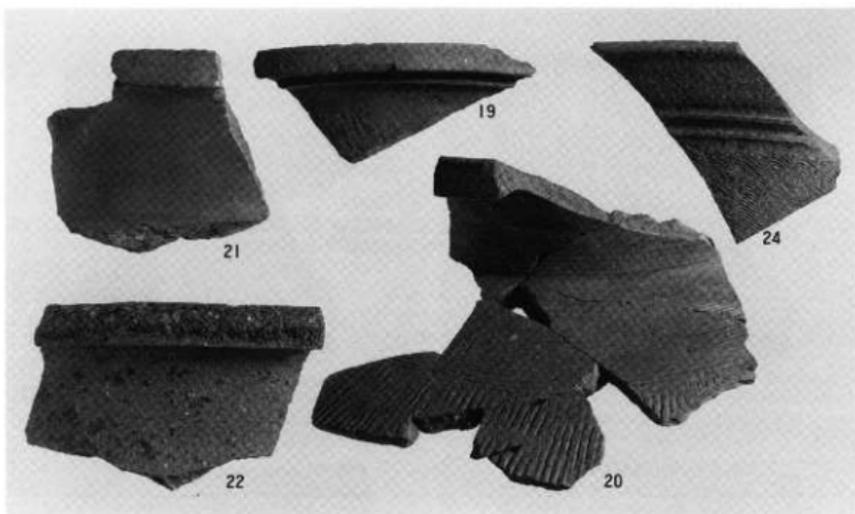


17



18

1. 1号墳出土遺物③



1. 1号墳出土遺物④

松山市文化財調査報告書 第36集

## 和気・堀江の遺跡

---

平成5年10月31日 発行

編集 松山市教育委員会

発行 〒790 松山市二番町4丁目7-2

TEL (0899) 48-6605

財団法人 松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

〒791 松山市南斎院町乙67番地6

TEL (0899) 23-6363

印刷 岡田印刷株式会社

〒791 松山市湊町7丁目1-8

TEL (0899) 41-9111

---